

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 57 集

うし の まつ
牛ノ松遺跡

1995

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第57集 『牛ノ松遺跡』正誤表

例言	誤：堀木真美子 正：堀木真美子（調査研究員）
図版目次	誤：図版18 D区K K60 正：S K60
48頁	誤：第44図 その他の遺構出土の土器・土製品（1/4） 正：第44図 その他の遺構出土の土器・土製品（370～391は1/4、392は1/6）
59頁	誤：2. 牛ノ松遺跡出土土師器皿の蛍光X線分析 正：4. 牛ノ松遺跡出土土師器皿の蛍光X線分析
65頁	誤：3. 牛ノ松遺跡出土の土師器皿について 正：5. 牛ノ松遺跡出土の土師器皿について
103頁	誤：右側中 61区 全景（南東から） 正： 91区 全景（南東から）

序

財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、国道23号線岡崎バイパス建設工事に伴う事前調査として、額田郡幸田町牛ノ松遺跡の発掘調査を愛知県の委託事業として平成3年度・4年度に実施し、この度ようやくその報告書をまとめることができました。牛ノ松遺跡は旧石器時代から縄文時代のまとまった石器群が発見され、本県では数少ない事例として注目されました。また鎌倉時代から室町時代の屋敷地も検出されており、「宋三彩洗」など多数の遺物が出土しております。

調査にあたり、愛知県教育委員会のご指導、並びに地元住民の方々及び関係諸機関・関係者の皆様に格別のご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

また、本報告書が地域史研究や埋蔵文化財に対するご理解の一助となれば幸いと存じます。

平成7年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
理事長 安部 功

例 言

1. 本書は愛知県額田郡幸田町大字須美字牛ノ松に所在する牛ノ松遺跡の調査報告書である。
2. 調査は国道23号岡崎バイパス建設に伴う事前調査として、建設省中部地方建設局名四国道工事事務所から愛知教育委員会を通じて委託をうけ、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが平成3年度から4年度にかけて13500㎡の面積の発掘調査を実施した。調査終了後は、平成5年度から6年度の2か年をかけて資料の整理・研究を行った。
3. 調査担当者は下記のとおりである。

平成3年度 大橋正明(本センター主査、現幡豆町立東幡豆小学校教諭)、野本欽也(同調査研究員、現岡崎市立六ツ美中部小学校教頭)

平成4年度 大橋正明(同課長補佐兼主査)、杉浦茂(同調査研究員)、宮腰健司(同調査研究員)、川井啓介(同調査研究員、現岡崎北高校教諭)、余合昭彦(同調査研究員)

なお、調査担当区については第1表に示した。
4. 調査にあたっては、次の各関係機関のご協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、建設省名四国道工事事務所、幸田町教育委員会
5. 本書の執筆分担は下記のとおりである。なお、編集は宮腰健司が行った。

I 杉浦茂

IV-1～3 服部俊之(調査研究員)

IV-4 三辻利一(奈良教育大学教授)

IV-5 川井啓介

その他は宮腰健司が執筆した。

また石材同定は堀木真美子が行った。
6. 土師質の土器に関しては、陶磁器と区別するために番号に丸をつけた。
7. 調査区の座標は、国土座標Ⅶ座標系に準拠する。
8. 遺構の旧番号と新番号の対照、遺物の登録番号は表として本文中に示した。
9. 調査に関する資料はすべて愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
10. 本書の執筆にあたり下記の諸氏のご指導・ご助言をいただいた。

記して感謝したい。(敬称略)

安達厚三、荒井信貴、岡本直久、川合剛、佐野康雄、中野晴久、贅元洋、北條献示、水野裕之

目 次

I 調査の概要と環境	
1. 調査の経緯	1
2. 遺跡の立地と環境	3
II 遺 構	
1. 遺構・層序の概要	7
2. 谷	8
3. 下面遺構	8
4. 上面遺構 1	13
5. 上面遺構 2	25
III 遺 物	
1. 旧石器時代～縄文時代	27
2. 鎌倉時代～室町時代	32
3. その他の遺物	44
IV 自然科学的分析	
1. 牛ノ松遺跡の地形と地質	52
2. 旧石器包含層の形成について	54
3. 牛ノ松遺跡の火山灰	56
4. 牛ノ松遺跡出土土師器皿の蛍光X線分析 三辻利一	59
5. 牛ノ松遺跡出土の土師器皿について	65
V まとめ	71
遺構一覧表	78
遺物一覧表	80
図版	84

図版目次

遺構図割付表

図版 1

遺構図

図版11

写真図版

図版12	A区下面 石器群出土状況 A区下面 Bセクション南部 B区 谷から出土した尖頭器 29・30・16・2
図版13	宋三彩洗 (175) A区 全景 SD01 遺物出土状態 SD01 宋三彩洗出土状態
図版14	調査前風景 C区 全景 A区 谷セクション (Bセクション)
図版15	A区下面 Fセクション A区下面 全景 B区谷 尖頭器 (29) 出土状態 A区谷 石鏃 (34) 出土状態
図版16	A区 全景 A区 SD01遺物出土状態 A区 SD01 A区 SK21遺物出土状態
図版17	A区 SB01・02、SA01 A区 SD03と05でつくる出入口 B区 SB03・04、SA02
図版18	A区 SD06集石 D区 SD28、SK60、SB06 D区 SD28遺物出土状態 D区 KK60 D区 SB08
図版19	C区 段丘崖とSA03・04 D区 SK70と谷セクション C区 東部全景 D区 西部近世以降の区画溝 91区 全景 C区 SD31・32・33
図版20	B区 SK31焼土土坑 B区 SB03・P21セクション B区 SK28 A区 SK03 C区 SA03・P94 A区 SK14セクション
図版21	1・3～15・32～43
図版22	17～19・21・22～26・31・491・502・503
図版23	47・49・52・57・63・64・73・77・78 83・86・93・94・97・100・103・107・108・112・114・115・118・120
図版24	122・125・126・129・131・137～140・144～146・148・150～152・154・155・162・177・178・182・187
図版25	212・233・235～237・241・250・251・254・257・265・270～272・280・281・304・306・307・308・317・318・320・321・323～326・328

図版26	338・342～344・358・361・363・365 176・195・196・200～203・268・369・393・395～397・401・402・加工円盤
------	---

挿図目次

第1図	調査区位置図	2
第2図	遺跡位置図	4
第3図	A区北東壁セクション	9・10
第4図	谷セクション	11・12
第5図	A区下面セクション	14
第6図	石器群出土分布1	15
第7図	石器群出土分布2	16
第8図	SD01セクション	17
第9図	SB01・SB02・SA01	19
第10図	SB03・SB04	19
第11図	SB05	20
第12図	SB08	20
第13図	SB06・SD28・SK60	22
第14図	SK03遺物出土状態	23
第15図	SK21遺物出土状態	24
第16図	SK70セクション	25
第17図	近世以降の区画溝	26
第18図	石器群出土石器 1	28
第19図	石器群出土石器 2	29
第20図	包含層出土石器 1	30
第21図	包含層出土石器 2	31
第22図	灰釉系陶器碗・皿分類	32
第23図	SD01出土遺物 1	33
第24図	SD01出土遺物 2	34
第25図	SD01出土遺物 3	35
第26図	SD01出土遺物 4	36
第27図	SD01出土遺物 5	37
第28図	SD01出土遺物 6	37
第29図	SD01出土遺物 7	38
第30図	SD01出土遺物 8	39
第31図	SD32出土遺物 1	41
第32図	SD32出土遺物 2	42
第33図	SD32出土遺物 3	43
第34図	SD02出土遺物	45
第35図	SD05出土遺物	45
第36図	SD06出土遺物	45
第37図	SD07出土遺物	45
第38図	SD28出土遺物	46
第39図	SK03出土遺物	47
第40図	SK14出土遺物	47
第41図	SK62出土遺物	47
第42図	SK60出土遺物	47
第43図	SK70出土遺物	47
第44図	その他の遺構出土の土器・土製品	48
第45図	墨書土器・穿孔土器・陶丸	49
第46図	青磁・白磁	49
第47図	加工円盤	50
第48図	その他の遺物	51
第49図	牛ノ松遺跡周辺の地質図	53
第50図	谷の堆積物試料採取地点断面図と 検出した火山ガラス	54
第51図	旧石器包含層分布断面図	55
第52図	火山灰層序	58
第53図	火山灰の産状	58

第54図	火山灰の顕微鏡写真	58
第55図	牛ノ松遺跡出土土師器皿のクラスター分析	62
第56図	牛ノ松遺跡出土土師器皿A・B群のK-Ca分布図	63
第57図	牛ノ松遺跡出土土師器皿A・B群のRb-Sr分布図	63
第58図	牛ノ松遺跡出土土師器皿C・D群のK-Ca分布図	63
第59図	牛ノ松遺跡出土土師器皿C・D群のRb-Sr分布図	63
第60図	麻生田大橋遺跡出土土師器皿のRb-Sr分布図	63
第61図	八ツ面山北部遺跡出土土師器皿のRb-Sr分布図	63
第62図	牛ノ松遺跡出土土師器皿のFe因子の比較	64
第63図	牛ノ松遺跡出土土師器皿のNa因子の比較	64
第64図	牛ノ松遺跡出土土師器皿径高指数	65
第65図	土師器皿分析試料・牛ノ松遺跡	69
第66図	土師器皿分析試料・麻生田大橋遺跡	70
第67図	土師器皿分析試料・八ツ面山北部遺跡	70
第68図	遺構変遷図	74
第69図	灰釉系陶器碗の口径・底径・器高分布 1	75
第70図	灰釉系陶器碗の口径・底径・器高分布 2	76
第71図	青白磁出土地点	77
第72図	墨書土器・加工円盤・陶丸出土地点	77

表目次

第1表	調査工程表	1
第2表	藤原顕長一族と藤原実定一族のつながり	6
第3表	火山灰層の岩石記載的性質	58
第4表	分析データ一覧表	61
第5表	分析試料一覧表 1	67
第6表	分析試料一覧表 2	68
第7表	出土遺物組成	73
遺構一覧表		
	SD	78
	SB・P	78
	SA・P	78
	SK	79
遺物一覧表		
	土器・陶器・磁器	80
	加工円盤	82
	土器・土製品	83
	石器・石製品	83
	金属器	83
	牛ノ松遺跡胎土分析試料	83
	麻生田大橋遺跡胎土分析試料	79
	八ツ面山北部遺跡胎土分析試料	79

I 調査の概要と環境

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

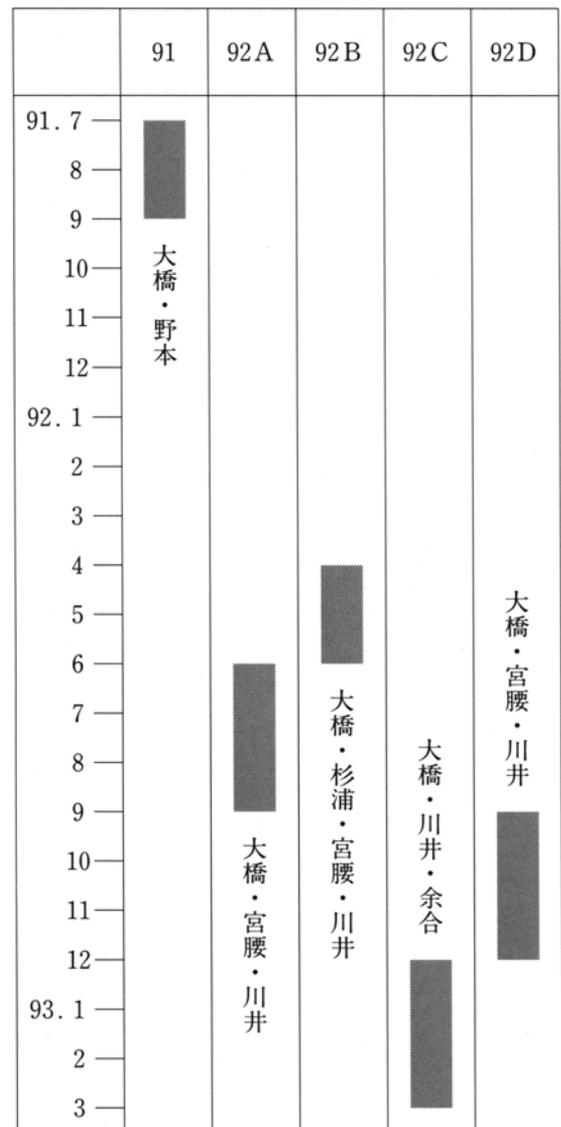
牛ノ松遺跡は、額田郡幸田町大字須美字牛ノ松に所在する。建設省中部地方建設局名四国道工事事務所により国道23号の交通量緩和を目的として、バイパスの建設が計画されたことに伴い、平成3年7月～8月にかけて500㎡にわたって調査を実施した結果、中世の集落跡であるという結論に達し、平成4年度に本調査に着手した。

(2) 調査の経過

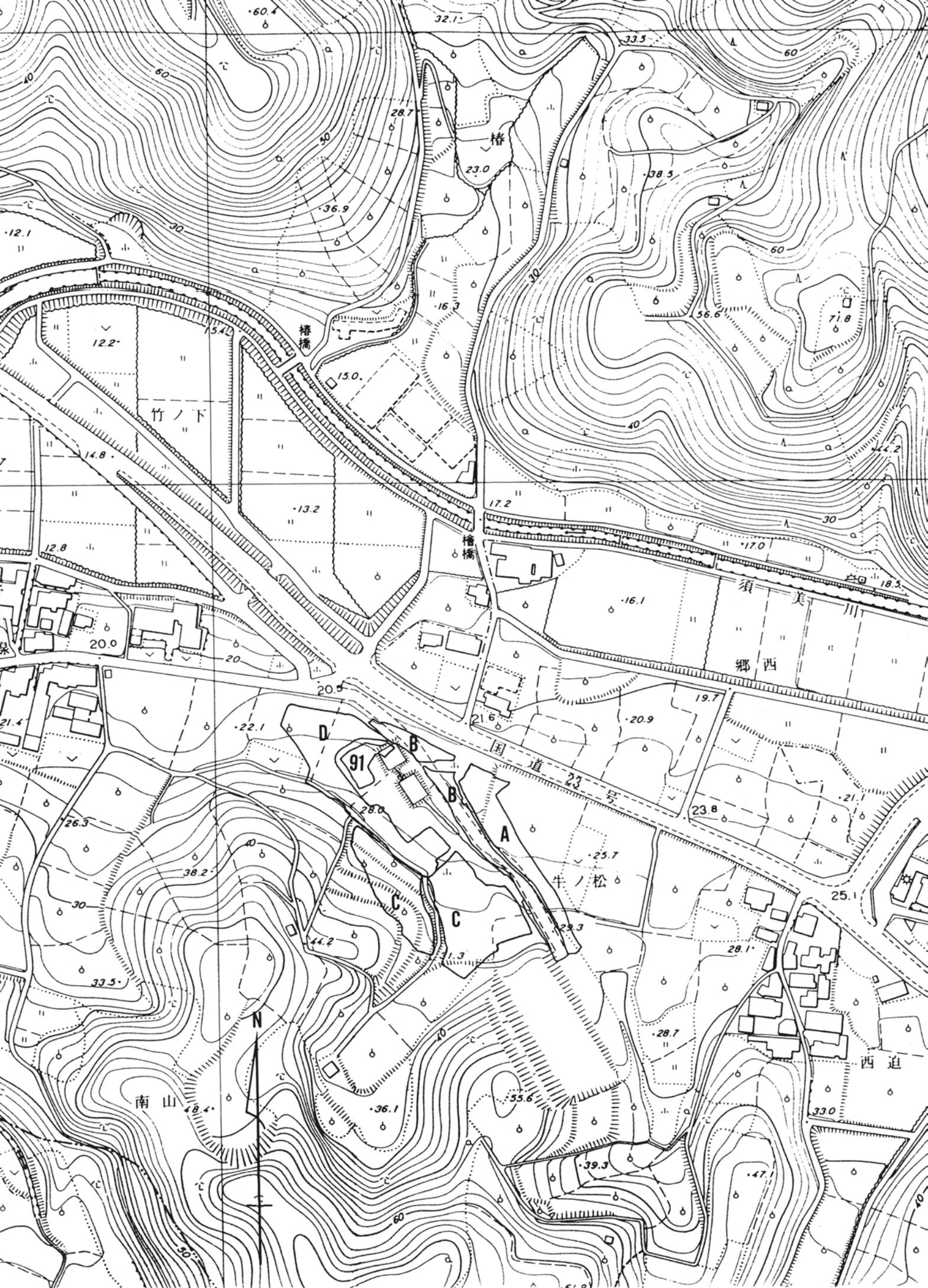
平成4年度は13000㎡の調査面積が計画され、第1表の調査工程のように平成4年4月～2月にかけて行った。調査区に関しては、工事用土砂運搬道路を通さざるを得なかったことや、沈砂池の存在により第1図のように4調査区に区分し、それぞれ92A～D区と呼称した。調査は取り付け道路用として92B区から始め、以下A区、D区、C区の順に実施した。

遺構の検出は、表土をバックホウで除去した後、中世の包含層を掘削し、黄褐色砂上面で行った。また、黄褐色砂層内に旧石器～縄文時代の遺構・遺物の存在が想定されたため、中世面の調査後5mメッシュでトレンチを掘削し、92A区において遺物群を検出した。また、遺構の測量は、各調査区ごとにヘリコプターによる航空測量を実施し、必要に応じて手測りによる実測や写真撮影を行った。

なお、平成4年8月1日にはそれまでの調査成果をもとに現地説明会を開催し、地元の住民をはじめ研究者等約250名の参加を得ることができた。



第1表 調査工程表



第1図 調査区位置図

2. 遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡周辺は、美濃三河高原の南端に位置し、幡豆山塊と名づけられた低丘陵となっている。東部丘陵とも呼ばれる本遺跡周辺の幡豆山塊は、侵食谷が木の枝のように形成され、その斜面は複雑な様相を呈している。額田郡幸田町の須美山を水源とする須美川は、この山塊を侵食しつつ西流し広田川に合流する川であるが、本遺跡はこの須美川の氾濫原の南、低丘陵が台地状となった所に立地している。

本遺跡のある幡豆山塊の西部周辺は、西尾市下羽角町住崎において有舌尖頭器が採集されていることから、後期旧石器時代には生活の場となっていたことが推測されていた。本調査において木葉形尖頭器や細石刃核が出土したことで、それが裏づけられることとなった。縄文時代においても釜田貝塚や釜田遺跡等が丘陵端に見られるが、弥生時代中期以降になり本センターが調査を行った岡島遺跡（註1）をはじめとして、沖積低地上に多くの集落が営まれるようになる。

本遺跡の位置する額田郡幸田町須美地区には、古墳時代後期の群集墳が所在する。その内の須美1号墳は、蘇美天神社の境内にあり、須美の地の開拓の祖であるとする建蘇美命の墓とする伝承がある。いずれにしても本地区の開発の始まりはこの時期に設定することができる。

なお、集落を見おろす位置に鎮座する蘇美天神社は平安時代末期に作成されたと考えられる『三河国内神明名帳』（註2）に「正五位下蘇美天神 坐幡豆郡」と見え、古くから須美の集落の中心をなす神社であったことがわかる。

註

1. 池本正明編1990『岡島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
池本正明編1993『岡島遺跡II・不馬入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
2. 『続群書類従』第三輯上 所収
*なお、本遺跡を含めた西尾市東部周辺の歴史的環境については川井啓介編『室遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 第I章第3節「歴史的環境」を参照。

(2) 蘇美御厨と藤原顕長

本遺跡の所在する須美地区の史料上の初見は、建久三（1192）年の「伊勢大神宮神領注文」（註1）においてであり、そこには「蘇美御厨外 領家前左大臣家 件御厨、往古神領也、而保延六年重貢進、久安元年被下奉先 宣旨也 供祭物 上分米六石 起請雑用料三十石」と見える。これによれば、この地区はかねてから伊勢神宮領であったが、保延六（1140）年に再寄進され、久安元（1145）年に奉免の宣旨を被ったことで、伊勢外宮領として蘇美御厨が成立したことになる。また、領家職は前左大臣家が保有していたこともわかる。平安時代の11世紀中ごろから12世紀にかけて全国的に権門勢家への荘園の寄進が盛んになるが、それと同時に伊勢神宮や上・下賀茂社による御厨の設置も多く見られるようになる。御厨とはいえこの時期その実態は荘園と同じであり、その意味において本遺跡の所在する須美地区も、蘇美御厨として伊勢神宮を本家とする荘園化の道を歩んだことになる。

ここでは、今少し掘り下げて蘇美御厨の成立の背景を見てみたい。

A 三河国司藤原顕長

- カッチェウ塚古墳(柏塚)
- 槽塚遺跡
- 須美第1号墳
- 須美第2号墳
- 南山古墳
- 松坂第1号墳
- 松坂第2号墳

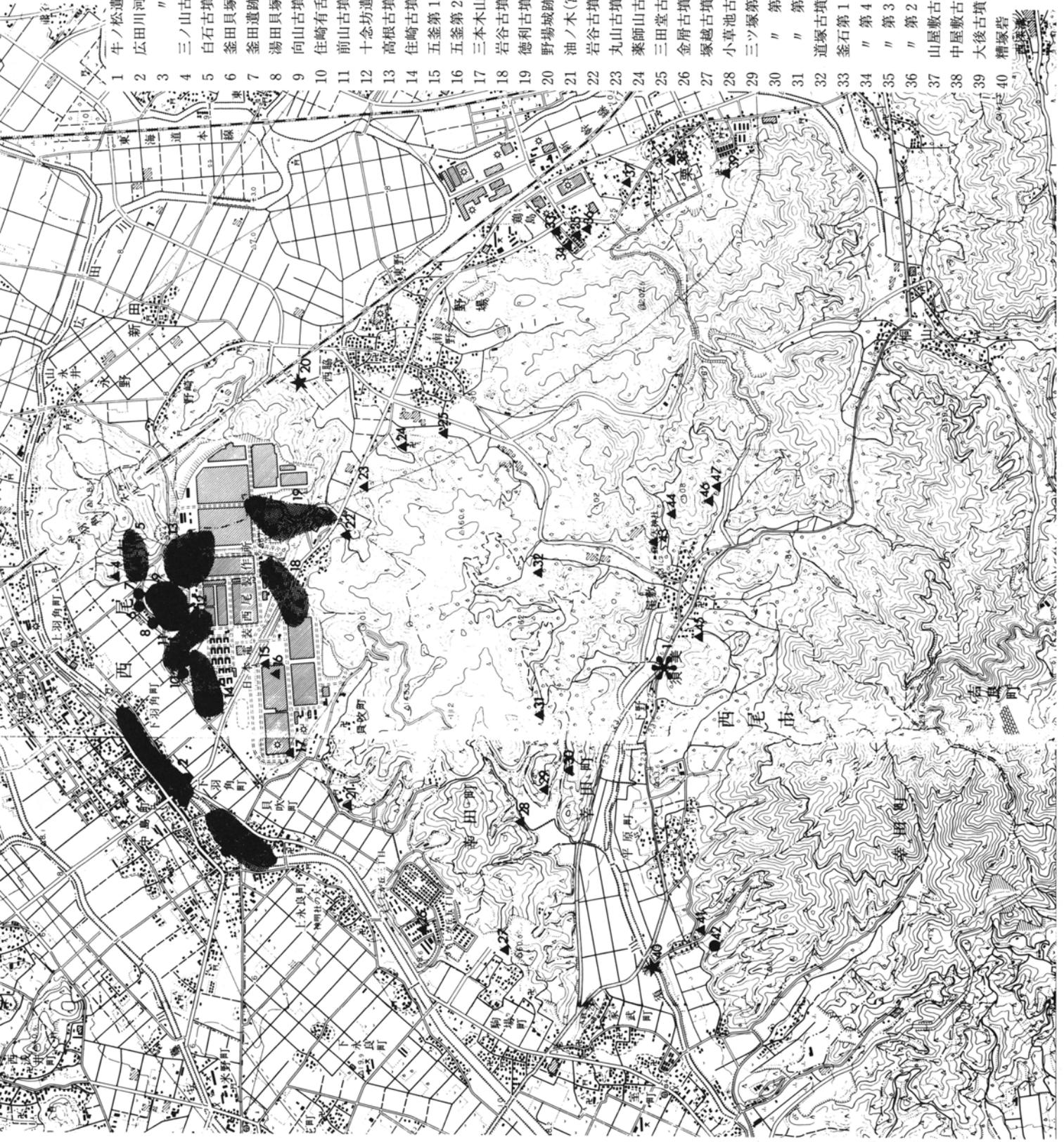
- 41 牛ノ松遺跡
- 42 広田川河床遺跡B
- 43 須美第1号墳
- 44 須美第2号墳
- 45 南山古墳
- 46 松坂第1号墳
- 47 松坂第2号墳

- 1 牛ノ松遺跡
- 2 広田川河床遺跡B
- 3 須美第1号墳
- 4 須美第2号墳
- 5 南山古墳
- 6 松坂第1号墳
- 7 松坂第2号墳

- 8 湯田貝塚
- 9 向山古墳群
- 10 住崎有舌尖頭器出土地
- 11 前山古墳群
- 12 十念坊遺跡
- 13 高根古墳群
- 14 住崎古墳群
- 15 五釜第1号墳
- 16 五釜第2号墳
- 17 三本木山古墳
- 18 岩谷古墳群
- 19 徳利古墳群
- 20 野場城跡
- 21 油ノ木(宮西)古墳
- 22 岩谷古墳
- 23 丸山古墳
- 24 薬師山古墳
- 25 三田堂古墳
- 26 金屑古墳
- 27 塚越古墳
- 28 小草地古墳
- 29 三ツ塚第1号墳
- 30 三ツ塚第2号墳
- 31 三ツ塚第3号墳
- 32 道塚古墳
- 33 釜石第1号墳
- 34 釜石第4号墳
- 35 釜石第3号墳
- 36 釜石第2号墳
- 37 山屋敷古墳
- 38 中屋敷古墳
- 39 大後古墳
- 40 槽塚
- 41 柏塚

調査の概要と環境

第2図 遺跡位置図



蘇美御厨の成立時に三河守であった藤原顕長は、白河院の近臣として「夜の関白」ともいわれた(『今鏡』)藤原顕隆と源顕房の娘との間に三男として生まれた。異母兄弟に長男で鳥羽院の腹心として名高い顕頼、次男の顕能がいる(註2)。『公卿補任』によれば9歳にして紀伊守に任じられたのを振り出しに、三河守を保延二(1136)年から久安元(1145)年と久安五(1149)年から久壽二(1155)年の計17年間の長きにわたって務めている(註3)。彼はその後、中央政界で昇進を重ね、権中納言従二位にまで昇りつめたのである。『尊卑分脈』では仁安二(1167)年に50歳で亡くなったことから、彼の人生の中で20代から30代後半までの長期にわたり三河国や遠江国と深い関係をもっていたことになる。

彼は、三河守在任中自らの銘の入った陶器を渥美郡田原町の大アラコ窯で焼成させていたことはよく知られている(註4)。大アラコ窯の開窯された場所は国衙領と考えられており、その意味において当時三河国司であった顕長の主導による窯業生産が考えられてきた。この従来の見方に新地平をひらいたのが浅田員由氏である(註5)。氏によれば、渥美窯の開窯は顕長の個人的な野心のみに起因するものではなく、二つの要因があったことをあげている。それは、院を中心とする貴族層の新しい陶器に対する欲求であり、今ひとつは渥美半島における在地勢力の台頭であるとされる。当時渥美半島を中心として伊勢神宮の御厨や御園が多く置かれたが、その背景には伊勢神宮の権柄直らの神官層や在地に根をはった在庁官人層の動きが考えられている。とりわけ流通面にも携わったとされる神官層は、渥美窯製品に対する要求が強かったとする説である。さらに氏は、顕長が遠江守の在任中湖西窯にも大きな影響を与えたことを示唆している。窯業生産を通じた伊勢神宮の神官層と顕長との結びつきに対する指摘は重要である。

また、顕長の三河守在任中の業績に関してはこの他にも近年の研究で、大般若経の書写事業を行ったこともわかっている(註6)。

B 蘇美御厨の成立

「伊勢大神宮神領注文」によれば、保延六年に再寄進し、久安元年に御厨として成立した蘇美御厨であるが、ここではその領家である「前左大臣家」について考えてみたい。これについては当の「伊勢大神宮神領注文」に註が施され、「藤原実定カ」とある。左大臣藤原実定は、父に右大臣公能、母に藤原俊忠の女をもち、建久二(1191)年十月二十六日に53歳で亡くなった人物である。「伊勢大神宮神領注文」は建久三年八月に作成されていることから「前」と記されたものと思われる。

さて、この藤原実定であるが『尊卑分脈』によれば藤原顕長の女を側室に迎えているのである(註7)。つまり実定にとってみれば、顕長は義父にあたるのである。その上、顕長の妹のひとりには「左大臣実定妾」ともあることを指摘しておきたい(註8)。さらに注目すべきことに実定の祖父にあたる左大臣藤原実能は、その妻にやはり顕長の妹のうちのひとりをお娶っているのである(註9)。このように顕長の一族と実定の一族とは姻戚関係で深く結ばれていたことがわかる。これは従来見落とされてきた点であり、注目すべき事実である。

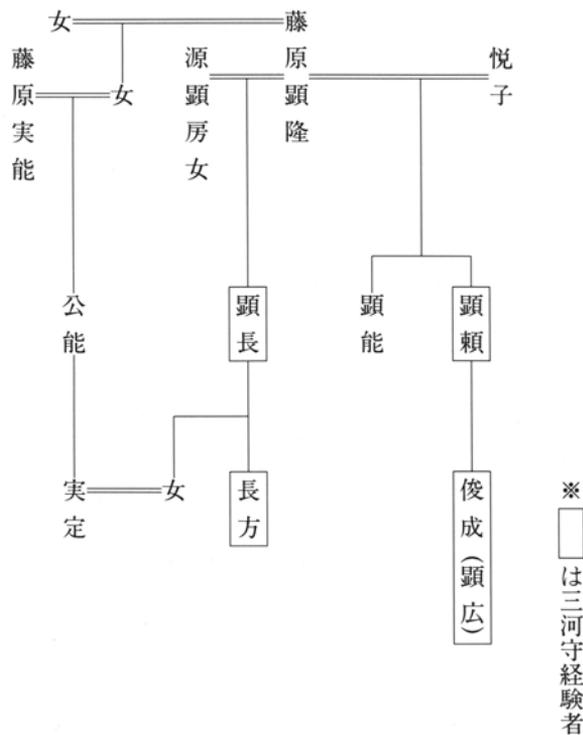
このように見てくると、蘇美御厨も領家である実定家と顕長とは、実定の祖父である実能以来の深い関係があることは明白である。それを頭に置いて蘇美御厨の成立を考えた時、御厨として立券させたい伊勢神宮の神官層の要望を受け、三河守であった顕長が立券の主体者となって実定家へ寄進した図式が浮かんでくるのである。さらに厳密に言えば、保延六(1140)年に寄進を受けたのは当時わずか2、3歳の実定ではなく、当時左大将であった祖父の実能であったのであろう。また、後世の史料にある「蘇美保政所職」(註10)のよう

に、「蘇美保」としてまとまりが見られる背景には、この地が公領色が強かったことが考えられる。保の成立に関してはかつて網野善彦氏が指摘したように、「国守と権門・官司等が行なった合作の作品」(註11)であり、その意味において蘇美御厨も国守顕長と伊勢神宮の神官層が一体となり、「往古神領」の地を再編成した可能性が強いように思われる。

いずれにしても三河の古代末期において、国守顕長の果たした役割は見逃せないものがあると言えよう。

註

1. 『鎌倉遺文』第614号 第二卷所収
2. 『尊卑分脈』第二篇「顕隆卿等孫」
3. 久安元年から久安五年までは遠江守を務めていた。そしてその間の三河守は、歌人として名高い藤原顕広(俊成)が任じられている。
4. 『田原町史』1971 第三章第三節
5. 浅田員由 1993「渥美寮の成立に関する一試論」『愛知県陶磁資料館研究紀要12』
6. 『新編岡崎市史第1巻』1992 第七章第七節
7. 前掲註2
8. 前掲註2
9. 『尊卑分脈』第一篇「公季公孫」
10. 建武三(1336)年十月十一日「今川文書」『大日本史料第六編三』
11. 網野善彦 1973「荘園公領制の形成と構造」『体系日本史叢書 土地制度史I』



第2表 藤原顕長一族と藤原実定一族のつながり

II 遺構

1. 遺構・層序の概要

(1) 遺構の概要

今回調査範囲となった牛ノ松遺跡の立地する地点は、須美川によって作り出された東西に延びる谷状の地形の南側斜面にある。西側はそのまま西尾市から三河平野に開け、東側は丘陵となり収束する。遺跡は、丘陵と大谷地形の間の中位段丘に位置しており、大谷地形に直交するようにはほぼ南北に延びる小谷地形を挟んで東西に広がっている(第1図)。遺跡内に存る谷地形(以後谷)は、広いところで幅30~40mを測り、丘陵に近づくに従い狭くなる。また当然のことであるが、水流は南から北に向かって流れている。

調査はまず、重機械により表土部分を除去したが、その時点で包含層は92B区(以後B区、他の調査区も同様)とD区の一部に存在するだけで、そのまま地山面が露出することが確認された。ただ、現状が柿畑等の畑になっていた関係で調査区内を縦横に近世以降の溝や石垣が存在するため、中世期以前の遺構が削平されている状況が各所にみられた。

中世期の遺構は、区画溝を巡らした屋敷地や土坑が谷をまん中に東西両側に展開していることが判ったが、A・B・91区が中心で、C・D区は遺構の密度が希薄になっている。谷は、幾条もの細い流れが複雑に入り組んで流れていたり、堆積と削平が幾度となく繰り返しているため、各時期の谷の旧地形を復元することはできなかった。また、

現在でも丘陵からの水流の通り道になっていて、調査時でも湧水が途絶えることがなかったことと、谷の下部が礫を多く含んだ層であったため、谷の調査はさらに困難を極めた。

最初に調査を行ったB区の谷の下層において、尖頭器や石核などの旧石器~縄文時代に属する石器が出土し、当該期の包含層や生活面の存在が想定された。そのため91区を除く各調査区で、中世面(上面)の調査終了後、国土座標に沿ってできる限り5m間隔で、幅60cmのトレンチを掘削した。その結果A区において当時期の石器群(下面)を検出している。

(2) 層序(第3図)

第3図はA区の北東壁のセクション図であるが、基本的には1.表土及び22.暗灰色砂の耕作土を取り去ると、薄い灰褐色砂や茶褐色砂の層があり、その下に地山と認定した黄褐色砂質シルトがみられる。中間の灰褐色や茶褐色砂層は無遺物で、中世の遺構面を形成する可能性もあったが、遺構検出が明瞭にできないため今回は除去して調査を進めた。また、その下層には青白色粘質シルトや灰褐色砂質シルト、黄赤褐色砂が60~100cmにわたって堆積し、基盤は礫層になる。下面の上部より石器群が出土しているが、層序も含めて詳細は後述する。また、上面の地山となった黄褐色砂質シルトは丘陵の上位にいくに従い、赤褐色砂質シルトに置き変わっていく。

2. 谷 (第4図)

調査区のほぼ中央を南北に走る谷は、幅が20mから40m、深さが上位で1m、下位で2.5mを測る。上記したとおり、現状でも谷部分には水流があって埋積や下刻が進んでおり、第4図にみられるように複雑な堆積状況を呈している。第4図のAセクションとBセクションはよく似た埋土で、砂層とシルト(砂質シルト)層が交互に堆積しており、時期差のある水流が繰り返し幾条も走っていたことが判る。またBセクションで特徴的なことであるが、山形に盛り上がったシルト(黄褐色砂質シルト)層がみられ、その部分が谷の中で「中州」状の地形を呈していたと考えられる。このような複雑な層位であったため、層別の遺物取り上げを行うことができなかった。ただ、Bセクションの西側にあるV字状の落込みは、確実に中世に遡るものであるし、下位の砂礫層や礫層には中世遺物は包含していない。その中世の遺物を含まない砂礫層・礫層であるが、旧石器～縄文時代の遺物である尖頭器や石核は、Bセクションの西部分の礫層の最上位、シルト層との境にあたるレベルか

ら出土している。下位の礫層はさらに掘削することが可能であったが、湧水と地層が硬いため断念した。部分的な掘り下げでは遺物・遺構は見つかっていない。

北に位置するCセクションはA・Bとはやや様相を異にしている。深さが急に深くなり、上流で埋土の主体であった砂層がみられなくなり、代わりに粘質土が堆積している。また、下層にあった礫層は、Cセクションの谷底によりさらに2m以上も下にもぐりこんでしまうことが判った。これは、北側を流れている須美川の影響を受けているためと思われ、調査区の北側が須美川の旧流路や氾濫源にあたっているためだと考えられる。中世の遺物は、粘質土の上層まで出土しており、粘質土には含まれなかった。

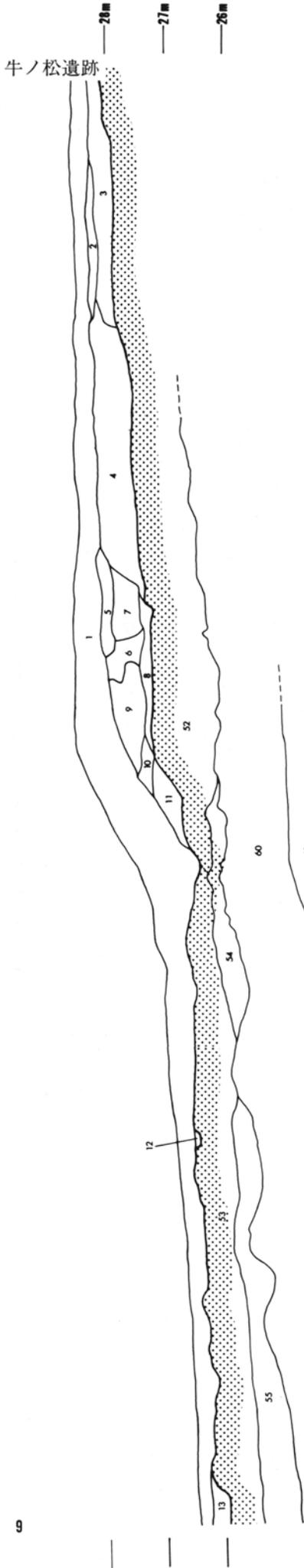
南側にあるAセクションの下層にあり、西にいくほど厚く堆積している砂層からは古墳時代の須恵器・土師器壺が出土しており、今回の調査ではこの部分にのみみられた。

3. 下面遺構 (第5～7図)

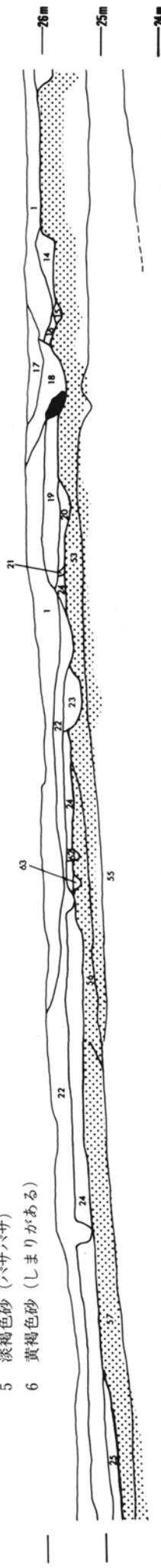
谷下層より出土した尖頭器・石核・石鏃により、中世以前の遺構面があるのではないかという想定のもとにトレンチを掘削したが、確実な当該期の遺構は検出できなかった。ただA区において、まとまった石核・細石刃・剥片・石鏃・磨石・土器片の出土があり、層位と石器・土器群の関連をある程度確認することができた。

第5図は下面のセクションと主要石器の出土レベルの関係である。セクションに関しては5mごとに記述したため、出土石器と層序の整合性がう

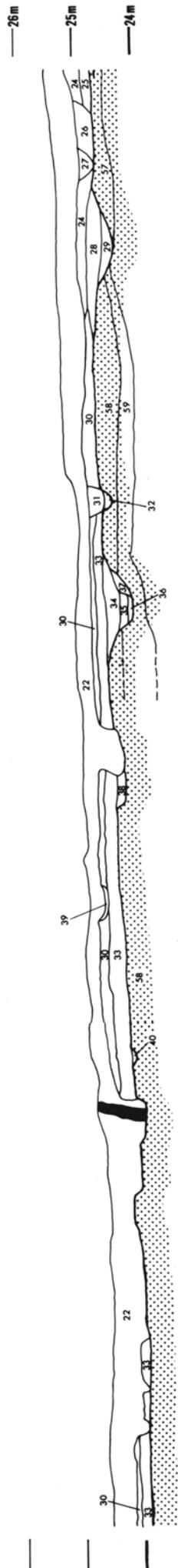
まく捉えられていないが、大枠としては問題ないものとする。層序は基本的に、上面の地山となった1. 黄褐色砂質シルト(やや灰色を呈する)の下に、南から北へ、東から西へと落ち込むように3. 暗黄褐色砂質シルト(やや灰茶色を呈する)があり、3の末端部分から始まり、さらに南と西に広がる茶褐色砂質シルトがその上に堆積している。2と3の下位にはまた黄褐色砂質シルトがみられるが、小礫を多量に含む部分である5と、そうでない4に分かれる。また2の茶褐色砂質シル



- 1 表土
- 2 淡赤褐色砂 (しまりがある)
- 3 黄褐色砂 (ハサハサ)
- 4 淡黄褐色砂 (ハサハサ)
- 5 淡褐色砂 (ハサハサ)
- 6 黄褐色砂 (しまりがある)
- 7 淡褐色砂 + 赤褐色ブロック
- 8 淡褐色砂と炭化物の互層
- 9 淡黄褐色砂 (砂質強い)
- 10 暗黄褐色砂 (ハサハサ)
- 11 暗黄褐色砂 (砂質強い)
- 12 暗黄褐色砂 + 炭化物
- 13 暗灰色砂 (ハサハサ)
- 14 黄灰色砂 (ハサハサ)
- 15 暗灰色砂 (砂質強い)
- 16 14と同じ
- 17 表土 + 炭化物を多量に含む
- 18 暗灰色砂 + 大型礫を多量に含む



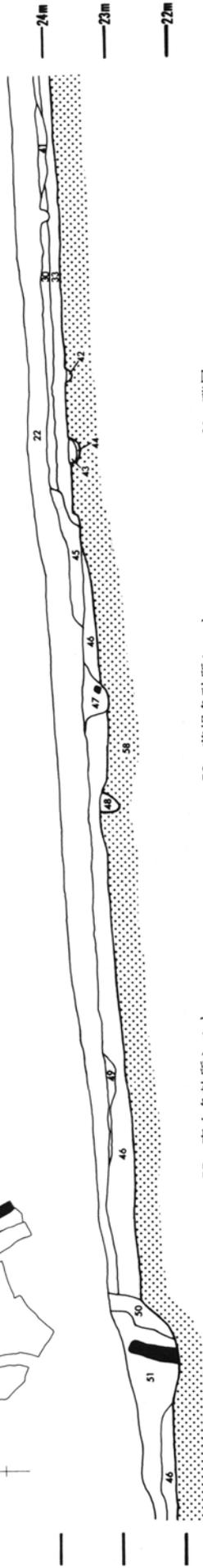
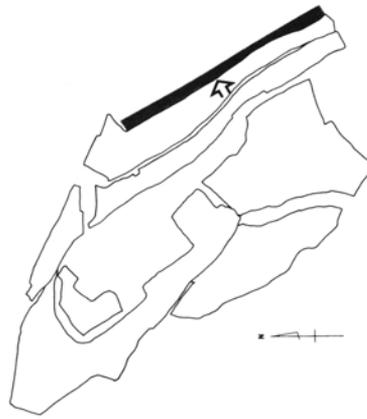
- 19 暗褐色砂質シルト
- 20 暗灰褐色砂
- 21 淡赤褐色砂
- 22 暗灰色砂 (ハサハサ)
- 23 灰茶褐色砂
- 24 暗茶褐色砂 (細砂・しまっている)
- 25 赤褐色砂 (細砂)
- 26 赤褐色砂
- 27 赤褐色砂 + 灰褐色砂ブロック
- 28 淡灰褐色砂 (細砂)
- 29 灰茶褐色砂 (砂質強い)
- 30 灰茶褐色砂 (しまっている)
- 31 淡褐色砂
- 32 淡灰褐色砂 + 中型礫を含む
- 33 暗灰褐色砂 (しまっている)
- 34 暗灰褐色砂
- 35 灰褐色砂
- 36 灰褐色砂 (砂質強い)



- 49 灰褐色砂+小型礫
- 50 暗灰褐色砂+赤褐色砂
- 51 暗灰褐色砂+青灰色砂+大型礫
- 52 赤褐色砂質シルト
- 53 黄褐色砂質シルト
- 54 暗黄褐色砂質シルト

- 43 暗茶褐色砂 (しまっている)
- 44 暗茶褐色砂+黄褐色砂ブロック
- 45 灰褐色砂
- 46 暗灰褐色砂+黄褐色砂ブロック
- 47 灰褐色砂+黄褐色砂ブロック+小型礫
- 48 暗灰褐色砂

- 37 暗灰褐色砂+黄褐色砂ブロック
- 38 灰褐色砂 (しまっている)
- 39 焼土+炭化物
- 40 灰褐色砂+黄褐色砂ブロック
- 41 暗茶褐色砂+黄褐色砂ブロック+小型礫
- 42 灰褐色砂+黄褐色砂ブロック



- 61 礫層
- 62 暗茶褐色砂+黄褐色砂ブロック
- 63 灰褐色砂+黄褐色砂ブロック

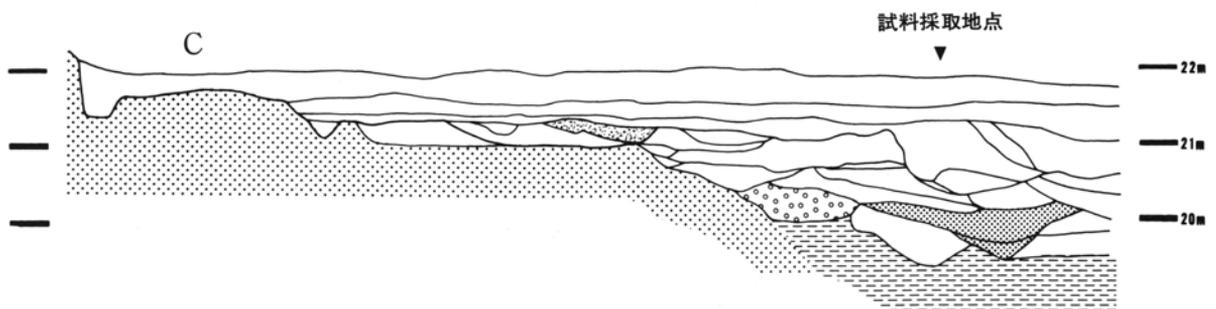
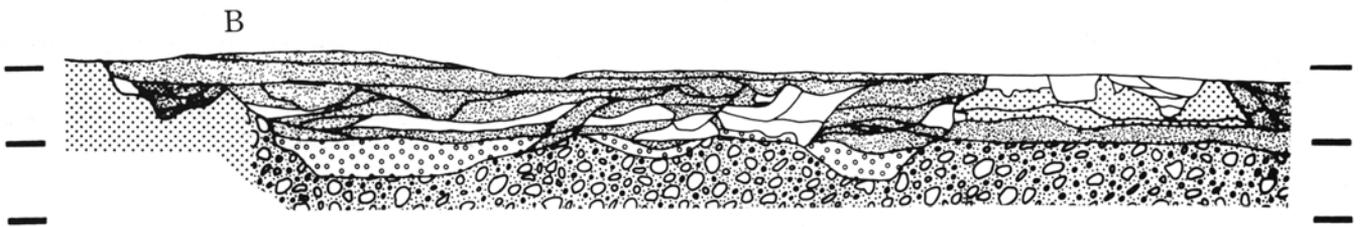
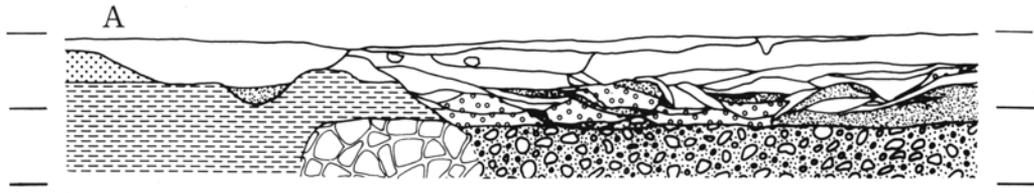
- 58 黄褐色砂質シルト
- 59 茶褐色砂質シルト
- 60 黄赤褐色砂

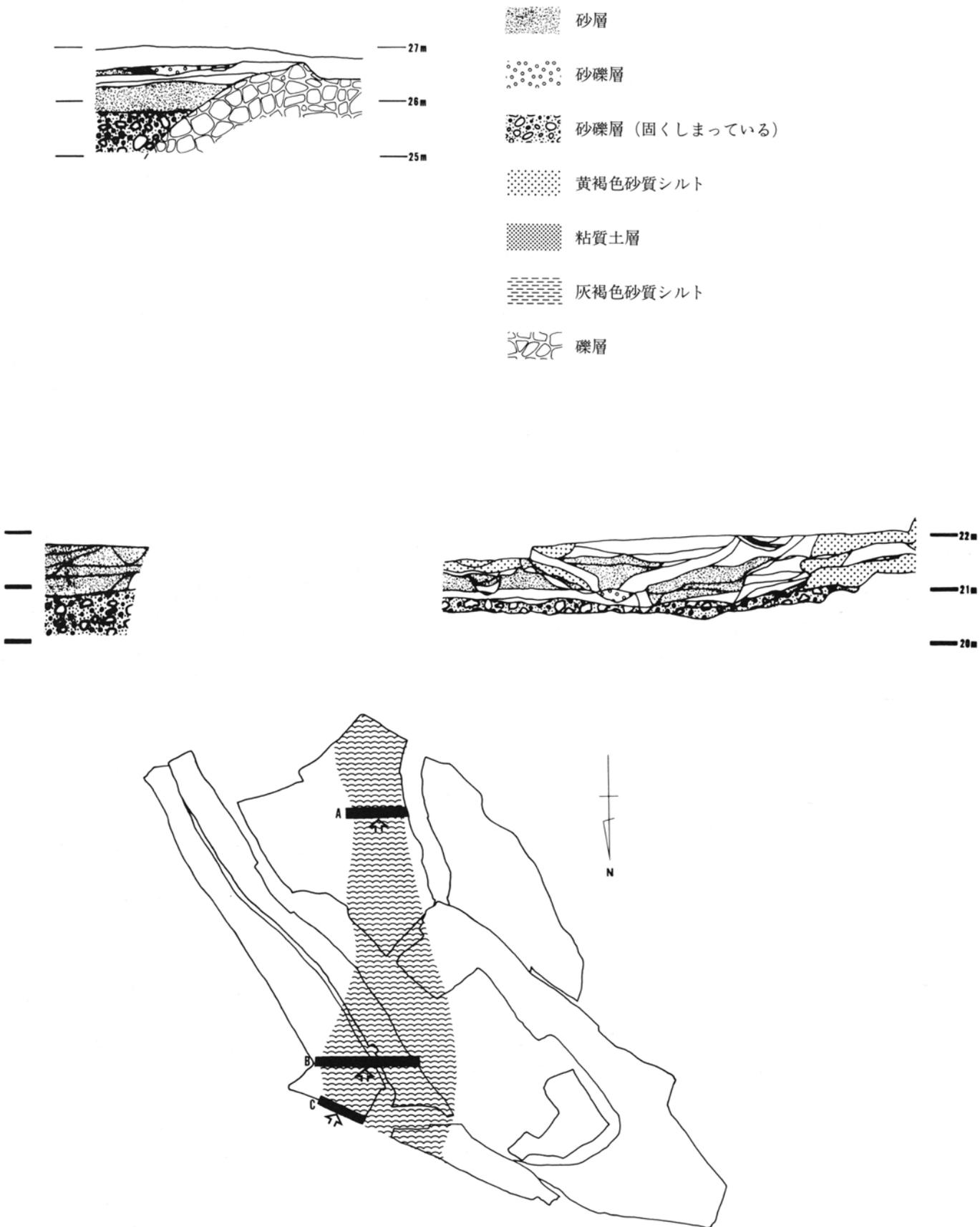
- 55 青白色粘質シルト
- 56 暗黄色褐色砂質シルト (やや黄色)
- 57 暗黄褐色砂質シルト

遺構

第3図 A区北東壁セクション (1/100)

牛ノ松遺跡





第4図 谷セクション (1/100)

トは、北西部分で淡茶褐色と茶褐色の上下2層に区分される。上層と下層の境や上層内より、6. 淡橙色粘質土がブロック状になって検出されたが、この淡橙色粘質土はアカホヤ火山灰(6300yBP)であることが確認されている。

第6図に示した石器・土器群の分布状況は、上記の層序の堆積と同じように、径10m程の中心地帯から北・西方向に出土レベルが下がっていくのがみてとれる。また第7図の製品や石核などの主要石器・土器分布をみると、石核と細石刃のみが近接した位置で、ほぼ同レベルで出土しているのに比べ、その他の石鏃・磨石・丸礫・土器片は集中地帯から外れた部分にあり、レベルにもばらつきがあることが判る。これをさらに第5図に戻って層序との関係を見てみると、石核・細石刃は3. 暗黄褐色砂質シルトの末端部分に集中して出土しており、まとまりよい一群であることが確認でき

る。これに対して、南側の石鏃は明らかに高いレベルから出土しており、同じく南側の磨石・丸礫も石核・細石刃に比べると高レベルの出土である。また、

北側の石鏃・土器片については、Aセクションでは判りづらいが、Cセクションをみると、アカホヤ火山灰を含む2. 茶褐色砂質シルト層かその上位から出土している。

以上を簡単にまとめると、石器・土器片を含む黄褐色シルトや茶褐色シルト層は南東部分から北・西へ落ち込むように広がっており、上位からの流れ込みである可能性の方が高いものと考えられる。ただ、石核・細石刃をまとめて出土する3. 暗黄褐色砂質シルト層からの出土品に関しては一定の一括性を認めることができ、それ以外の石器・土器片については、3層から出土したものよりも新しい時期のものになると考えられる。

4. 上面遺構

(1) 区画溝 (SD)

SD01 (第8図)

A・B区にある谷の右肩に沿って走る溝で、幅0.8~2.5m、深さ20~50cmを測る。SD01は、SD03との分岐点で屈曲しているが、南側では直線的であり、北にいくほど弧状で不規則になる。また、北端にも分岐部分が存在する。溝の断面形は、狭くなる北部分ではV字、広い南部分では逆台形を呈しており、水流があったことを示す砂層が大部分で、一時的に滞留していたことを窺わせる粘質土層も部分的にみられる。溝内より完形品を含め多くの遺物が出土しているが、主な出土層は第8図の6及び7の暗灰褐色砂層で、礫を多量に含み、遺物はその礫とともに見つかった。第8図のBセクションをみると、遺物を多く包含する6・7

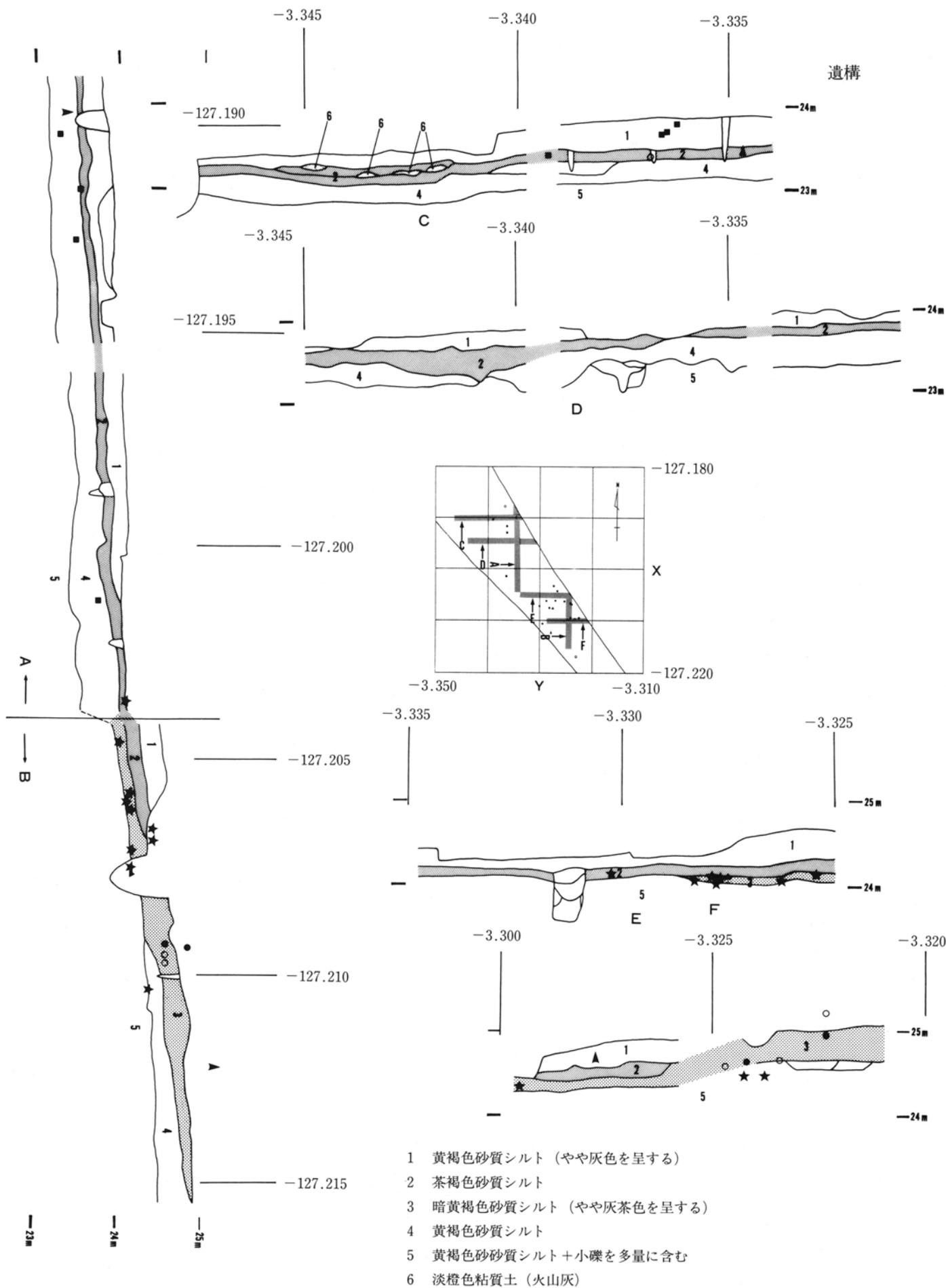
層を以後も、規模を縮小しながら溝として機能していたことが判る。またAセクションでは、上層や西肩が谷の堆積・下刻の影響を受け削平されていることが判り、実際谷から出土した遺物と接合するものもみられた。

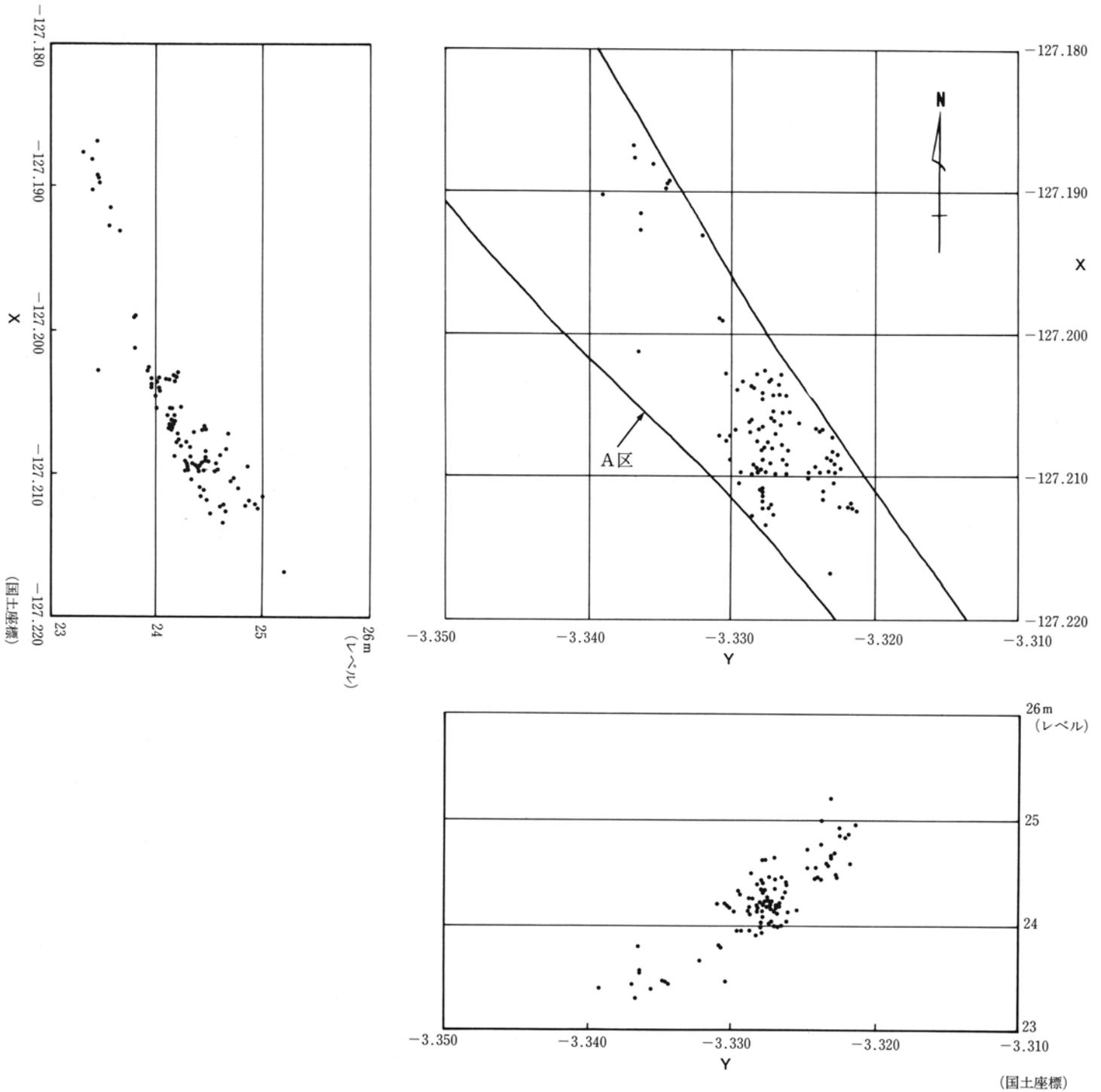
SD02

SD01に接続する不定形な溝で、溝内には部分的に地山は掘り残した高まりがみられる。規模は幅約2m、深さ20~50cmで、SD01の接続部にいくほど深くなっている。埋土は有機質の強い黒色粘質土で、炭化物も含んでいる。遺物は破片が主であるが量は多く、堆積物からみても、SD01への排水溝の機能をもっていたものと考えられる。

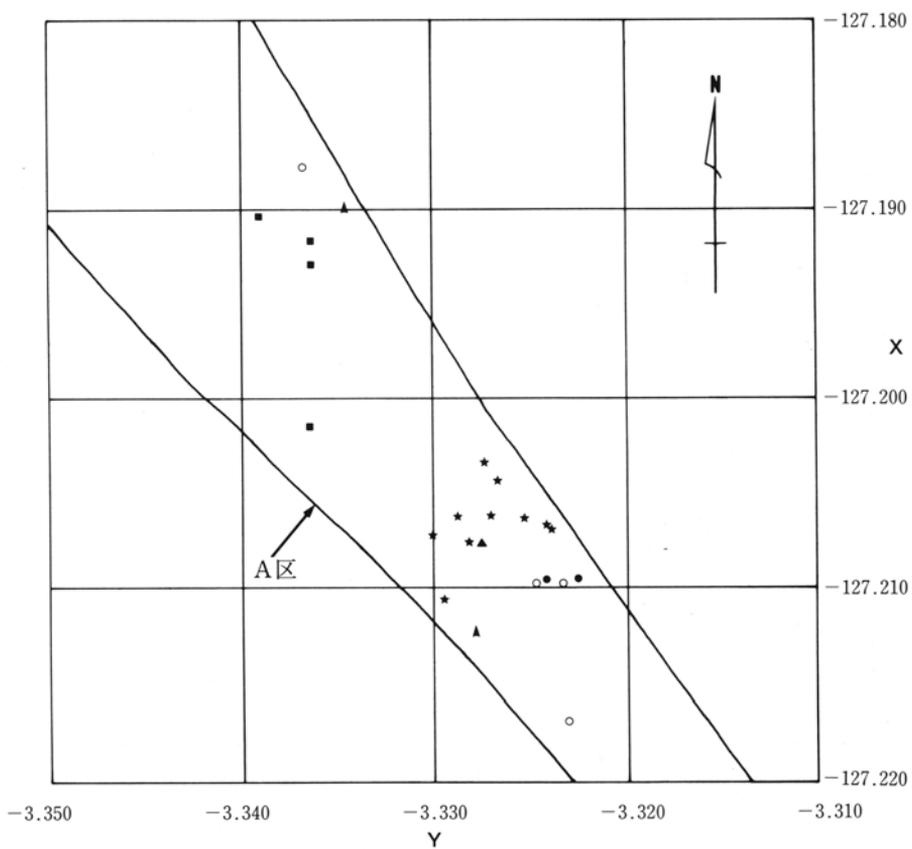
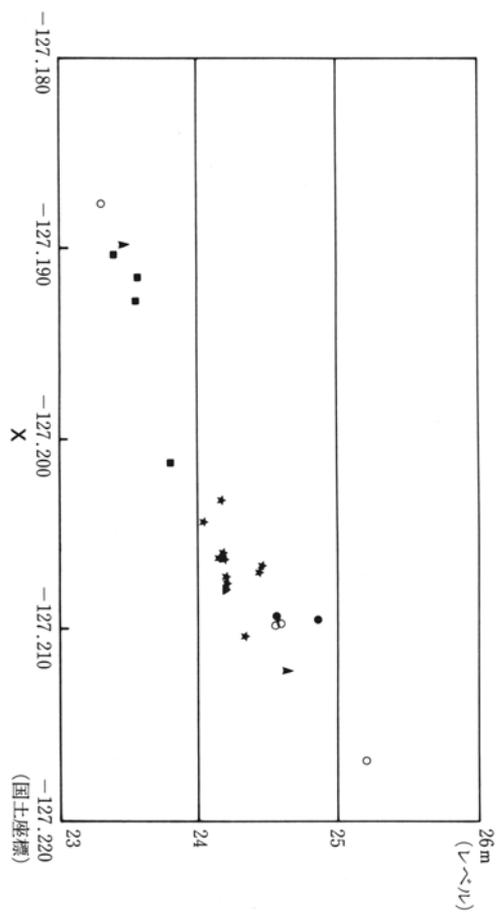
SD03

SD01が屈曲する部分から直交して南東に延びる溝で、分岐点から16mで収束して終わってしま

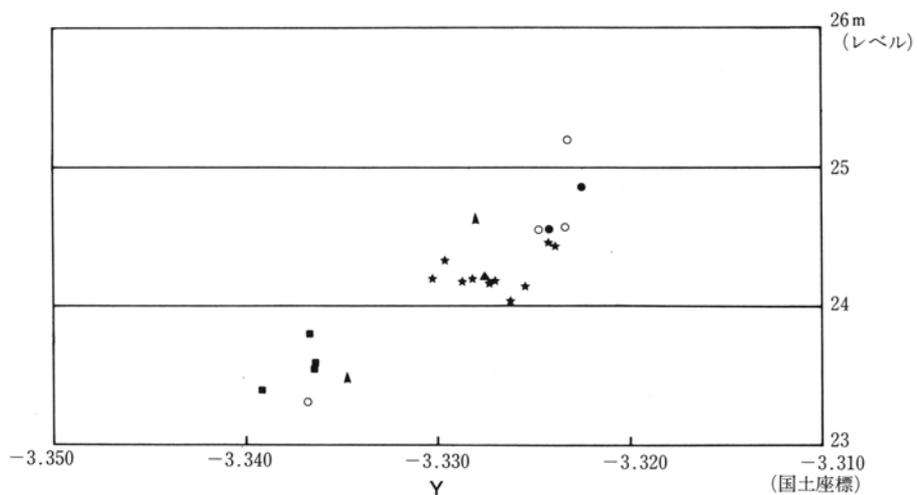




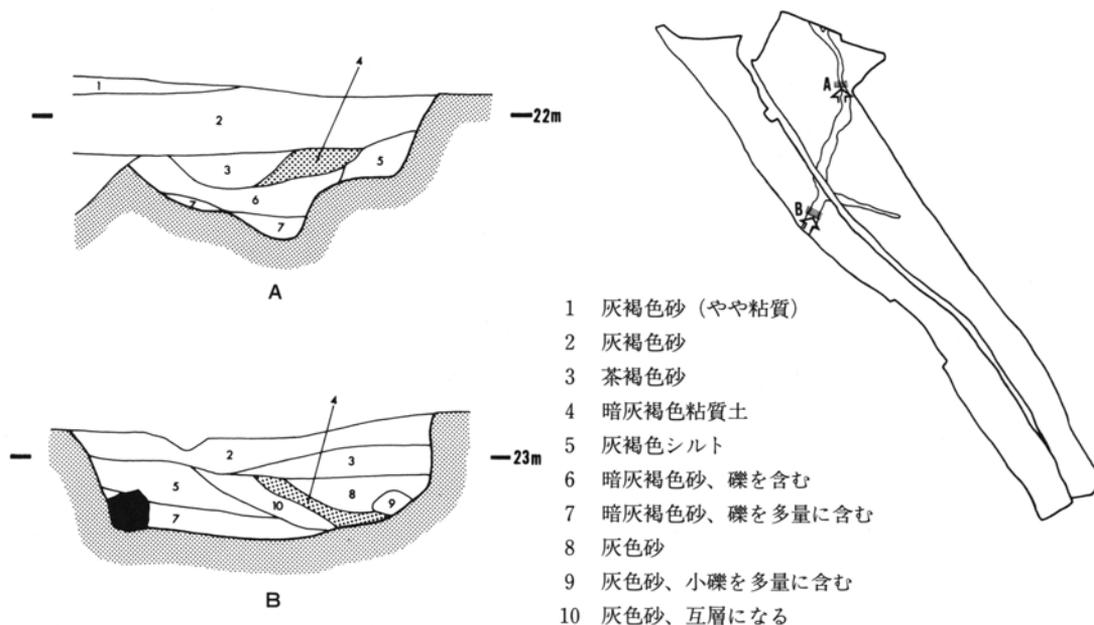
第6図 石器群出土分布 1



- ★ 石核
- ▲ 細石刃
- ▲ 石鏃
- 磨石
- 丸礫
- 土器片



第7図 石器群出土分布 2



第8図 SD01セクション (1/40)

う。SD01との分岐点は調査区の境なので判りにくいですが、おそらくそのままつながっていくと考えられる。規模は幅0.7m、深さ20cmで、分岐点に近づくに従い幅広く、深くなる。遺物量はあまり多くない。

SD05

SD03と5mの間をおいて平行して走る溝で、北西部分で収束する。この溝が終わる地点が、SD03と食い違うようになっており、鍵状になる出入口を作り出している。規模は幅0.5m、深さ20cmを測る。

SD06・07・08・09

SD05と接続するSD06と、南端で直角に折れ曲がるSD07、さらにそれに接続してSD06と平行して走るSD08がある。後世の削平で確認できなかったところもあるが、それぞれの溝には明瞭な切り合い関係は認められなかった。また、SD05との分岐点のちょうど北側で、SD06の西斜面に沿って、南北約1.5m、東西約0.7にわたって半円形に広がる集石群を検出した。集石は10~20cm程度の自然礫で、溝底に近いレベルで土器とともに出土して

いる。この3条の溝とも、幅約1.5m、深さ約30cm程度の同じような大きさとなる。SD08と平行して走るSD09は、幅0.5m、深さ15cmの、上記の溝に比べると規模の小さなものになる。

SD10・11

SD10は幅0.3m、深さ10cm、SD11は深さ15cmの溝で、直交する位置関係にあるが、後世の削平のため、詳細は不明である。

SD12・13

2m程度の間隔をあけて平行に走る溝で、SD12が幅0.5m、深さ10cm、SD13が幅0.8m、深さ18cmを測り、SD03~11までの溝と直交、平行関係になる。SD13は北西端で幅広くなって斜めに屈曲しSD12と接続するが、切り合い関係は不明である。

SD20・21

91区を北東から南西に走る溝で、ほぼ一直線上に位置しており、約2mの途切れ部をもつ同一の溝と考えられる。溝はやや蛇行しながらも、谷の東側にみられたSD01~13の区画溝と同様の方向で掘削されている。規模は両者とも幅1m、深さ10~20cmを測る。

SD22・23

SD21に直交し、約80cmの間隔をあけて平行して走る2条の溝で、SD22が幅0.7m、深さ8cm、SD23が幅1.2m、深さ15cmを測る。切り合いは不明であるが、SD23はSD21を越えてさらに北西側に3m程延びている。

SD29・30

D区の丘陵崖の下端に沿って走る溝で、幅1.5m、深さ10cmを測り、南東部でほぼ直角に屈曲する。この屈曲した溝につながるように北東に走るのがSD30になる。ただ後世の掘削で、接合部がどうなっているのかということや、SD30の規模を確認することはできなかった。さらにSD29の埋土であるが、他の区画溝が灰～黒褐色の砂および砂質シルトであったのに対し、赤褐色の山砂であるという相違がみられる。なお、SD29の北西端より灰釉系陶器片や常滑甕片、砥石片が出土している。

SD31・32・33

C区にある溝で、SD31は幅1.5m、深さ60cm、SD32が幅0.8～1.5m、深さ20cm、SD33が幅0.8m、深さ25cmを測る。SD31は直角に折れ曲がって谷に入り、SD32もやや弧状に蛇行しながら谷で途切れてしまうが、この状態が当時のままであるのか、谷の影響によって侵食されてこのようになったのかは不明である。ただSD31の南端の途切れ部とSD32の間は出入口として機能していた可能性が考えられる。この両者とも、埋土はSD01と同じもので、特にSD32は溝底から礫とともに土器多数出土するという類似した状況もみられ、同種の溝になると思われる。また、SD32は南西方向の丘陵に向かって延び、浅くなって収束してしまう。SD33も同様の埋土を有する溝で、SD32に切られている。遺物は出土していない。

(1) 住居 (SB)

柵列 (SA) としたものの中で、掘立柱建物と関連するピット列にちてはここで取り上げる。

SB01・02 (第9図)

A区の調査区隅で検出されたため、全体は不明である。SB01は現状で南北3間、東西2間で軸線がN-6°-Eの方向を向き、SB02は南北が2～3間、東西が1～2間でN-19°-Eを向く。またSB02の中にあるSK04を柱穴と考えると、総柱の掘立柱建物が想定されるが、やや位置的にずれており、確定はできなかった。SB02の南北の柱穴列と、約1.3mの間をおいて、SA01が平行して走る。これは3間分検出されており、南の2基の柱穴は建て替えられた可能性もある。柱穴の規模は、SB02に比してやや小さい。SB01のP5より灰釉系陶器の皿が出土している。

SB03・04 (第10図)

SB03はB区の調査区隅で検出されたため、全体は判らないが、南北3間、東西2間分の柱穴が検出され、軸線がN-20°-Wの方向を向いている。ただP107については埋土が他のものとは異なっており、柱穴ではないかもしれない。SB04は全貌が判るもので、南北の桁行3間、東西の梁間2～3間で、軸線がN-25°-Wを向く。SB03のP21より土師質皿が、柱穴の側面に沿った状態で出土している。

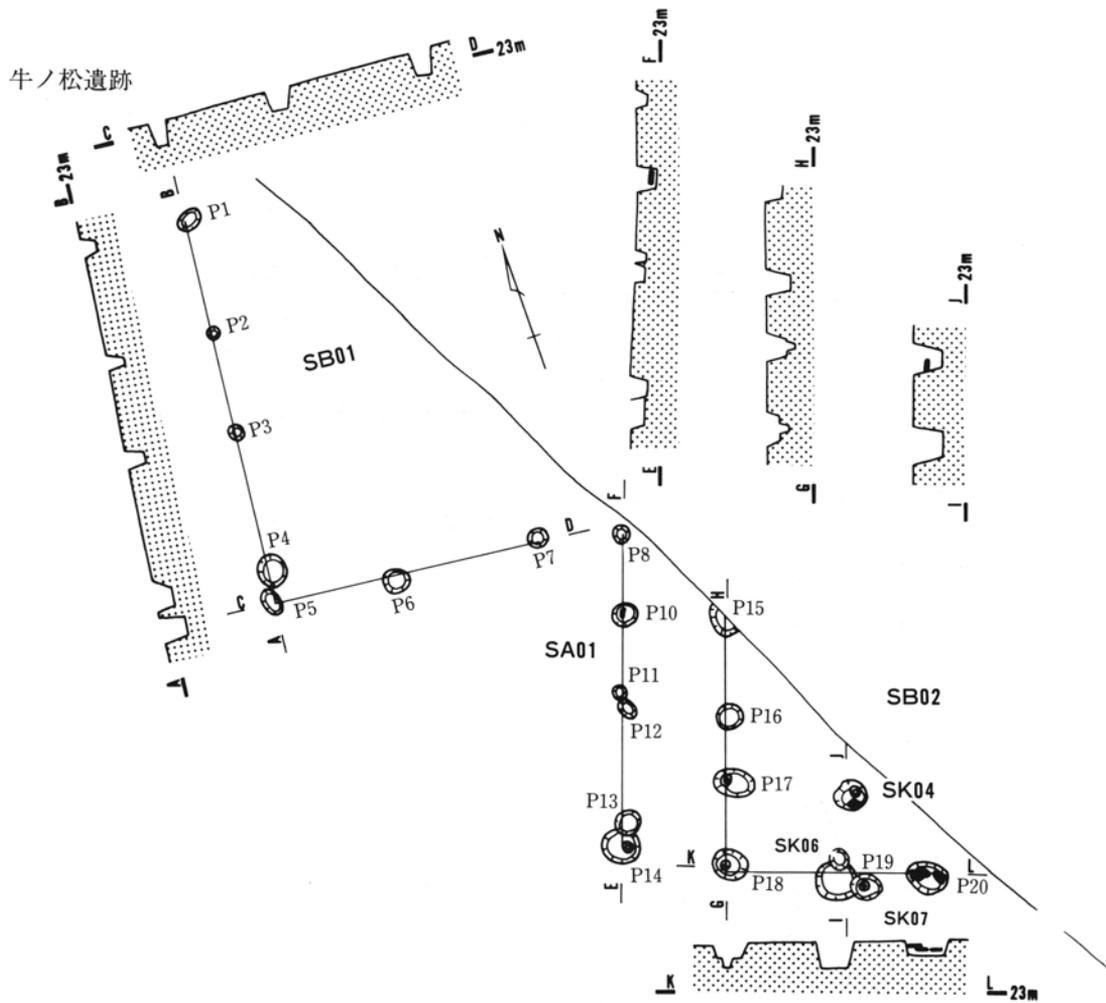
SB05 (第11図)

91区の隅で検出され、全体は不明であるが、現状でも南北5間、東西4間の大きな掘立柱建物となる。軸線方向はN-24°-Eを向く。P50とP55より灰釉系陶器皿が出土している。

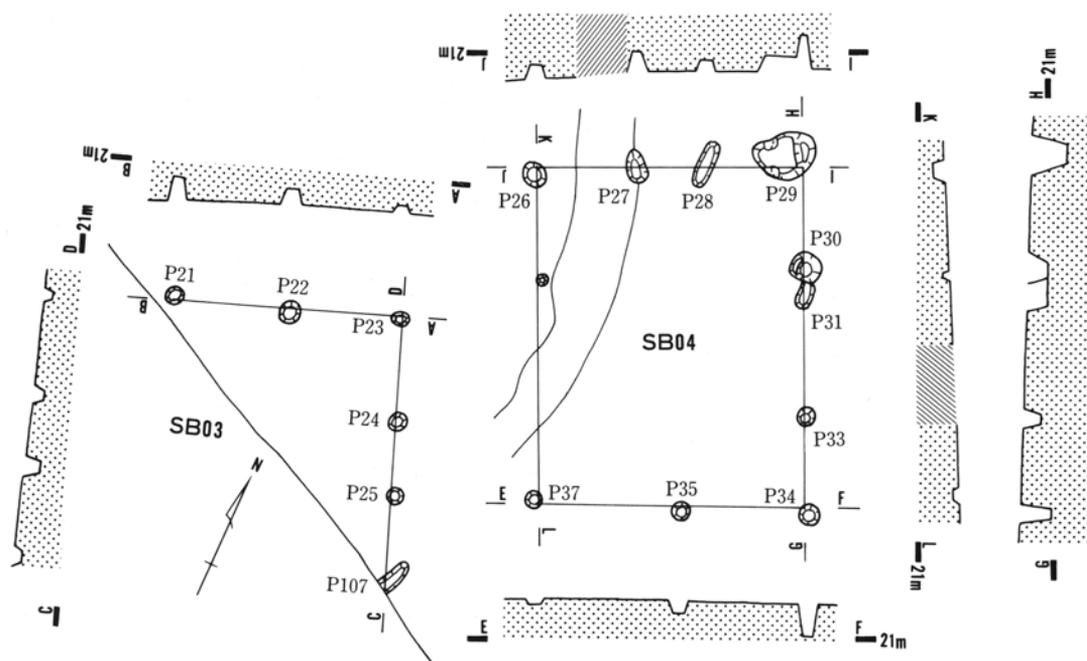
SB06 (第13図)

D区の隅で検出されたことと、西側を後世の溝で切られているため部分的にしか確認できていないが、2～5cm程度の竪穴状の落込みの中に、1

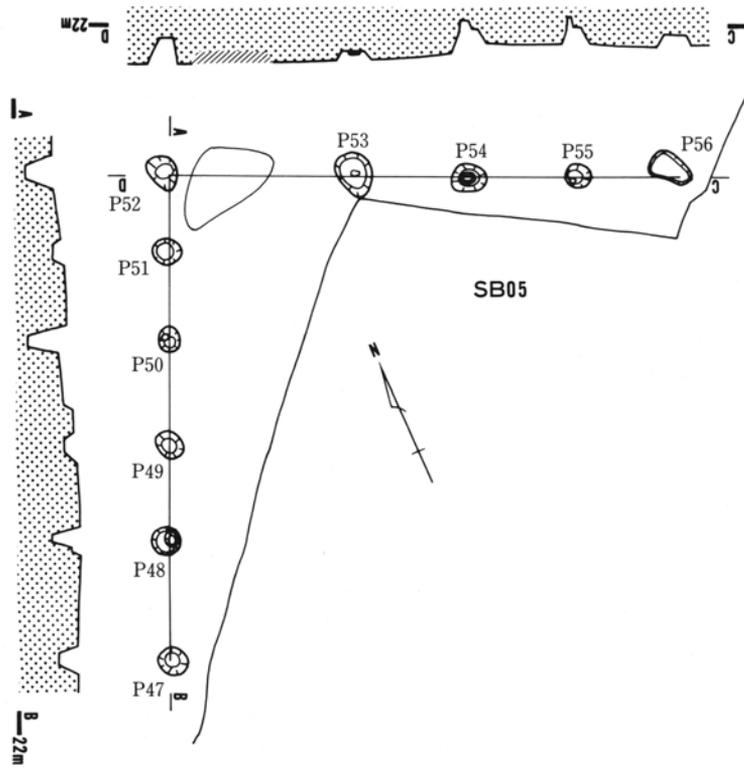
牛ノ松遺跡



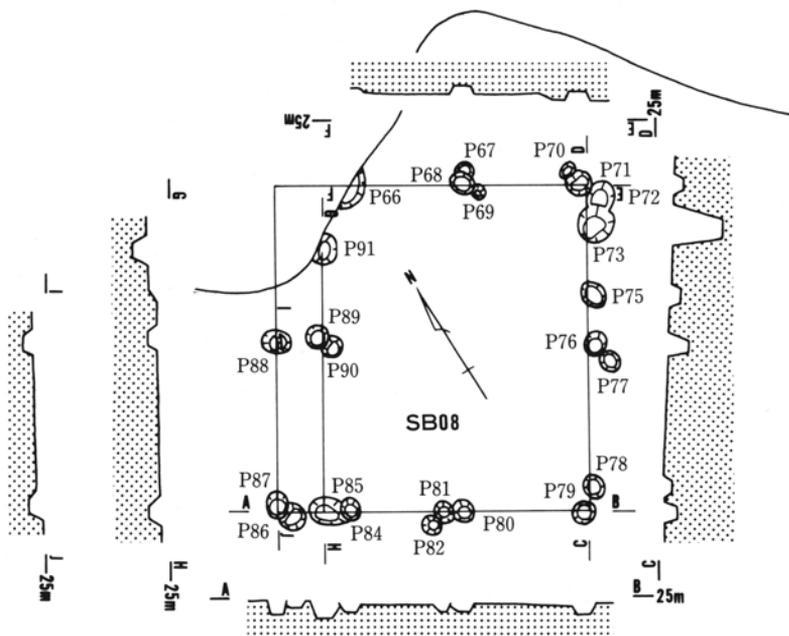
第9図 SB01・SB02・SA01 (1/100)



第10図 SB03・SB04 (1/100)



第11図 SB05 (1/100)



第12図 SB08 (1/100)

×1間の柱穴がみられ、後記するSD28とN-15°-Eという軸線方向が同じで、関連があるものと考えられた。

SB07・08 (第12図)

両掘立柱建物とも調査区隅で検出されているため確実に全体は把握できないが、SB08は南北の桁行2間、東西の梁間2間で、同じ場所で建て替えられたり、西側に拡張された痕跡がみられる。軸線方向はSB07がN-30-Eで、SB-8がN-31-Eになる。SB08のP78より灰釉系陶器皿が出土している。

(3) 柵列 (SA)

SA02

B区のSB04の南側の梁間と同じ直線上にあるもので、南東隅の柱穴から30cm程離れた位置から東へ4~5間、そこから南に折れて3間検出されている。

SA03・04

C区の丘陵斜面の下部の、崖状に急激に一段落ちてやや平坦になった場所に、斜面に平行するように柵列が検出された。両者の軸線はややずれるが、一直線上にあるといってもよく、SB03とSB04の切れ目が出入口であることも想定できる。時期は、SA03のP91より灰釉系陶器皿が出土したり、中世になるかと考えられる。

(4) 溝 (SD)

SD28

D区にある幅1m、深さ30cmの溝で、N-22°-Eのを軸線にし、約12mの長径をもち、南端で直角に屈曲する。屈曲部の西側については調査区外になるためはっきりしない。埋土は、西側から暗灰褐色砂が流れ込んだ状態を示しており、下位の層からは炭化物が多量に出土している。また、溝の側面や底面からは、不規則な小ピットが多数検出

された。SD28からは完形品と完形品に近い2/3以上ある遺物が多数(灰釉系陶器碗5、皿10、は土師質皿2)出土している。また、近接するSB06との関連も考えられる。

(5) 土坑 (SK)

SK03 (第14図)

A区のSD02の南端の延長線で検出された土坑で、長径79cm、短径67cm、深さ37cmを測り、三角形および楕円形を呈している。土坑の埋土は暗灰褐色砂で、灰釉系陶器と礫が出土している。このレベルをみると、土器が廃棄された上に礫が廃棄されていることが判り、西側から流入している。

SK21 (第15図)

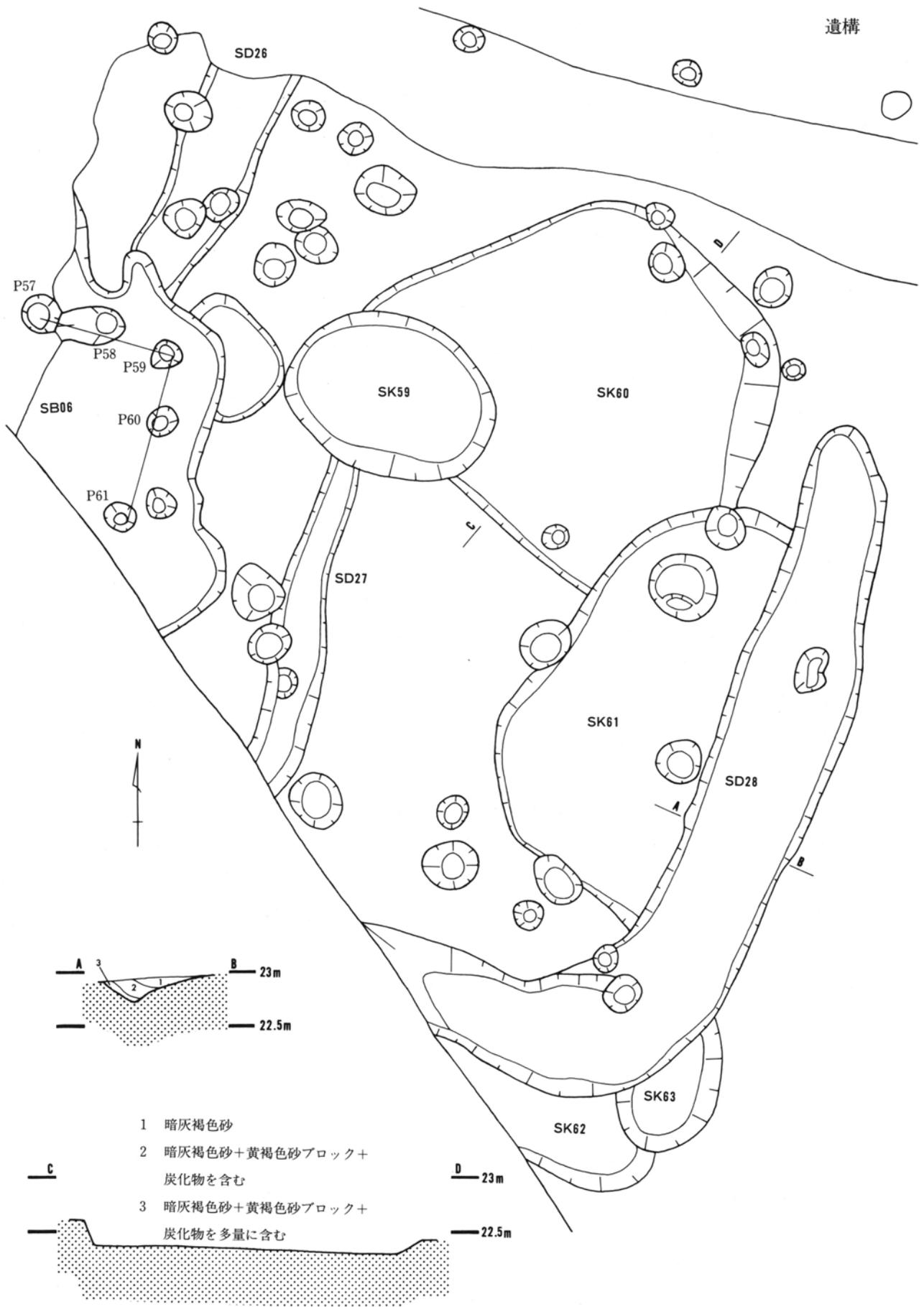
北側がSD13によって切られているため、全体は把握できないが、現状では長径が186cm、短径が116cm、深さが24cmを測る。形態は楕円形を呈しているが、南側が若干狭くなっている。埋土は灰茶褐色砂と黄褐色砂ブロックが混在しているもので、上部には炭化物もみられた。この土坑のほぼ中央の西側で正立した灰釉系陶器の碗と刀子、やや北よりの東側で倒立した状態の灰釉系陶器の皿が出土した。皿がやや上位から出土しているが、両長辺に置かれたような状況にあることから、SK21は土坑墓である可能性が高い。

SK31

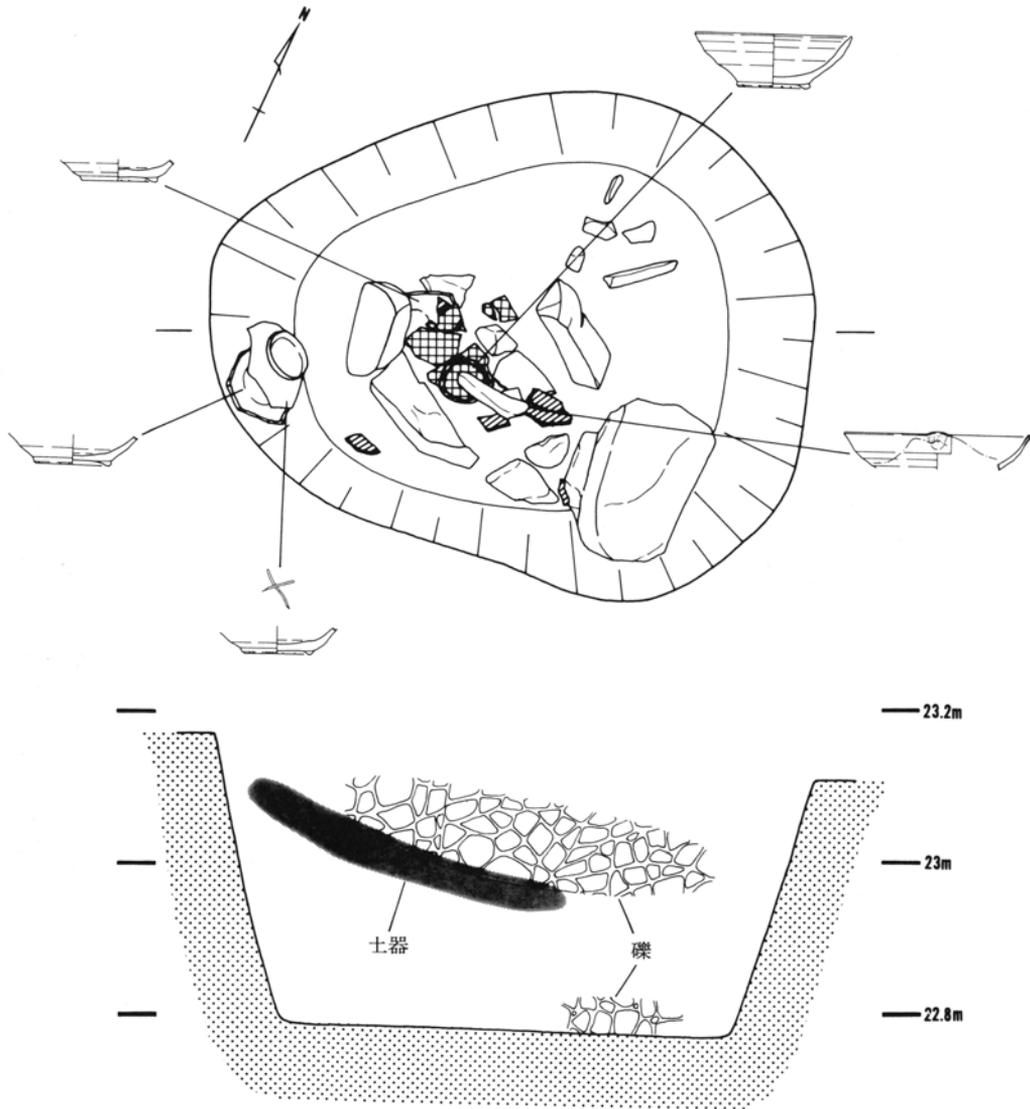
B区の北側の土坑・ピットが集中する地域で検出された土坑で、長径110cm、短径48cm、深さ5cmで、楕円形を呈している。SK31内からは焼土と炭化物が多量に出土したが、土坑の壁には被熱の跡はみられなかった。遺物がまったく出土していないため、時期は不明である。

SK60 (第13図)

SD28とSB06の間で検出された、台形を呈する深さ10cmの浅い土坑で、長径が約390cm、短径が308cmを測る。SK60はSD28と同じように、側面や底面



第13図 SB06・SD28・SK60 (1/50)



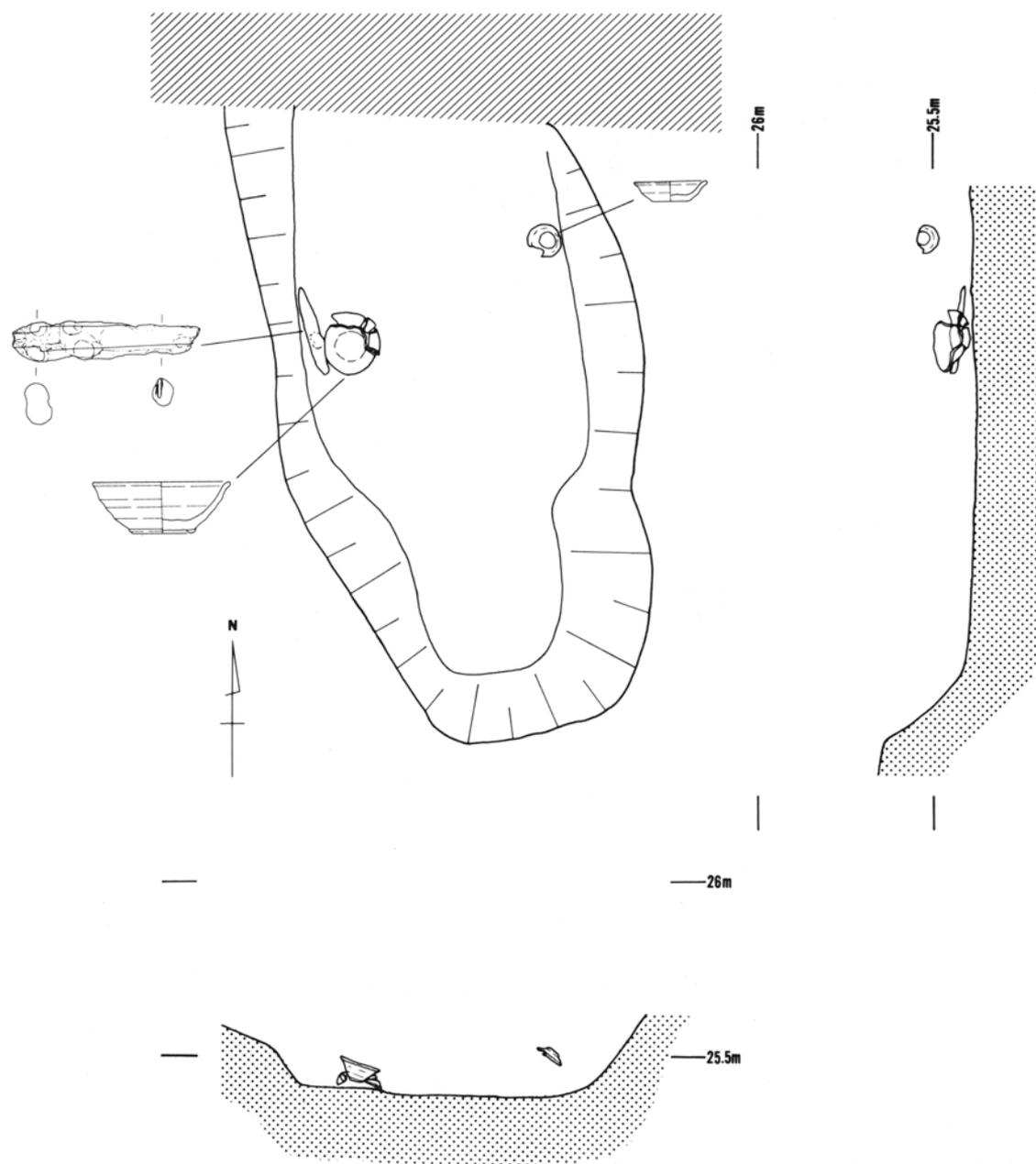
第14図 SK03遺物出土状態 (1/10)

から不規則な小ピットが多数検出された。

SK70 (第16図)

D区の調査区壁にかかるようにして検出されたもので、南西側はトレンチで掘削され詳細は不明である。またそのため、確実に土坑になるのかという問題もあるがここでは一応SKとして扱った。SK70はセクションをみると、摺鉢状になだらかに落ち込んでおり、深さは約70cmを測る。埋土の主

要なものは灰色の砂層で、部分的にシルト（砂質シルト）が挟まっている。また、周辺の堆積状況と照らし合わせてみると、谷の肩部分を走る溝状の落込みの上部にあることが判り、溝の窪地を利用されていることも充分考えられる。ただ、下位の溝状の部分からはまったく遺物は出土していない。



第15図 SK21遺物出土状態 (1/20)

5. 上面遺構 2

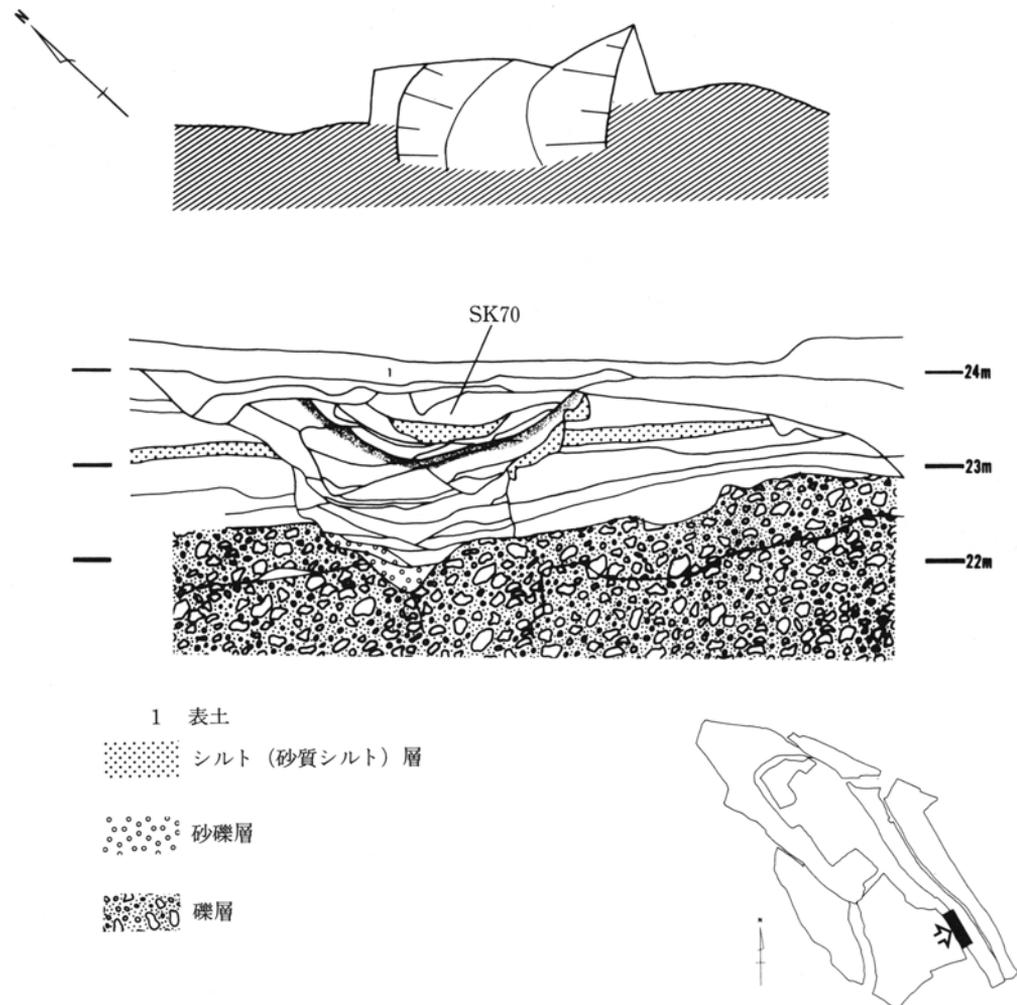
(1) 区画溝 (第17図)

ほぼ調査区全域にわたってみられた方形に区画する溝で、現在の耕作にも用いられているものが何条もあった。溝は、内部にまったく何ももないものと、石垣が組まれているものがあり、後世の溝の掘削で壊されたものや、転用された石もあり、近世後半以降現代まで幾度も作られていたことが判かった。また、丘陵の高位にいくと土留め

のために作られたと思われる石垣もみられた。

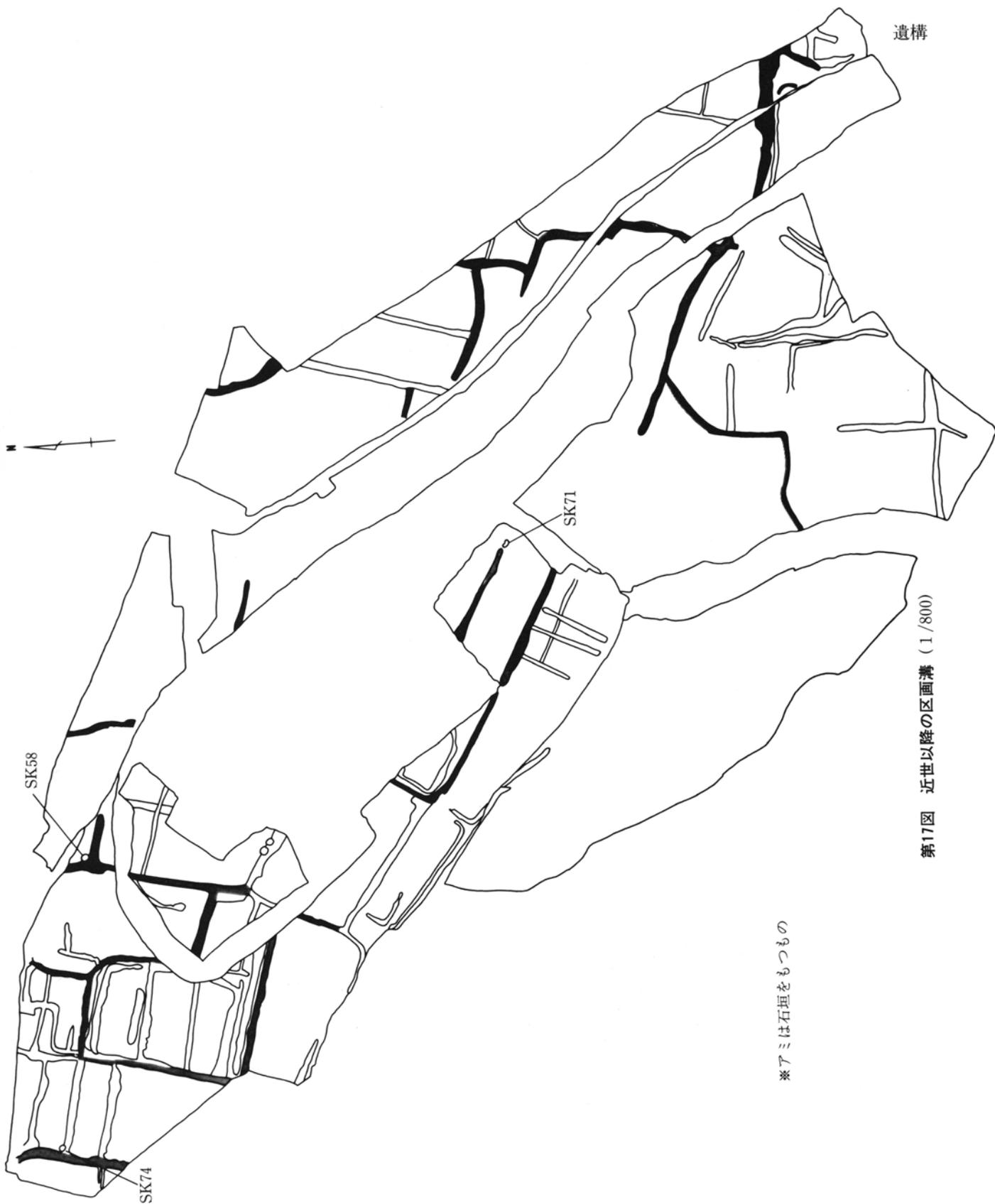
(2) 土坑

いくつかの土坑が検出されたが、攪乱として認識できるようなものあり、確実に近世に遡れるものは、常滑甕を埋めたSK58・71・74のみであった。これらは水甕として使用されていたと考えられ、18世紀のものになる。



第16図 SK70セクション (1/40)

遺構



第17図 近世以降の区画溝 (1/800)

*アミは石垣をもつもの

III 遺物

1. 旧石器時代～縄文時代の遺物

(1) 石器群出土の石器

II-3. 下面遺構述べたように、A区の中央部においてまとまりをもった石器群が出土している。剥片を含めて総数115点確認しており、下位の層から出土したと考えられる1～10と、その上位の層からのものと考えられる11～15を図示した。

1～4は円錐形を呈する石核で、1・2・4は細石核になると思われる。1はチャートで、打面が数度にわたって横方向から打撃を受けている痕跡があるが、意識的な打面の調整であるのかは不明である。また、頭部調整も行われており、全周の1/2ほどにおいて石刃が取られている。2の打面は一度剥離した後調整はされていない。頭部調整は行われているが、柱状の明瞭な石刃の剥離はみられず、中程度の剥片が全面にわたって取られている。石材はチャート。チャートの3も2と同じように、打面の調整がされておらず、明瞭な石刃採取面もみられない。また明瞭な頭部調整もみられず、横位や下位からの不整方向の打撃がある。最終段階の石核であろうか。4もチャートの細石核で、右側の短辺にあたる面が作業面になっている。打面調整はなく、風化の進んだ面がそのまま残されている。

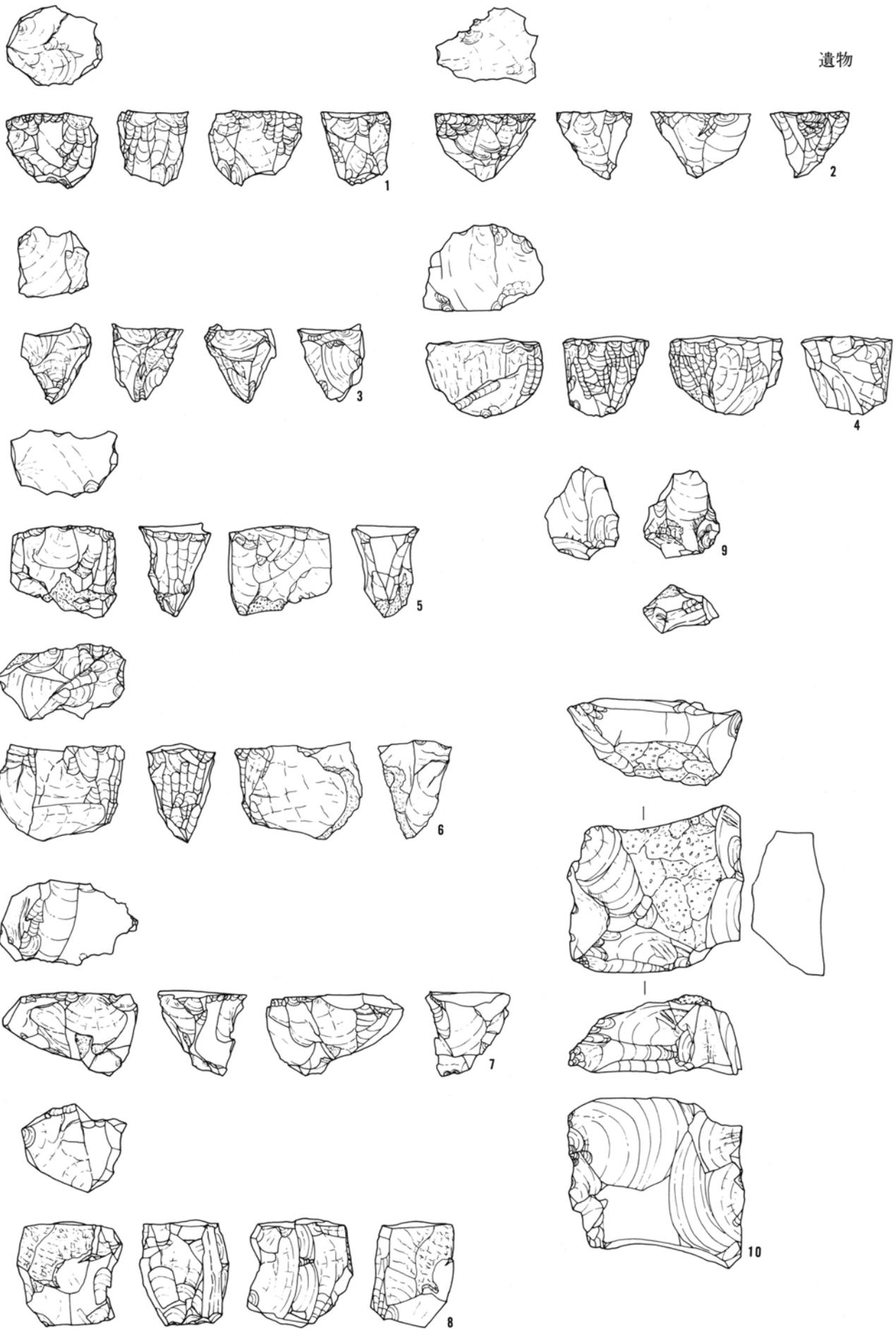
5～7は側面形が長方形を呈する細石核である。5の打面は剥離したままで、右側の短辺にあたる面が主要な作業面になっており、その反対側も作業面であった可能性もある。また、頭部調整は行

われており、裏面には自然面が残されている。石材は凝灰岩である。6の石材はチャートで、打面には幾方向かの打撃痕がみられるが、明瞭な調整とは言い難い。短辺側の面が作業面となっており、頭部調整もみられる。また、部分的に自然面が残っている。7は凝灰岩の細石核で、右側の短辺の上端にわずかに頭部調整痕がみられる。側面には上方向からの粗い剥離が全周にわたって行われている。打面には打撃痕があるが調整ではないであろう。

8は細石核に類似するもので、一部には石刃を剥離したような痕跡もみられるが、不整方向の打撃による剥離が大部分を占め、細石核とは断定できなかった。石材はチャートである。9の石材は凝灰岩で、石核もしくはブランクになるものであろう。10は中～大型の剥片を剥離した石核であると考えられ、各面とも主要な打撃方向は短辺側からである。また、上面には自然面または風化面がそのまま残っている。石材は凝灰岩である。

11は断面が三角形を呈する剥片で、細石刃になると思われる。下部は欠損している可能性が高く、石材はチャートである。

上層から出土したと考えた12～15のうち、12・13は凹基の石鏃で、12は安山岩製の鋏形鏃になる。13は凝灰岩。14は花崗岩、15はアップライトの磨石で、上面が使用面と思われる。



第18图 石器群出土石器 1

(2/3)

(2) 包含層出土の石器

16~21は石核になる。16は細石核になるもので、凝灰岩である。形状は円錐形を呈する典型的な細石核で、打面調整はなく、丁寧な頭部調整と作業面が全周にわたってみられる。17に関しては、明瞭な作業面と頭部調整がなく、確実に細石核とは認められないものであるが、形状や打撃方向は類似する。石材は凝灰岩である。チャート製の20は形状は細石核に類似するが、打撃面・方向ともに不整で、突起状の部分も削除されていない。18・19は石核もしくはブランクになる。自然面を残したチャート製の18は下端に細部調整があり、スクレイパーとして使用されていた可能性も考えられる。19は凝灰岩になる。21は安山岩で、側面から中心部にかけて、中~大型の剥片が幾度も取られている。

22~24は細石刃になるもので、22・24がチャート、23が凝灰岩である。22・23は基部、24は先端部になるか。

25~27はスクレイパーになる。25は自然面が一部残る長方形の剥片に部分的に調整を加え、外弯する長辺側に細部調整を施し刃部を作りだしている。26は溶結凝灰岩で、調整されていない三角形の剥片の片方の長辺に細部調整を行い刃部を作っている。ただ刃部と反対側の長辺の下部に突起があり、その周辺の表裏に調整が集中している。これらの調整は、突起部を削除するために行われ

た可能性もあるが、突起部の先端は欠損しているものと思われ、石匙のつまみ部である可能性も考えられる。27は剥片の側辺の一部に簡単に細部調整を施して刃部を作りだしたものである。石材はチャート。

28は剥片で、ノッチ状になった側辺が使用されたUFもしくはその未製品か。石材はチャート。

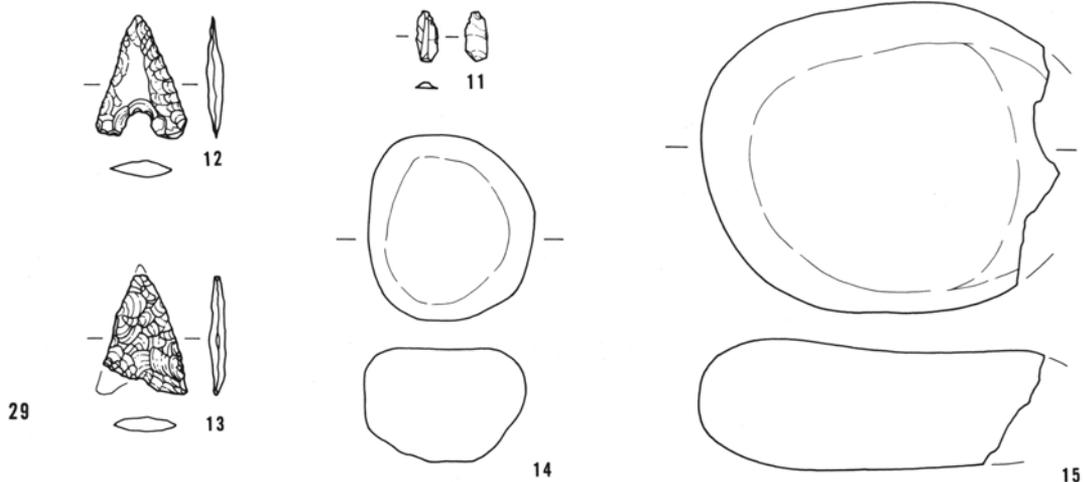
29は黒耀石の尖頭器で、両側辺からの丁寧な剥離がみられる。先端と基部は欠損しているが、木葉形を呈するの思われる。30は凝灰岩の尖頭器で、風化が進み剥離は明瞭ではない。基部は欠損しているが、部分的に再調整と思われる調整もあり、破面も擦れた痕跡があることから、破損後も使用されていたようである。

31は凝灰岩の上端にバルブ痕を残す縦長の剥片で、石刃として用いられた可能性がある。

605は黒耀石の台形様石器で、幅広の上端に刃部がみられる。

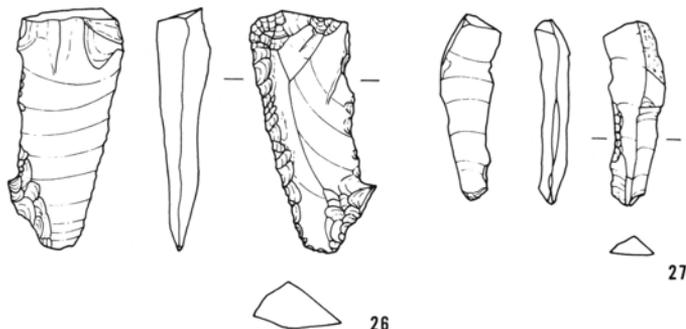
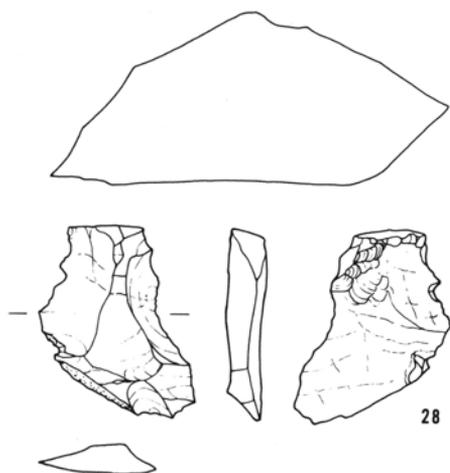
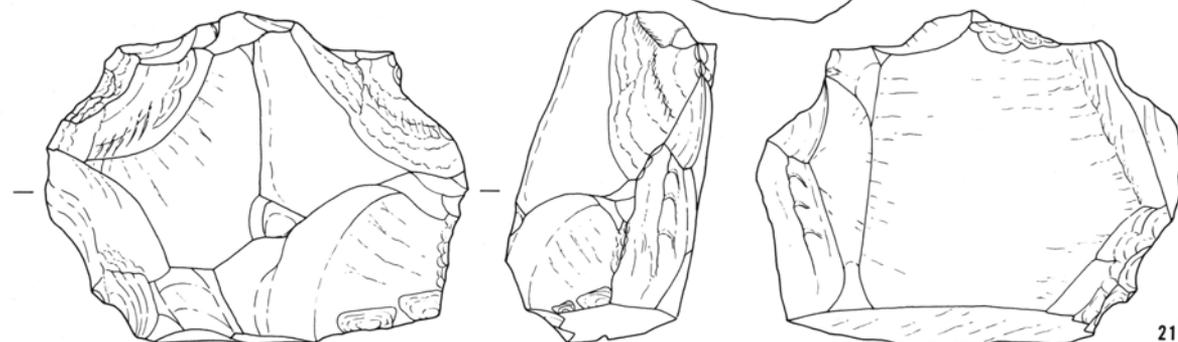
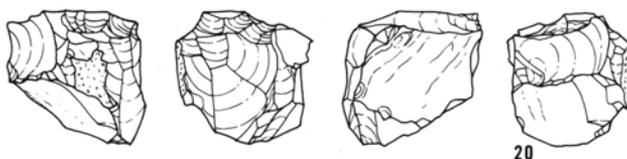
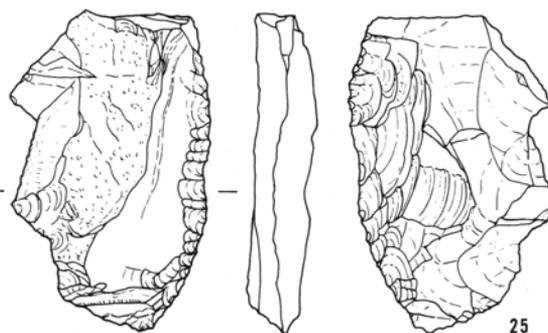
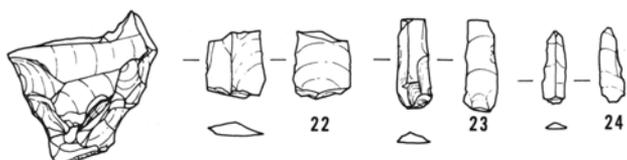
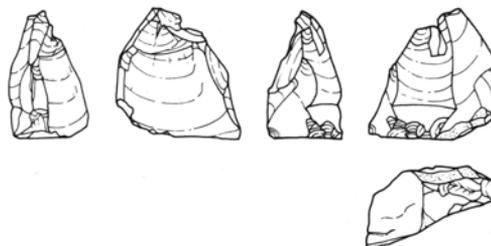
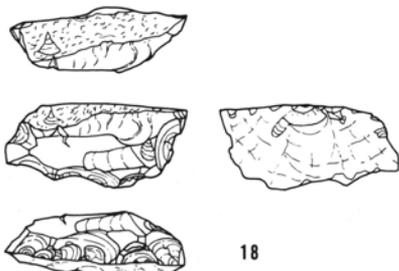
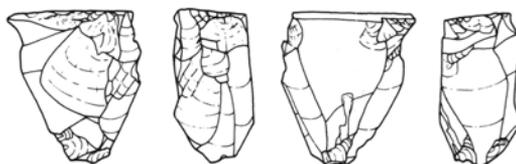
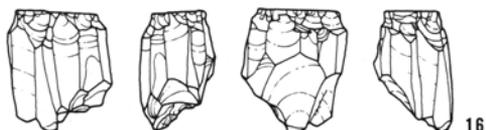
32~45は石鏃で、32~35は正三角形を呈する凹基石鏃、36~40は二等辺三角形を呈する凹基石鏃で、39・40は側辺が外弯する。41は平基の石鏃、42・43・45は有茎石鏃で、42は基部が突出する。44は43のような形状を呈する無茎のものか。

601・602は花崗岩の叩き石で、601は側面、602は上面が使用されている。また両者とも側面が磨面として使用されていた可能性もある。603は玄武岩の石斧の基部、604は中位が僅かに擦られて溝状になっている石錘である。石材は砂岩。



第19図 石器群出土石器 2

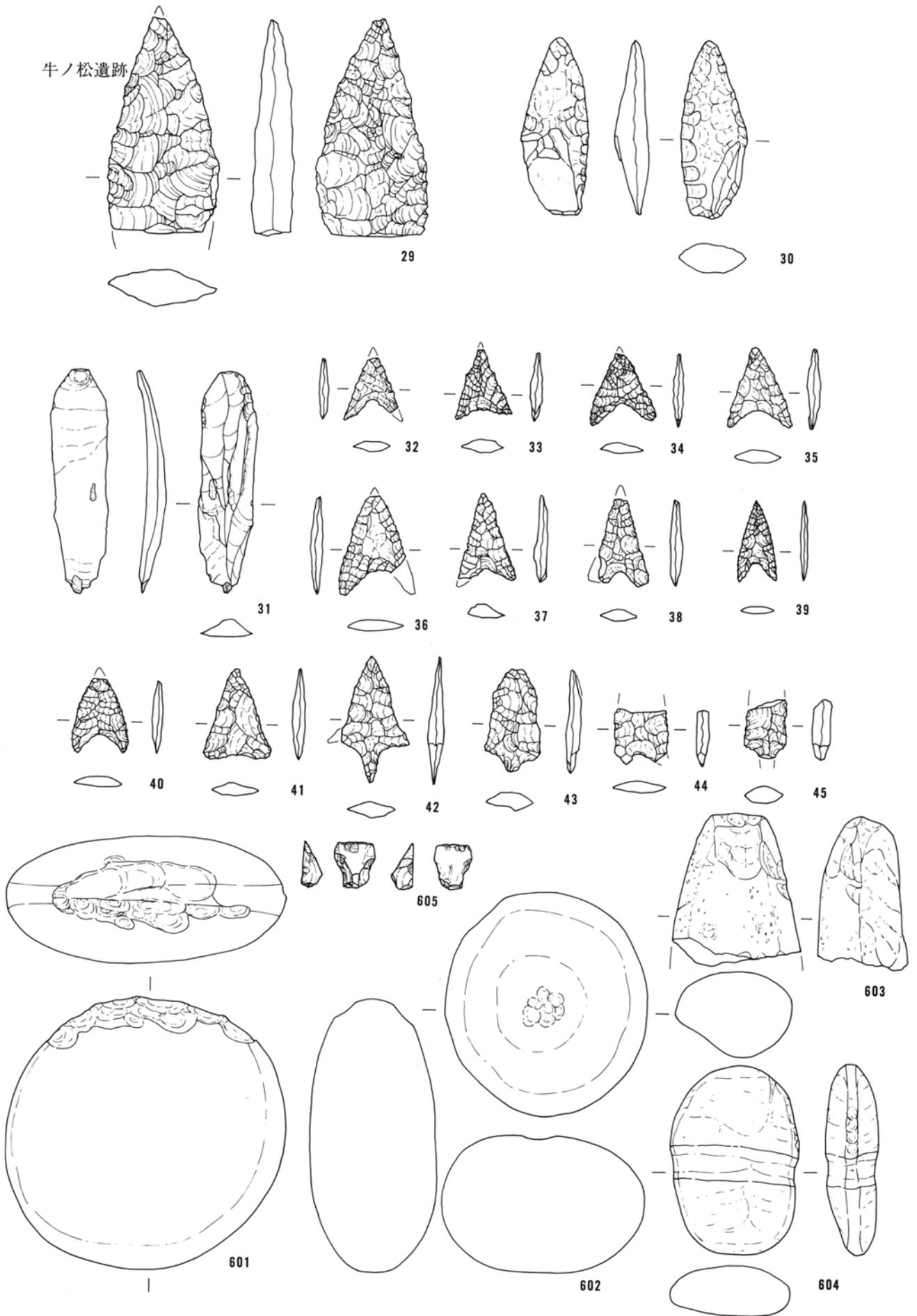
(11~13は2/3, 14・15は1/2)



第20図 包含層出土石器 1

(2/3)

牛ノ松遺跡



第21図 包含層出土石器 2 (29~45・605は2/3、601~604は1/2)

2. 鎌倉時代～室町時代の遺物

(1) 分類

出土点数も多く、形態もシンプルでありながら多様な形をもつ灰釉系陶器についてのみ記号を用いた分類を行い、その他のものについては従来の呼称で説明していく。

灰釉系陶器

椀

I類 精製品のいわゆる「均質手・北部系」と称されるもの。きわめて薄い器壁を有する。

II類 口径が12cm～15cm程度、底径が4～6cm程度のもので、径高指数が0.35以上のもの。

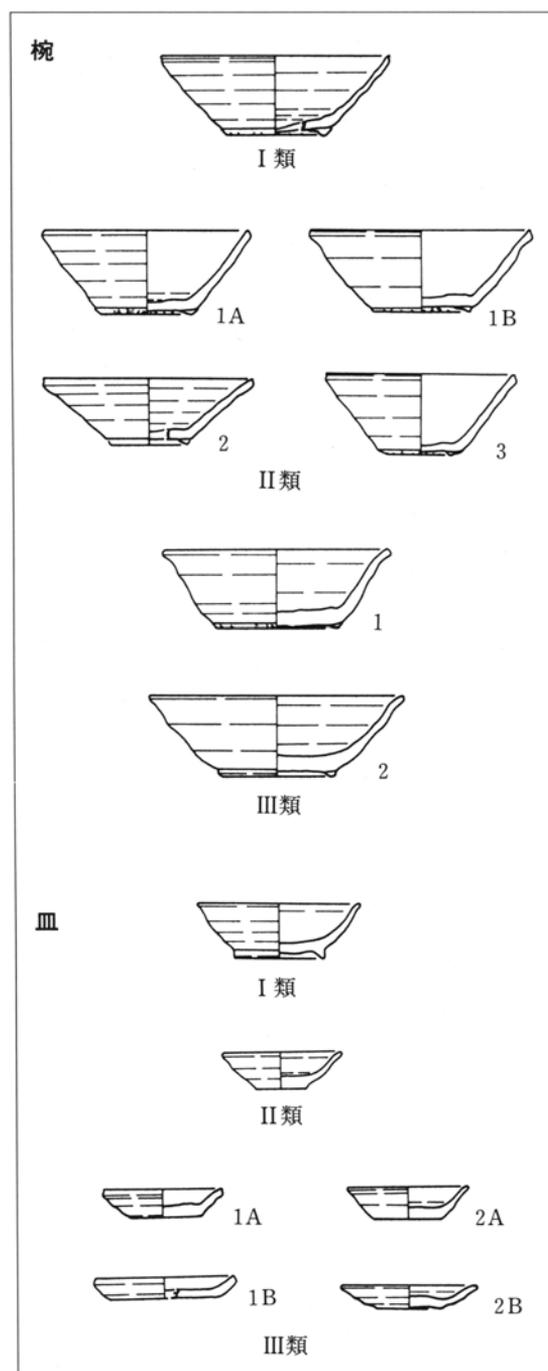
1. 逆台形の通有の形態をもつものである。底径が小さく逆三角形に近いA類と、底径が大きく長方形に近いB類に分かれるが、明瞭な区分は今回はできなかった。1類にはそれぞれ
 - ・体部が内弯するもの。
 - ・体部が直線的であるもの。
 - ・無高台のもの。

がある。

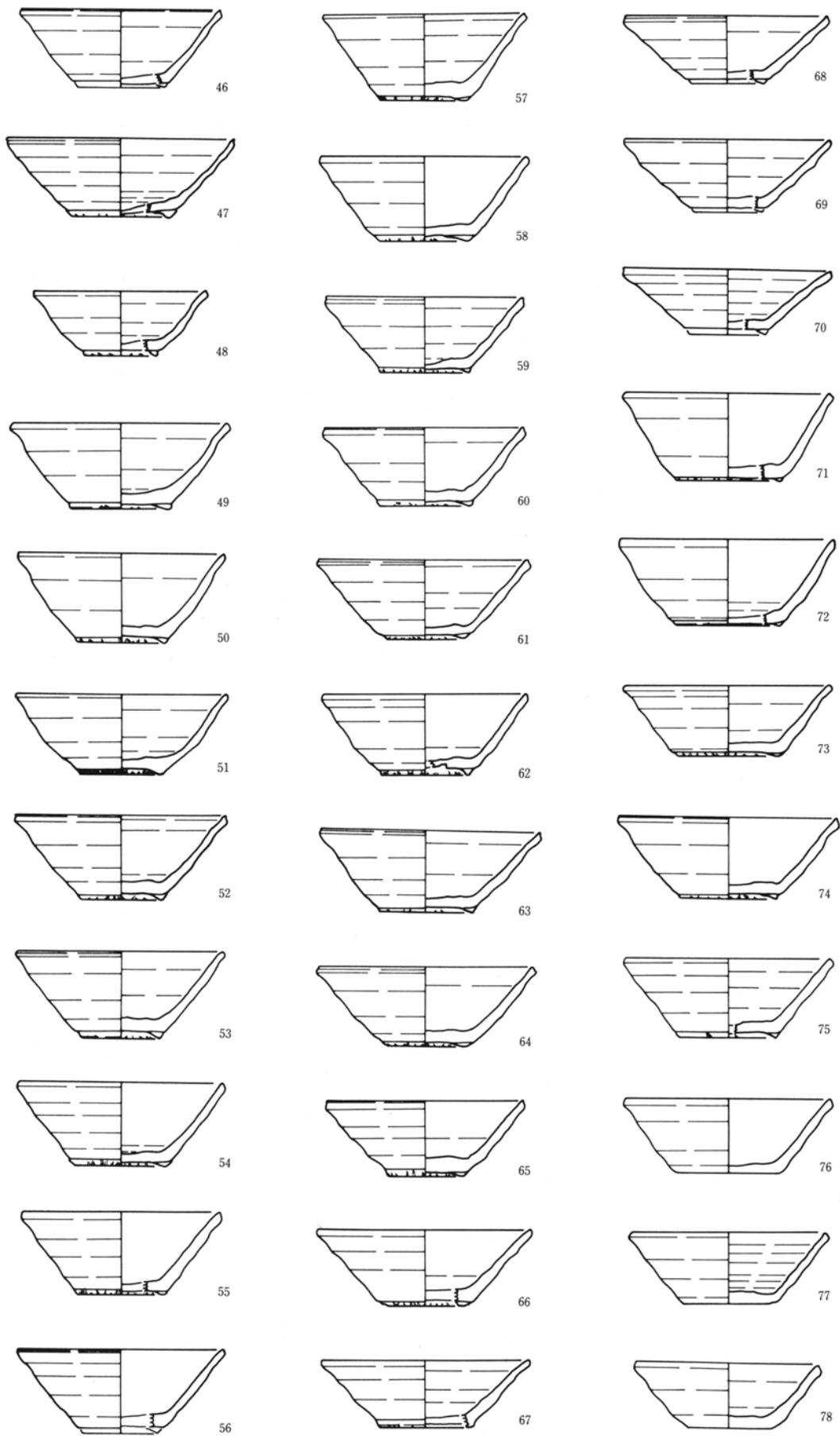
2. 直線的な体部をもち、底径が極端に小さくなるもので、高台のあるものとないものがある。
3. 1Aのうち径高指数が高く、径底指数が低い、二等辺三角形に近い形態を示すもの。

III類 口径14cm以上、底径が6cm以上と大きなものであるが、器高はII類とあまり変わらない。

1. 通有の長方形に近い形態を示すもの。

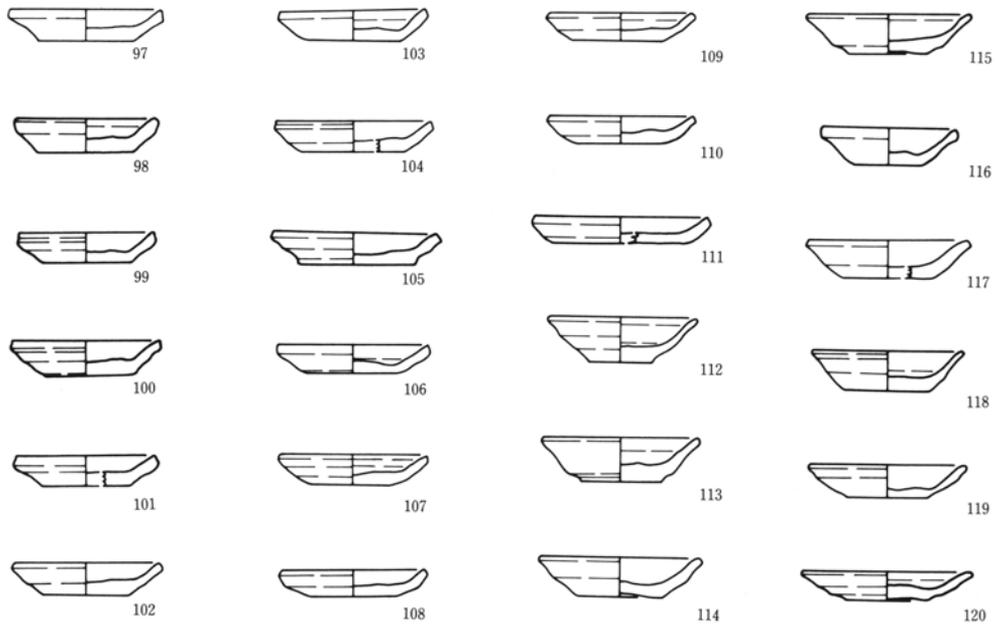
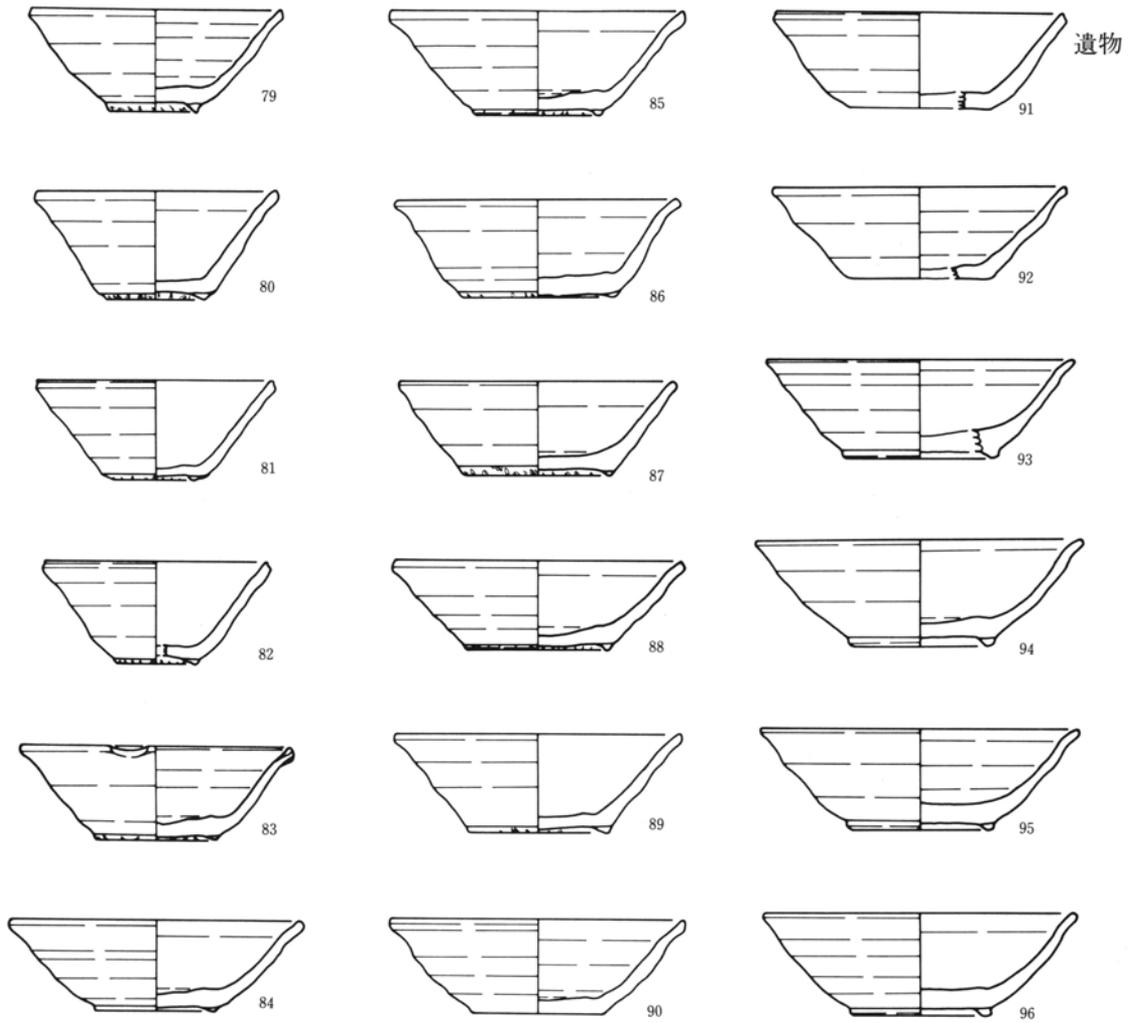


第22図 灰釉系陶器椀・皿分類



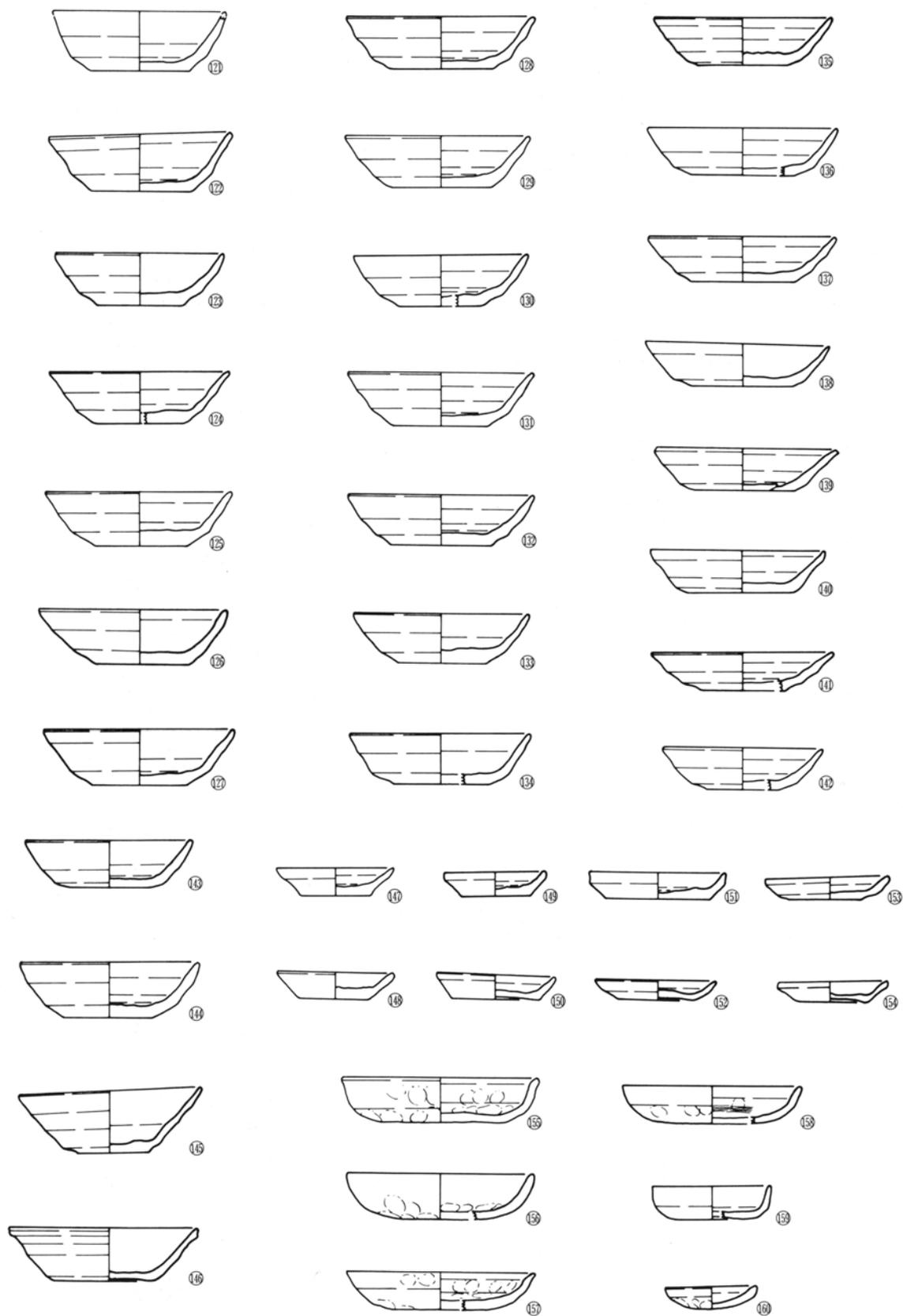
第23図 SD01出土遺物 1

(1/4)



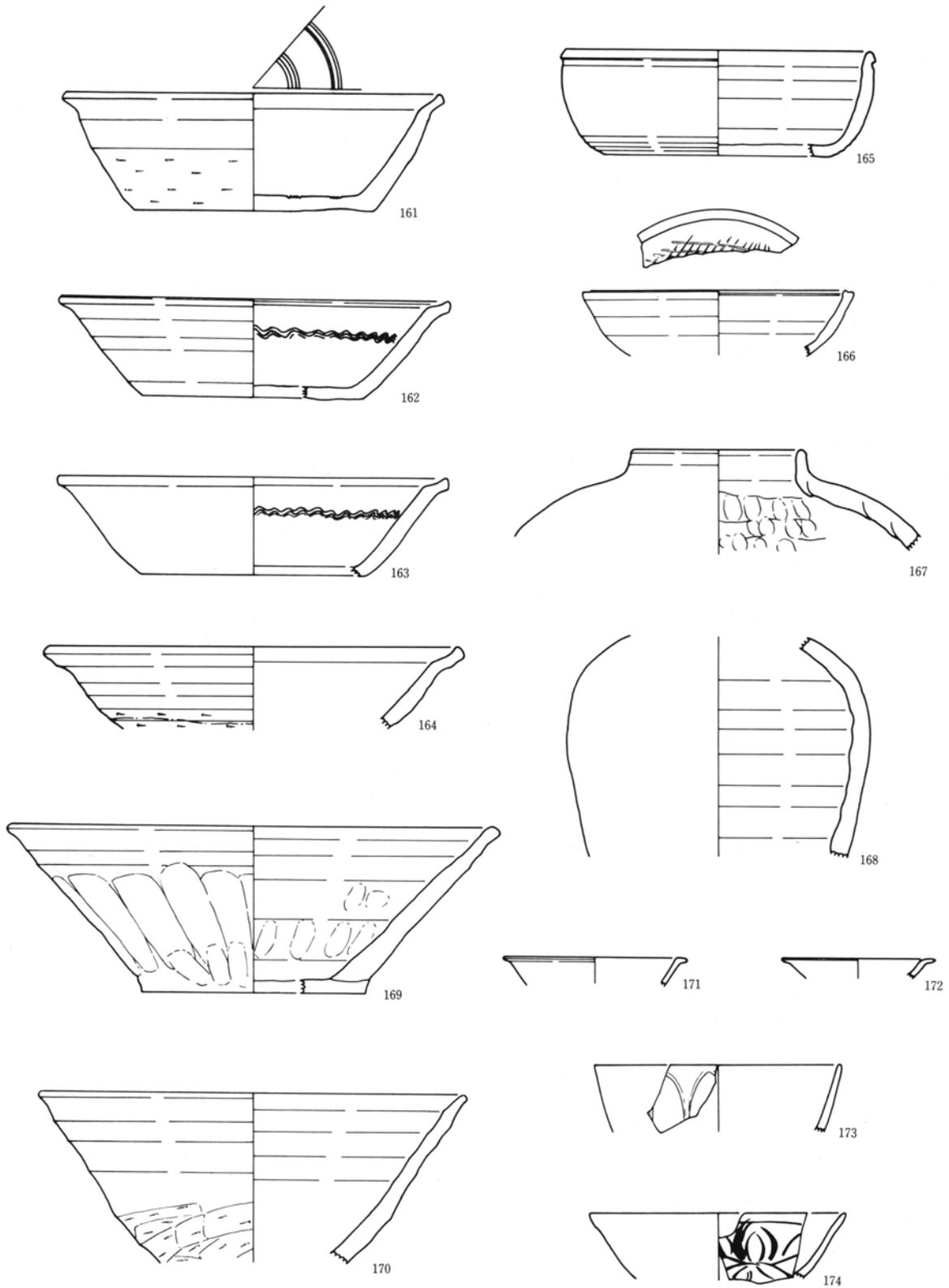
第24図 SD01出土遺物 2

(1/4)



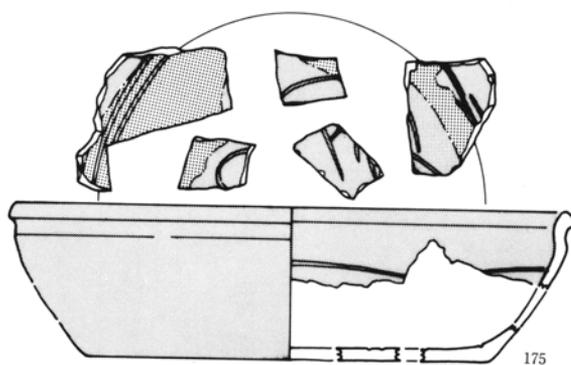
第25図 SD01出土遺物 3

(1/4)



第26図 SD01出土遺物 4

(1/4)



第27図 SD01出土遺物 5 (1/3)

2. 口径がさらに大きいもの。

に分かれ、それぞれ

- ・体部が内湾するもの。
 - ・体部が直線的であるもの。
 - ・無高台のもの。
- がある。

(2) 遺物の概要

SD01 (46~208)

灰釉系陶器碗は、46・47がI類で、48~82がII類、83~96がIII類になる。II類のうち48~66が逆三角形に近いII-1 A類となり、71~78が台形に近いII-1 B類になる。67~70は底部が小さくなるII-2類で、79~82が逆二等辺三角形を呈するII-3類になる。83~96は長方形に近いIII類になり、83~92がIII-1類で、93~96が口径の大きいIII-2類になる。このうち48・78は小型のものになる。また、83の口縁端部は、部分的に外にわずかに折られて、片口状になっている。55・56・81・86・90には内面に、62・77には外面にススが付着している。

灰釉系陶器皿は112・113が底部が突出するII類になるもので、97~110がIII-1 A類、111が器高の低いIII-1 B類になる。III-2類にあたるもの

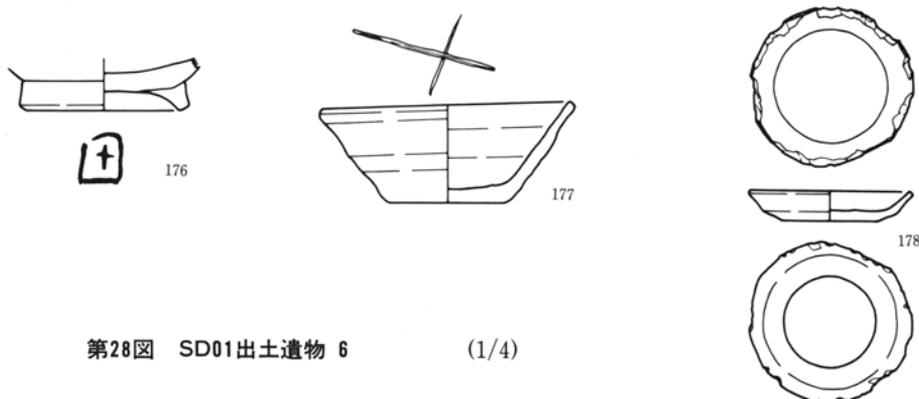
皿

I類 高台を有するもの。

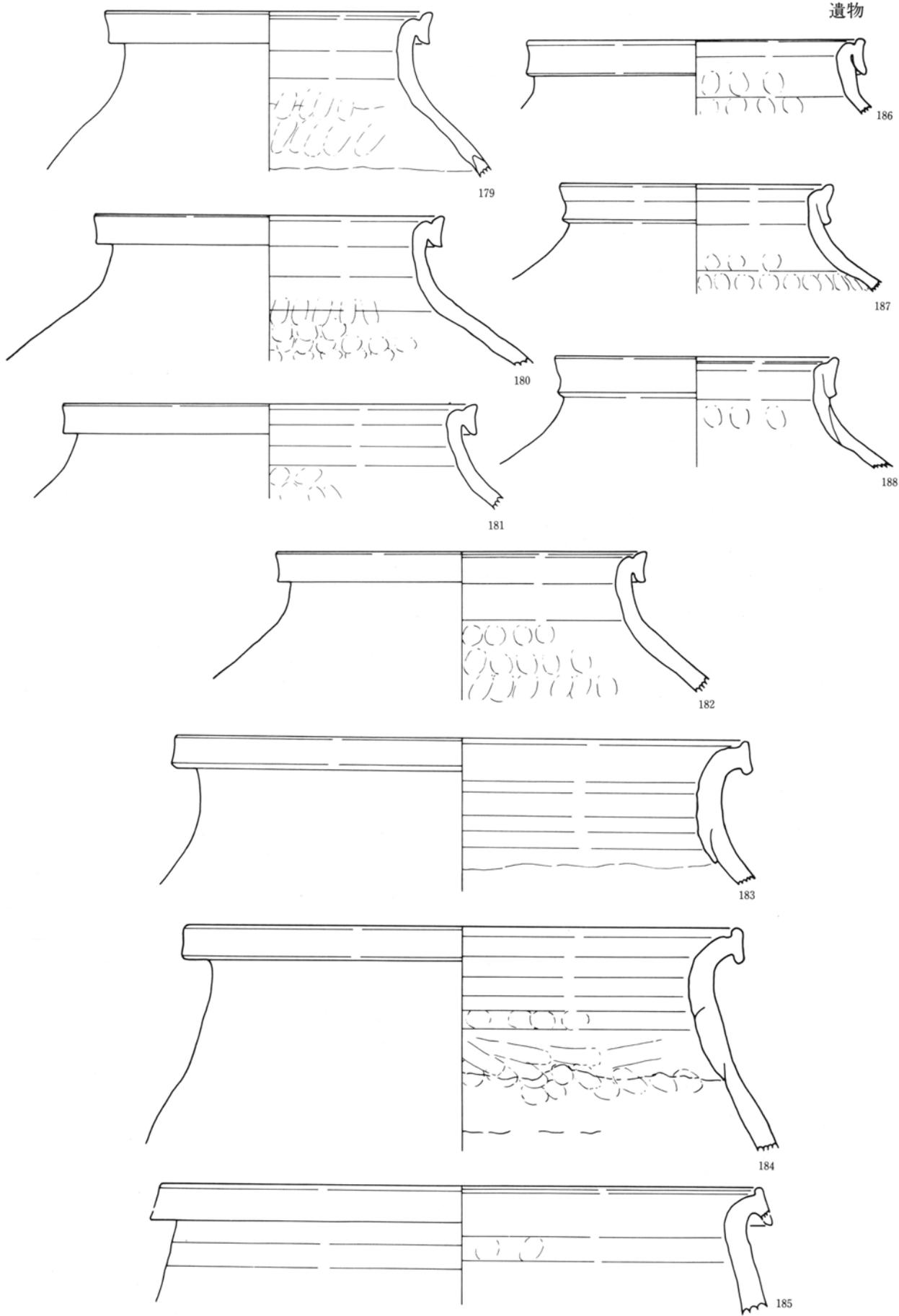
II類 高台を有さないもので、底部が肥厚し突出するもの。

III類 高台を有さないもので、器高が低く扁平なもの。

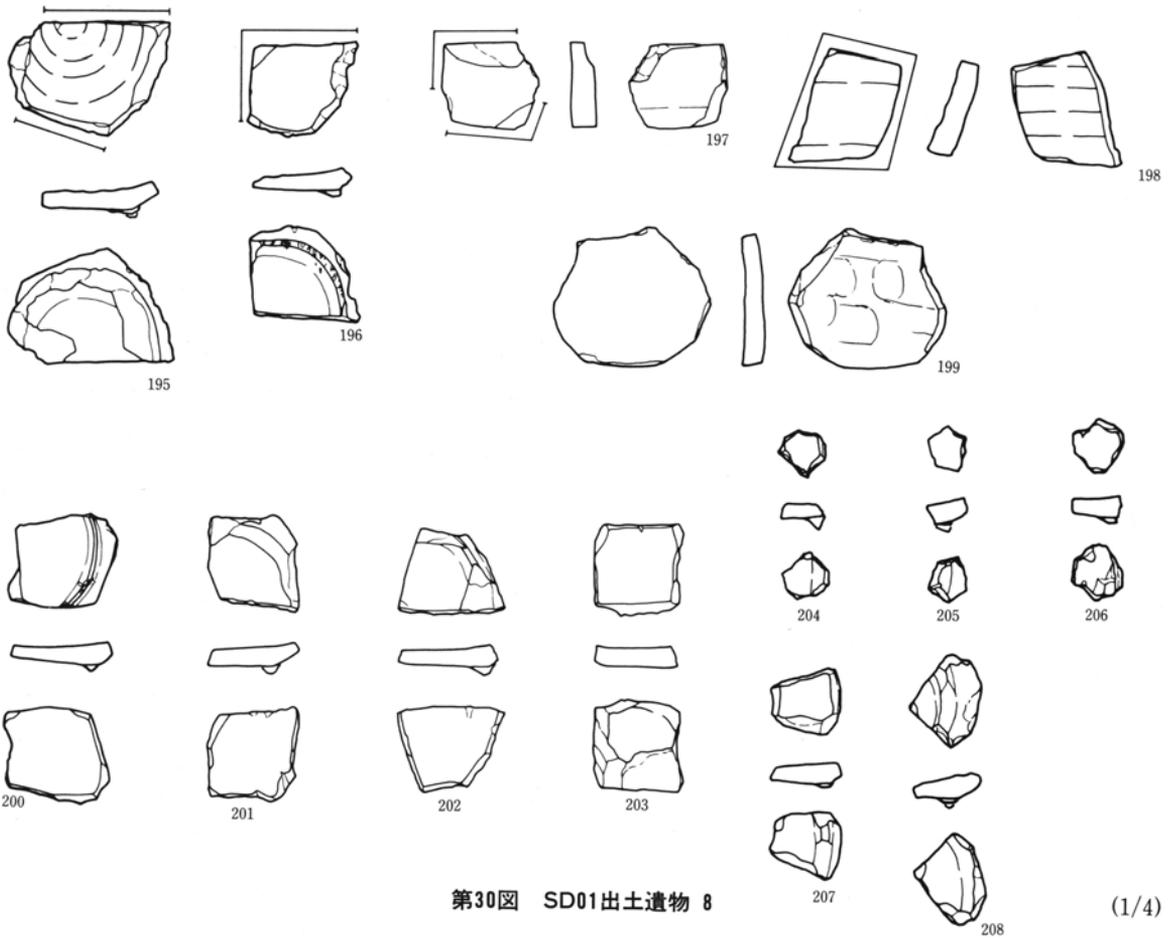
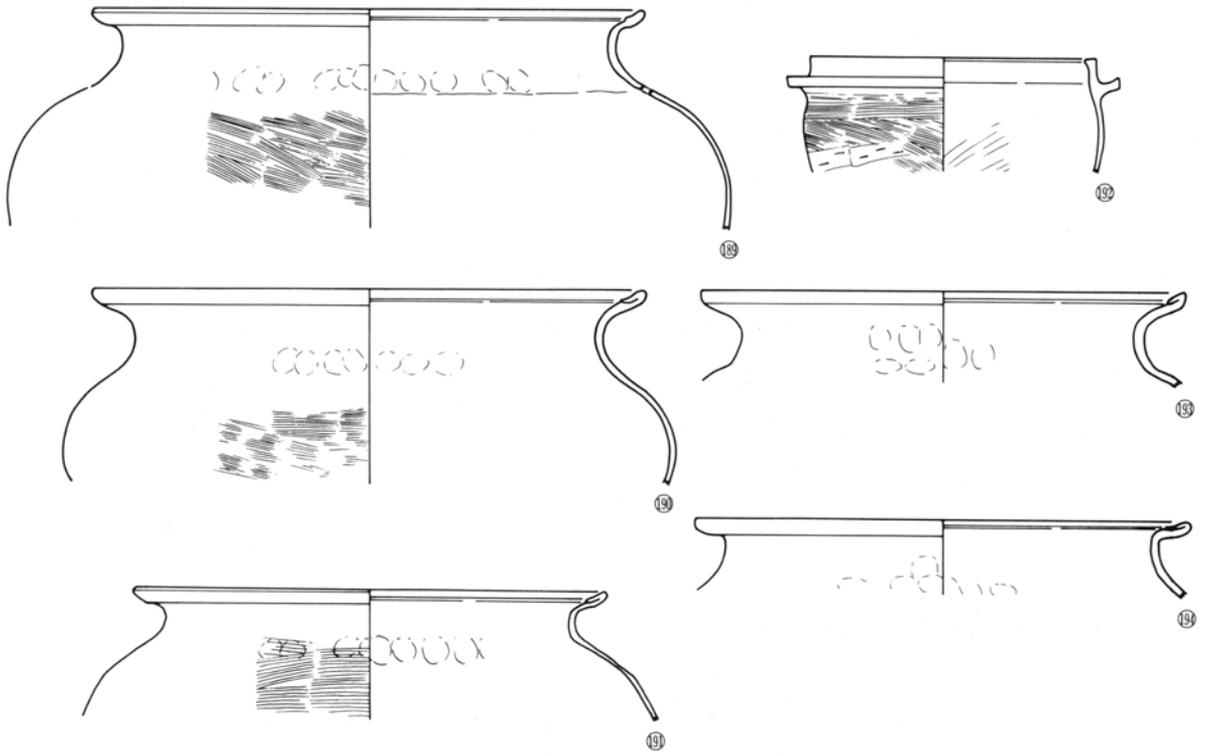
1. 体部が直線的に短く上外方に延びるもので、端部が内傾する明瞭な面をもつもので、やや深いAと浅いBがある。
2. 体部が外湾して長く上外方に延びるもので、やや深いAと浅いBがある。



第28図 SD01出土遺物 6 (1/4)



第29図 SD01出土遺物 7



第30図 SD01出土遺物 8

(1/4)

が114～120で、114～119が器高の低い2 A類になる。ただ、108～110や119などは1類か2類の判断が難しい。

土師質皿は、121～154がロクロ成形のもので、155～160が非ロクロ成形のものになる。ロクロ成形のものうち、121～146は中型品、147～154は小型品になる。中型品のうち、121～142は定型化したもので、121～136は器高の高いもの、137～142は器高の低いものになる。また143・144は形態をみると、上記の器高の高いもの一群に入るが、胎土に2～5mmの砂粒を多く含んでいる。145・146は、灰釉系陶器碗に類似した形態をもつものである。非ロクロ成形のものうち155～160は口縁部がヨコナテ状の調整により仕上げられているもので、定型的で中型品の155～158と小型品の159・160がある。122・140の内外面に、125・137・157の内面にはススが付着している。また126の底部内外面には不定形で貫通していない5～10mm程度の孔がみられる。

161～166は古瀬戸製品になる。161～164は折縁皿で、161は底部内面に同心円の櫛描き線、162・163は体部内面中位に波状紋が描かれる。165は口縁端部が玉縁状になる洗、166は卸皿になる。底部外面と164のヘラケズリ部を除いては淡緑色の灰釉がかかっている。167は短頸壺で外面に、168は壺の体部で外面に垂れたように灰釉がかかっている。167は常滑で、168は古瀬戸か。169は常滑の鉢で、170は灰釉系陶器鉢になる。

171・172は白磁の小碗で、173は黄青色を呈する輪花碗、174は草花紋が描かれる青磁碗である。

175は宋三彩の洗で、8片出土している。器面には、底部外面を除いて緑釉と黄褐色釉がかけ分けられており、内面に牡丹の紋様がヘラによって描かれている。

176はⅢ類の灰釉系陶器碗底部外面に墨書されたもので、「田」と書かれている。体部の破面は打

ち欠かれている可能性もある。177も同じく灰釉系陶器のⅡ－1 B類の無高台のもので、底部内面に十字にヘラ書きされたものである。178は灰釉系陶器皿のⅢ－1 A類で、口縁部が細かく打ち欠かれている。

179～185は常滑甕で、179～185は口縁部が上下に肥厚するもので、186～188はN字状の、いわゆる「折り返し口縁」を有するものである。

189～191・193・194は土師質土器の鍋で、すべて折り返し口縁を有する「伊勢型鍋」になるものである。192は土師質土器羽釜で、小型のものである。鍋の外面では頸部下位の一部分を除いてススが付着しており、釜は外面にスス、内面は炭素が付着している。

195～198は土器片の側辺が磨かれているもので、195・196が灰釉系陶器碗の底部、197・198が鉢か壺の体部を利用している。200～203は明瞭な磨痕はみられないが、同様な大きさで方形に打ち欠かれたものである。204～208は灰釉系陶器の高台部を利用した加工円盤で、181は常滑甕を利用した大型のものである。

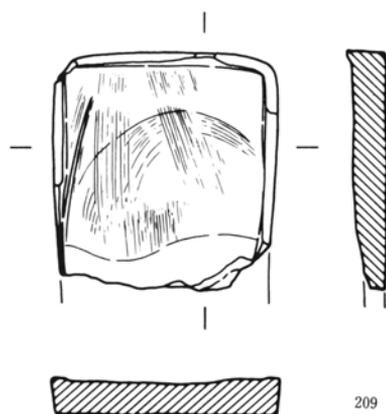
SD32 (209～268)

209は泥岩製の方形の硯で、縁部は欠損したり磨滅したりしてわずかにしか残っていない。内面には弧状と直線状の磨り痕がみられる。

灰釉系陶器碗のうち210のみがⅠ類で、無高台の小型品になる。211～214はⅡ－1 A類、218～220はⅡ－1 B類になる。217はⅡ－2類であるが、215・216に関しては1類との中間的な形態を示す。221～223は器高の高いⅡ－3類になる。217の外面には、ススが付着している。

灰釉系陶器皿はすべてⅢ類になる。232～244はⅢ－1 A類、245～247はⅢ－2 A類、248～251が器高の低いⅢ－1 B類になる。246の外面、247の内外面にはススが付着している。

252～260は土師質土器皿で、252～258がロクロ



第31図 SD32出土遺物 1 (1/2)

成形、259・260が非ロクロ成形になる。ロクロ成形のものうち、252・253は中型のもので、その他は小型のものになる。

261～265の鉢はすべて常滑産で、265は片口になる。

266は青磁碗で、輪花が施されている。267は灰釉系陶器碗の底部を利用した加工円盤である。268は灰釉系陶器碗の底部外面に「水」と墨書されている。

SD02 (269～283)

269は灰釉系陶器碗 I 類で、270が II-1 B 類、271はやや小型であるが III-2 類、272は III-1 類となる。273・274は II 類、275～277は III 類になる。そのうち276には、つけがけの灰釉が施されている。

灰釉系陶器皿のうち I 類になる260は、口縁部が打ち欠かされている。279・280は II 類、281・282は III-2 A 類になる。

283は常滑甕で、口縁端部が舌状に細く鋭くなっている。

SD05 (284～287)

284・285は灰釉系陶器碗 II-1 B 類になるもので、286はその高台部を利用した加工円盤である。

287は土師質土器鍋で、く字状に折れる口縁部を

もつ。頸部下位を除いて外面にはススが付着する。

SD06 (288～296)

今回提示したものはすべて溝内の集石かその周辺から出土したものである。288・289が灰釉系陶器皿の I 類で、290・291は灰釉系陶器碗の II 類で、他の高台部は III 類か。

SD07 (297～303)

279・299は灰釉系陶器碗の II 類で、他は III 類となる。

303は土師質土器の鍋で、内弯して垂直に延びる口縁部をもつ。内耳を有するか。

SD28 (304～336)

灰釉系陶器碗のうち、304～309・311～315は II-1 類で、310が III-1 類となる。II 類のものうち、304～306は 1 B 類、307～309は 1 A 類になる。

灰釉系陶器皿はすべて III 類になり、316～325が 1 A 類、326・327が 1 B 類になる。

土師質皿はすべて非ロクロ成形のもので、小型の332を除いては中型品になる。

315は土師質土器鍋の折り返し口縁をもつものである。

333・334は常滑鉢に、336は常滑甕の底部になる。

SK03 (337～341)

337～341は III 類の灰釉系陶器碗で、337・338は III-2 類になる。337は口縁部の一部が内側に押圧されており、つけがけの灰釉が施されている。また、341の底部内面には十字のヘラ記号がみられる。

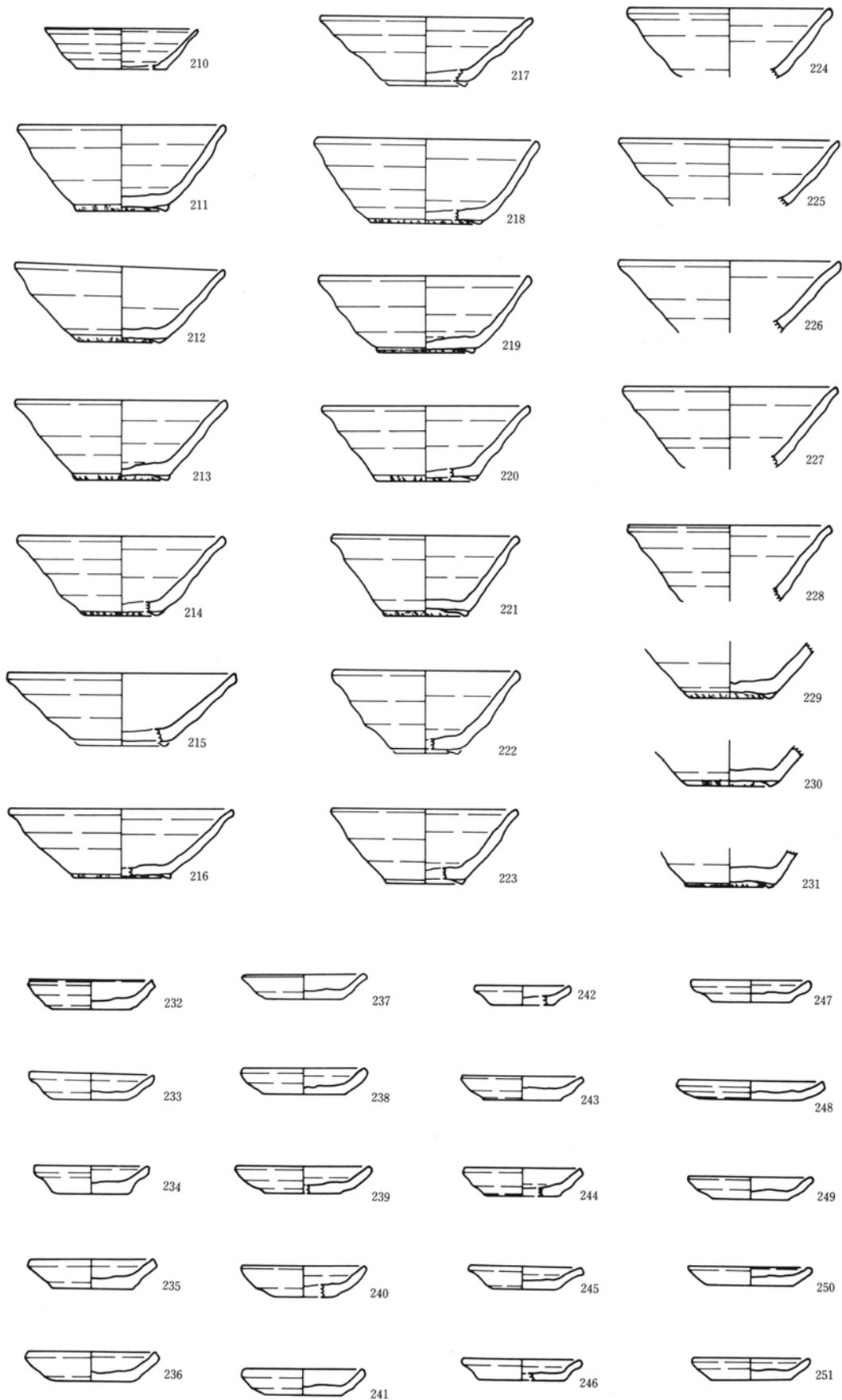
SK14 (342～344)

324は鉄製の刀子で、先端部が欠損しているが、X線調査では柄の部分が確認できる。

344は灰釉系陶器碗の III 類で、やや小型ではあるが 2 類になると考えられる。343は同じく皿の III-2 A 類になる。

SK62 (345～348)

349は常滑産と思われる浅鉢で、346～348が灰釉系陶器皿の III 類になる。



(1/4)

SK60 (349~357)

349~354が灰釉系陶器碗のII-1 A類で、355・356がII-3類になる。350は内面にススが付着している。

SK70 (358~369)

灰釉系陶器碗はすべてIII類で、363が2類になる可能性がある他は1類になる。また、369は灰釉系陶器皿のII類になるもので、底部外面に「稔」の墨書がある。362の外面にはススが付着し、367の体部内外面にはつけがけの灰釉がみられる。

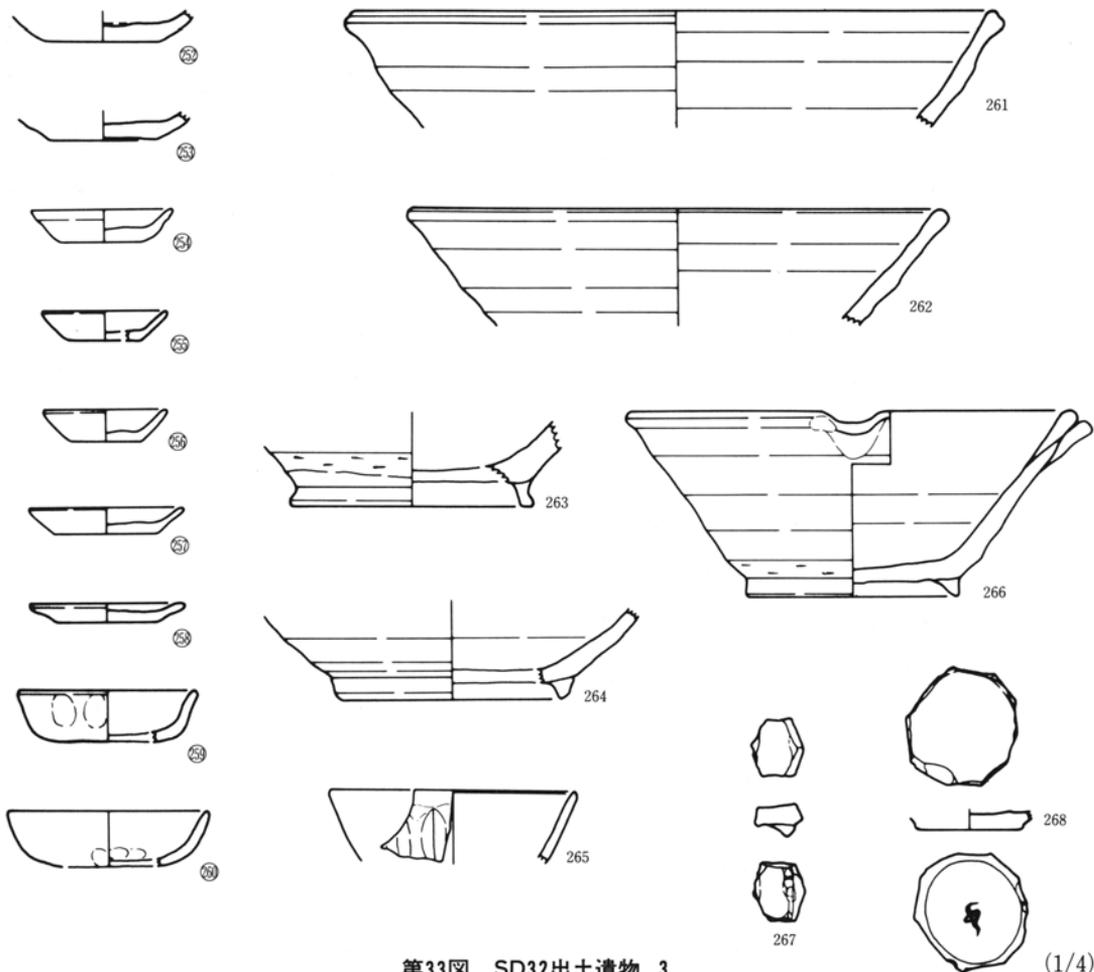
その他の遺構出土土器・土製品 (370~392)

372~377は掘立柱建物と柵列の柱穴から出土したもので、III類の灰釉系陶器皿になる。382・383は灰釉系陶器碗で、382がIII-2類、383がII-1 B類になる。384・386は土師質土器皿のロクロ成形のもので、器高がやや深い。389は長径4.0cm、短径2.45cm、孔径0.46cm、重さc20.4gを測る土錘で、両小口に使用痕が残っている。370・371は灰

釉系陶器の高台部を利用した加工円盤で、390は同じく高台部を利用しているが、側面が磨られている。391は口縁部が上下に肥厚する常滑甕。

墨書土器 (393~402)

393~402の墨書土器はすべて焼成後の灰釉系陶器に書かれたものである。393は口縁部につけがけの灰釉があるIII-2類の碗で、底部外面に「田」と書かれている。また396もIII-2類になるが、同じ場所に「稔」が書かれている。394・399・400もおそらくIII類になると考えられるが、それぞれ「三」または「年」、「田」、「白」または「田」が書かれる。379はII-1 A類になるもので、体部の中位よりやや上に「上一」と書かれている。395はII類の底部を打ち欠いて円形に整形したもので、底部外面に「上」が書かれる。401・402もII類で、401は「○」の中に「、」または「一」が、402は「十」が書かれている。398は、III-1 A類の皿の底部外面に「上」と書かれているものである。



穿孔土器 (403)

ロクロ成形の土師質土器皿の底部中央に、外面から孔を穿ったもので、体部から口縁部にかけては打ち欠いたか磨いたかして、円形に整形されている。

陶丸 (404~411)

丁寧にナデられて成形されているもので、411のみが土師質で、他は灰釉系陶器と同質である。

青磁・白磁 (412~433)

412~414は玉縁口縁をもつ白磁碗で、外面下位は無釉になる。415は口縁端部が無釉の、いわゆる「口禿げ」の碗である。416・417も白磁の小碗で、418は壺類の肩部にあたりと考えられ、浮き彫りの紋様が施されている。

419~433は青磁で、420の碗の内面にはクシによ

る波状の紋様、422・423・427には輪花紋様が施されている。器種は不明であるが、432の底部内面にはクシによる刺突や直線紋がなされる。433の碗底部内面には、沈線で方形に区画された内側に紋様が描かれるが、釉が厚いため詳細は不明である。

加工円盤 (416~490)

灰釉系陶器碗の高台部を打ち欠いて整形されたものが416~484で、径2cm以下で重量が4g程度のものから、径4cmで重量20gのものまで大きさは多様である。485~489は灰釉系陶器の体部を利用したもので、490は常滑甕を整形している。

羽釜 (516・517)

516は滑石製の羽釜で、517は常滑産の甕質の大型の羽釜になる。517の体部外面にはススが附着している。

3. その他の遺物

491は突帯をもつ土器で、突帯上に板状の原体で刻みをつけられ、その下位に不揃いな細かいハケメをもつ。時期・器類とも不明である。2は貝殻による条痕をもつ深鉢の口縁部で、端部上面に凹線がひかれている。時期は馬見塚期~檉王期にあたる。3はおそらくその時期の深鉢の底部になるものであろう。

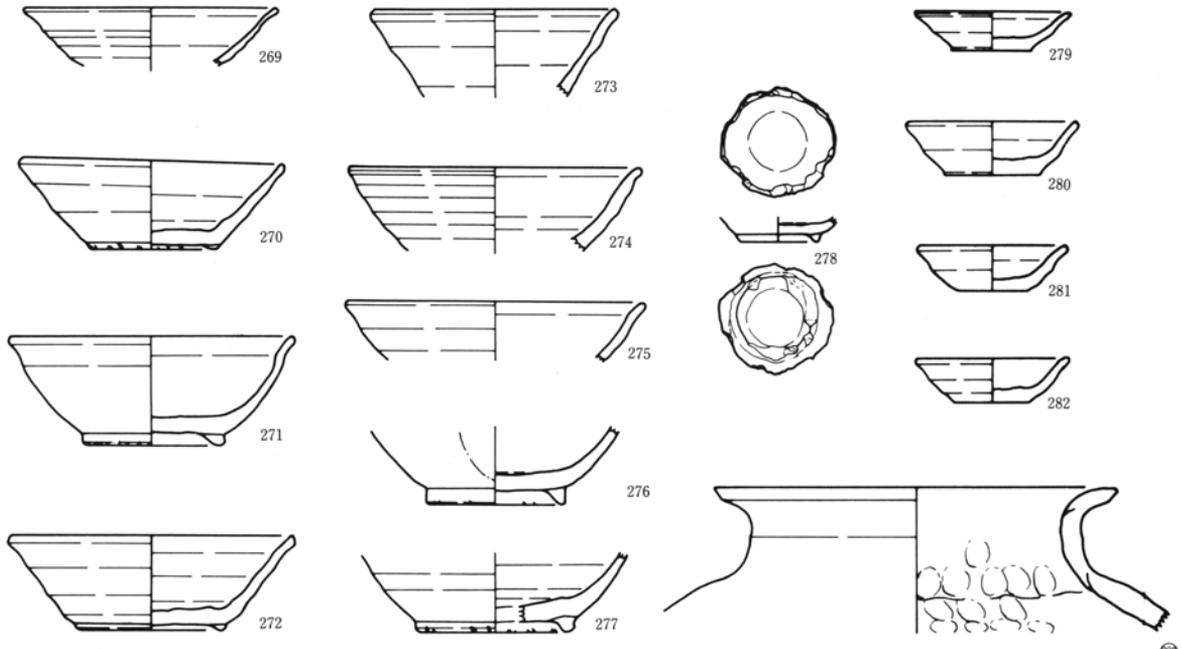
494は弥生時代後期の加飾太頸壺の口縁部で、垂下する端部の内外面には羽状の細い刺突がなされている。497・498は同じ後期の甕の脚台部になる。495は欠山期の内弯する高杯の脚部であるが、磨滅が進んでおり調整は不明である。6は甕口縁部で、口縁端部がヨコナデにより横位に肥厚して延びるもので、S字状口縁甕D類にあたり、時期は松河戸I式期になる。

499~501は須恵器杯身の身になるもので、H-44号窯式~I-17号窯式期のものである。また、502の短頸壺と503の高杯もその時期に属する。504

~507は碗の口縁部と高台部で、K-90~O-53号窯式のものになる。また、511~513が7~8世紀のもの、514・515はそれより新しい10世紀前後のものになろう。さらに、510は円柱状を呈する土師質の土製品で、被熱しており、竈の支脚であると思われる。

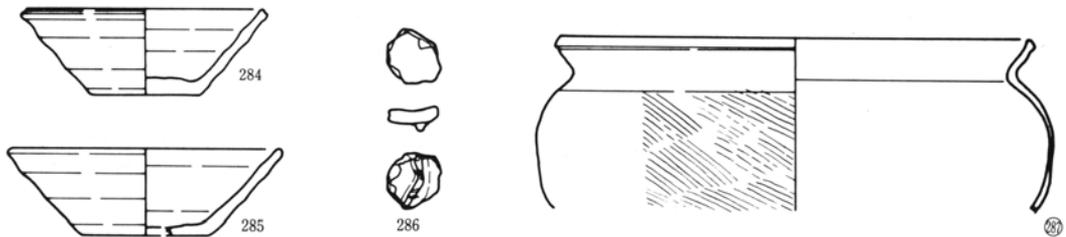
392は口縁外面の下位に鏝をもち、口縁部が内傾するもので、18世紀代の常滑甕になる。

牛ノ松遺跡



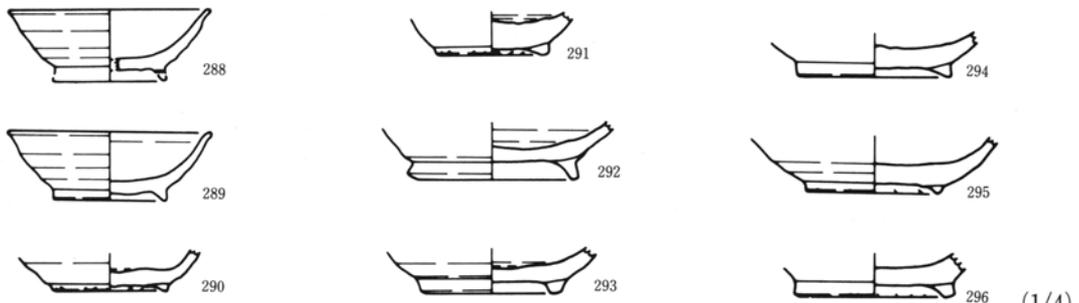
第34図 SD02出土遺物

(1/4)



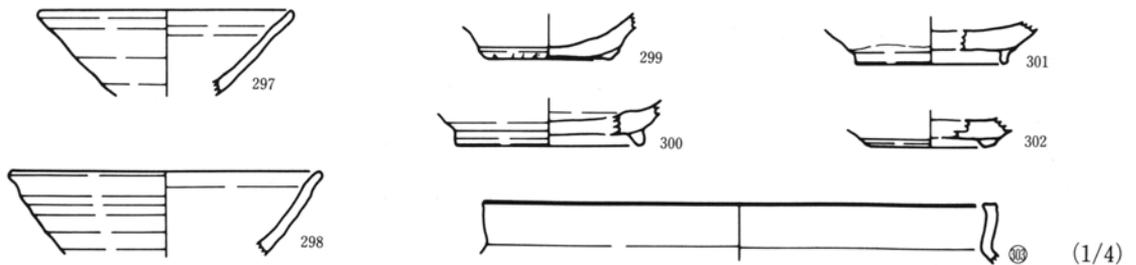
第35図 SD05出土遺物

(1/4)



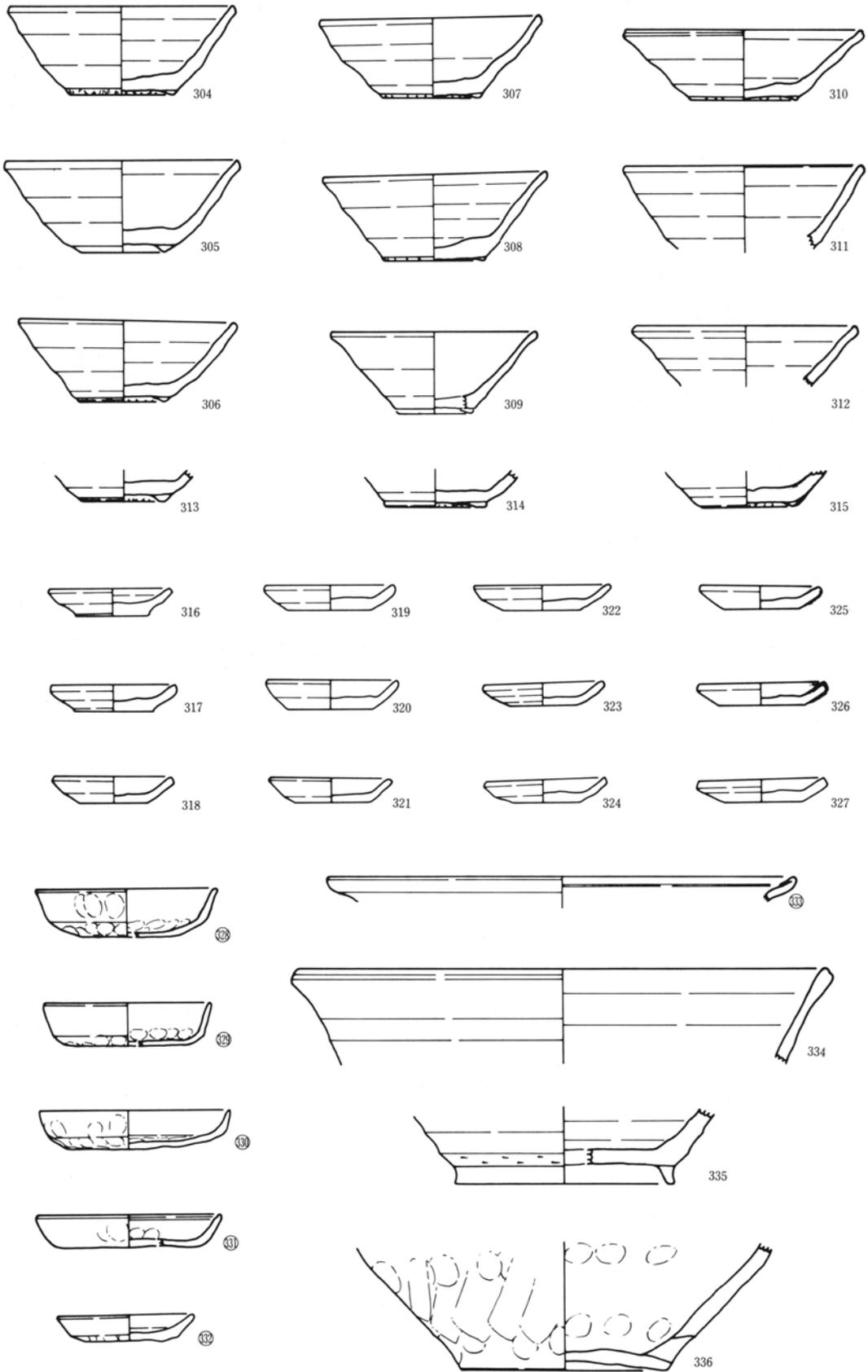
第36図 SD06出土遺物

(1/4)



第37図 SD07出土遺物

(1/4)

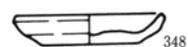
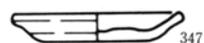
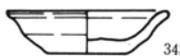
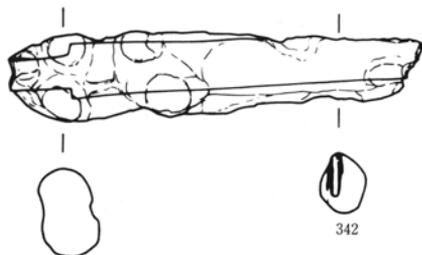


第38図 SD28出土遺物

(1/4)

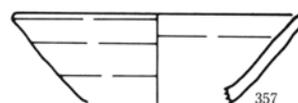
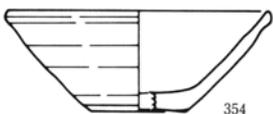
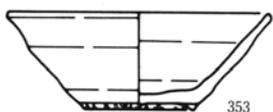
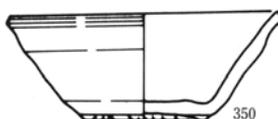
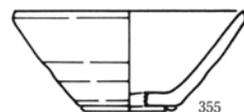
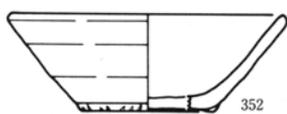
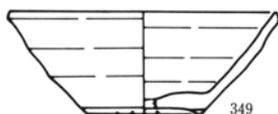


第39図 SK03出土遺物 (1/4)

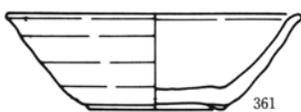
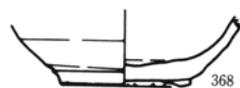
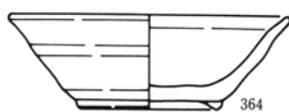
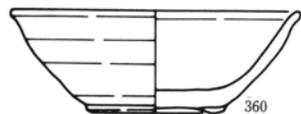
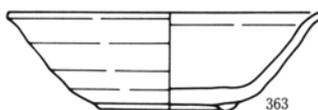
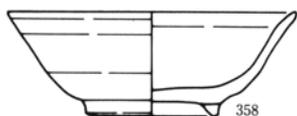


第40図 SK14出土遺物 (1/4)

第41図 SK62出土遺物 (1/4)

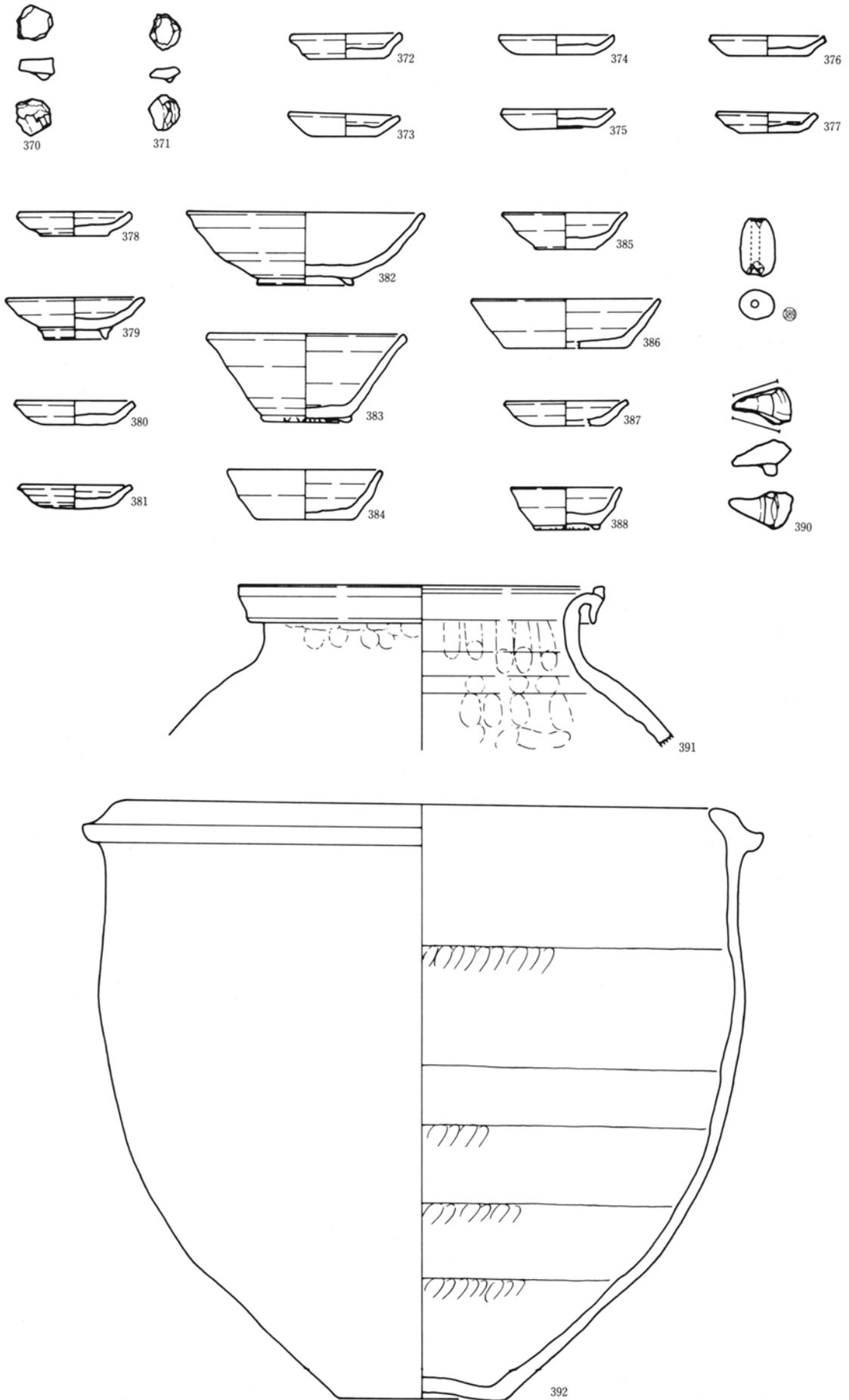


第42図 SK60出土遺物 (1/4)



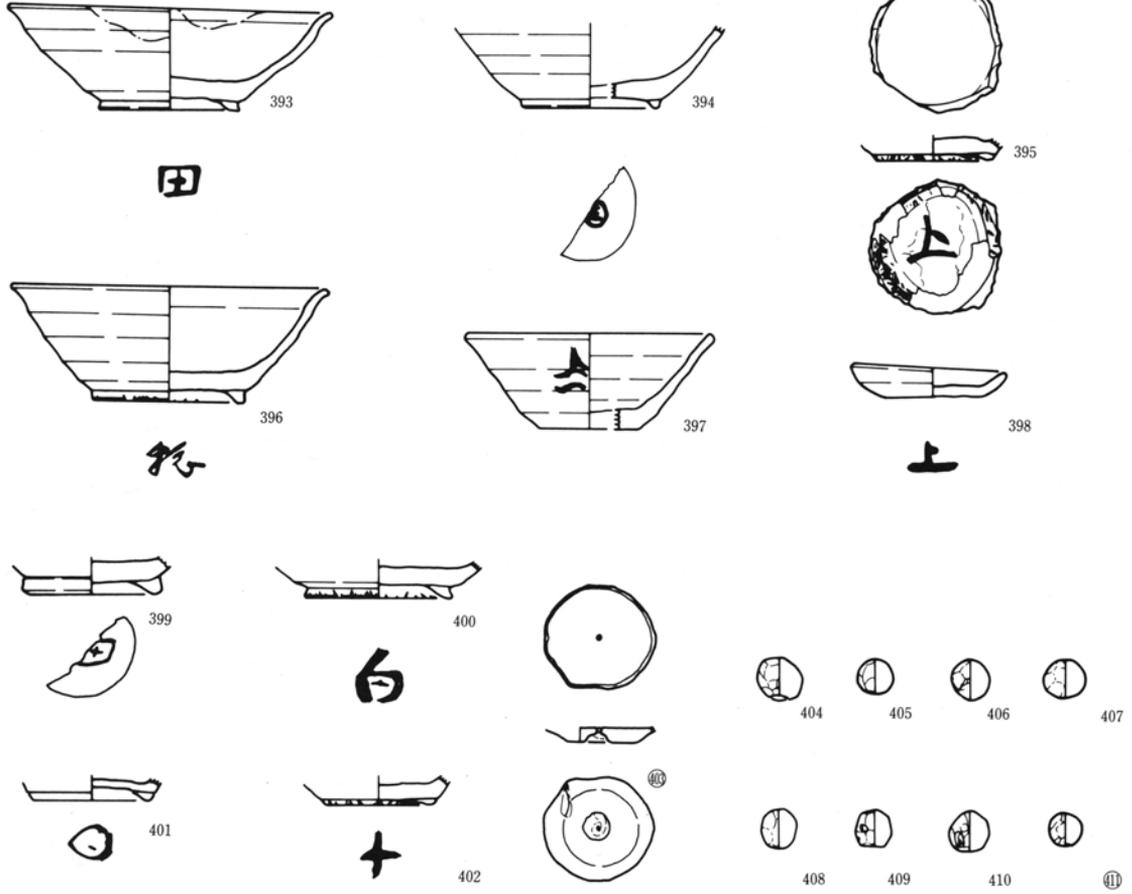
福

第43図 SK70出土遺物 (1/4)



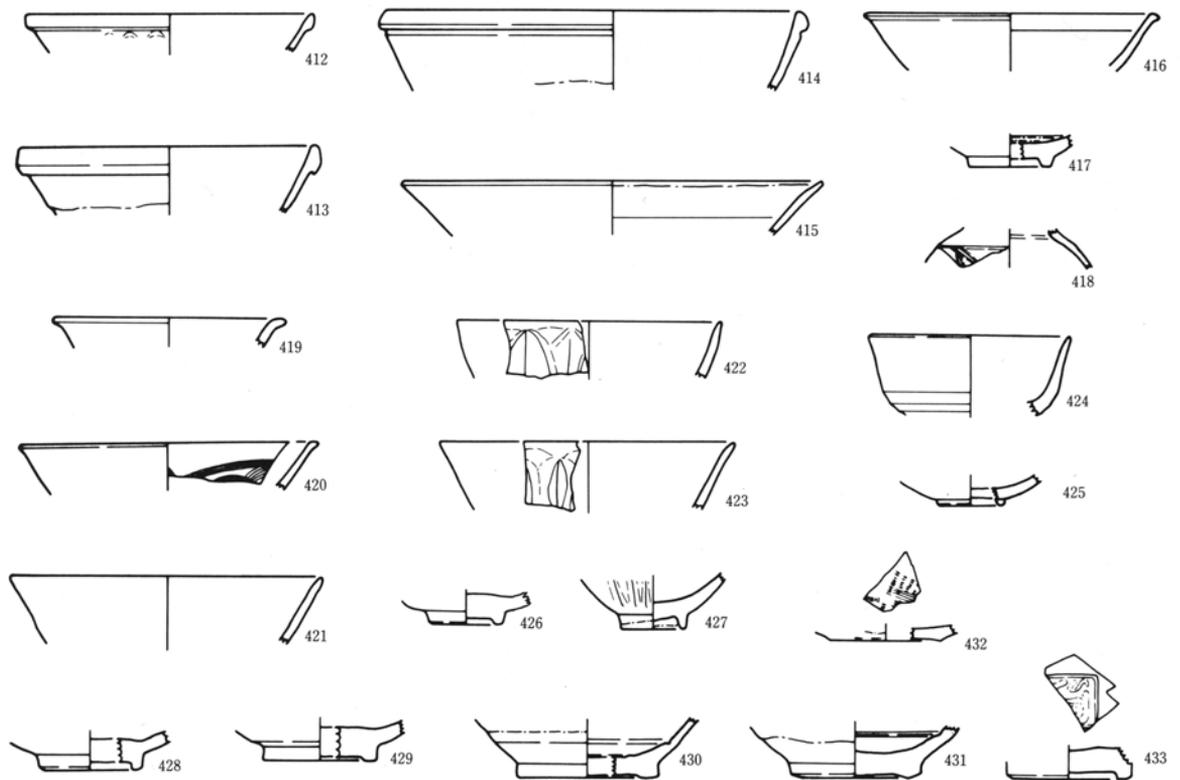
第44図 その他の遺構出土の土器・土製品

牛ノ松遺跡



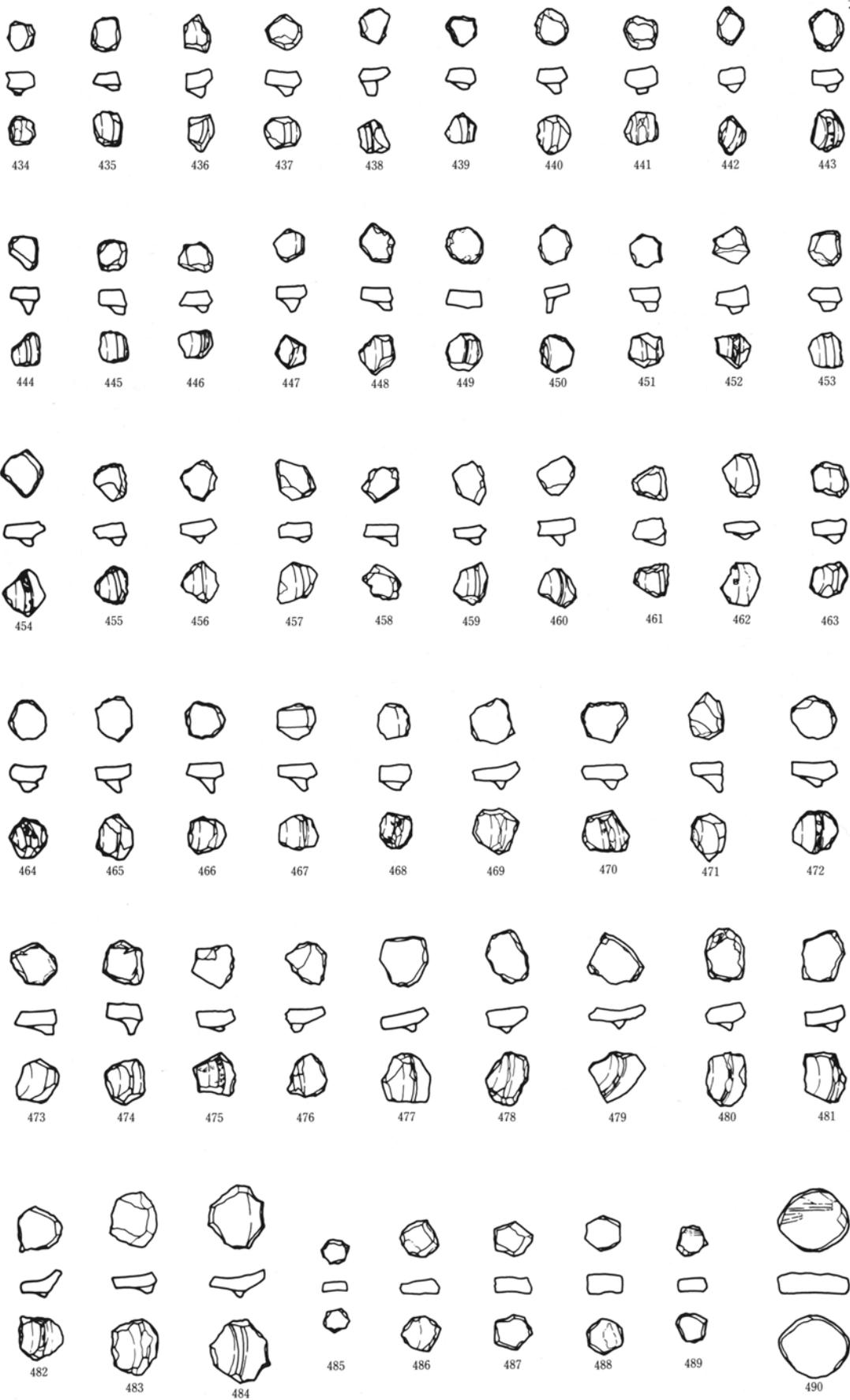
第45図 墨書土器・穿孔土器・陶丸

(1/4)



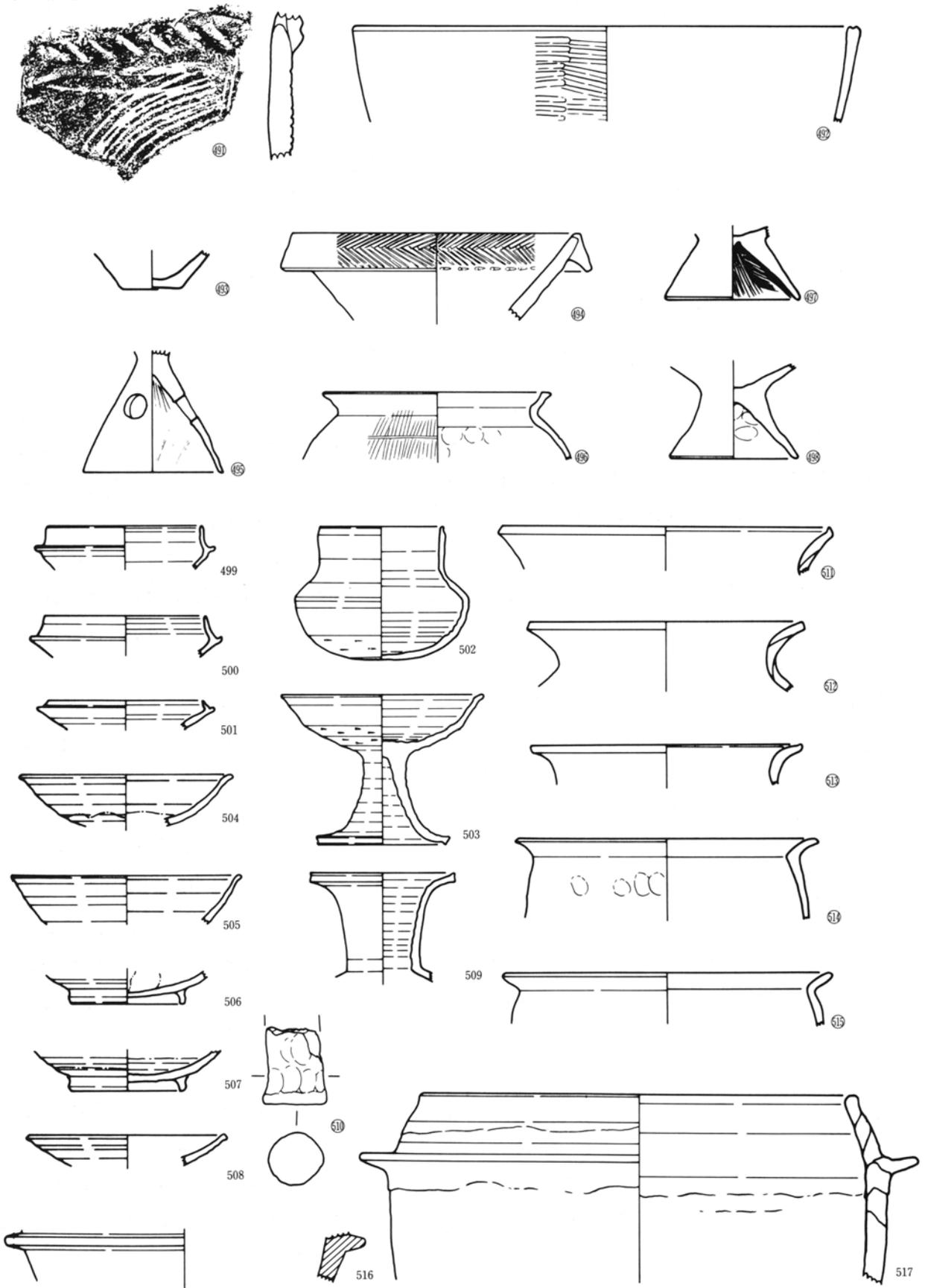
第46図 青磁・白磁

(1/4)



第47図 加工円盤

(1/4)



第48図 その他の遺物

(1/4, 491は1/2)

IV 自然科学的分析

1. 牛ノ松遺跡の地形・地質

牛ノ松遺跡は額田郡幸田町大字須美地内に所在する。現在の須美地内の集落は、三河山地南西端に突出した幡豆山塊中央部を開析し、東から西へ流れる須美川の中位段丘上に分布している。須美川は、西尾市駒場付近で岡崎平野へ流出し、矢作古川と合流し三河湾へと注ぐ。

遺跡を取り囲む幡豆山塊は、主に中・古生代の変成岩よりなる領家変成岩類により構成されている。遺跡を埋積する礫層は、この領家変成岩類の珪質片岩・泥質片岩・砂質片岩などの礫が中心となる。

須美川の両岸には、幡豆山塊が高度を減じて形成する丘陵がせりだし、丘陵先端には標高22～28 mの平坦面あるいは緩傾斜面を呈する中位段丘が分布している。中位段丘構成層の下位には、これと傾斜不整合で接する更新世の地層、赤褐色ないしは黄褐色の主に砂質シルト層が3～4 m程度堆積していることが確認された。遺跡周辺では現在までに更新世の地層が確認されていなかったために地質学的に重要な発見と言えよう。

一方、丘陵部には一部で赤土を交えた高位段丘堆積物の残丘が存在している。この高位段丘堆積物は、おそらく牛ノ松遺跡においても確認された更新世の堆積物と同時期の堆積物と考えられ、現在見られる両者の分布高度の違いは、更新世以降の幡豆山塊の隆起が盛んであったことを示すと思われる。その高位段丘から供給された二次堆積の赤土は遺跡内でも確認されたが、山塊の上昇との

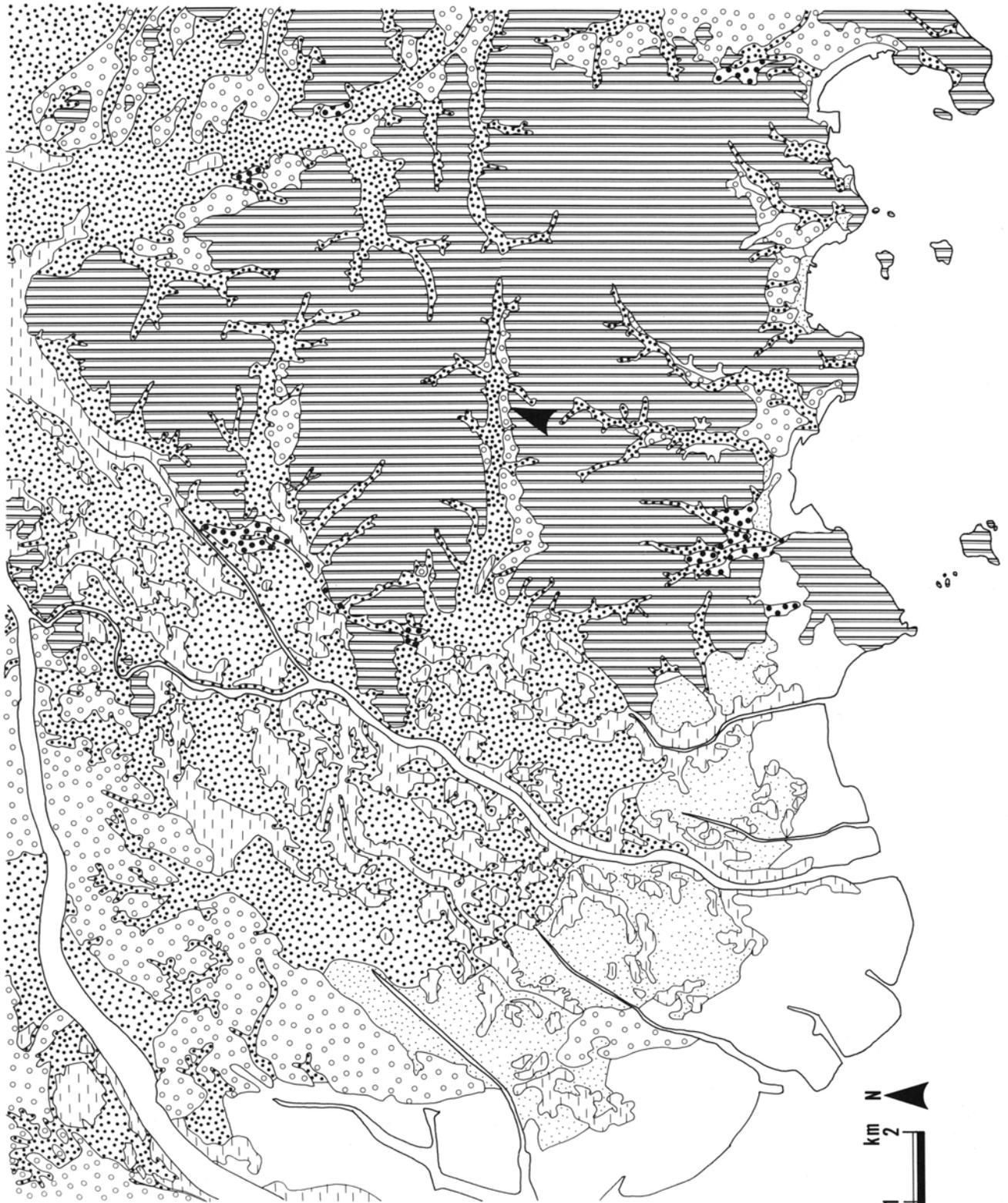
関連性は不明である。

更新世の堆積物上には、須美川の段丘堆積物と考えられる地層が重なる。この地層の下部は砂礫層により構成され、上部には比較的安定した黄褐色砂質シルト層が重なる。

段丘堆積物上には、旧石器を包含する細礫混じりの暗黄褐色砂質シルト層が堆積するが、これは段丘堆積物ではなく、丘陵緩斜面から供給された再堆積層であると考えられる。

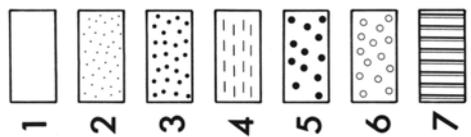
遺跡内で確認された谷は、これらの地層全てを削り込み丘陵地から須美川へと連続する。この谷の埋土下層には、始良Tn火山灰起源と考えられる火山ガラスが確認された（第50図）こと、谷が一時的にあふれた時に堆積したやや有機分の多い暗茶褐色砂質シルト層（旧石器包含層を覆う）下部にアカホヤ火山灰（IV章－3）が確認されたこと、さらにこのシルト層を削り込んで中世の遺物を含む礫層が埋積していることなどから、旧石器時代から中世にわたっての長期間、谷地形が継続していたものと考えられる。

長期間に及び土石流の危険をはらんだ谷地形は、付近に暮らす人々にとって非常に危険な存在であったものの、谷から離れた地域にはあまり影響の及ばない安定した基盤が展開していたものと思われる。



第49図
牛ノ松遺跡周辺の
地質図

1. 干拓地
2. 三角州
3. 氾濫平野
4. 自然堤防
5. 低位段丘
6. 中位段丘
7. 基盤岩類



2. 旧石器包含層の形成について

牛ノ松遺跡の発掘調査では、遺跡基盤層とされた地層から数点の旧石器を検出した。愛知県において旧石器が検出されることは稀であり、過去に検出された例をみても、後世の人々の遺構形成に伴って、遺跡基盤層から偶然に掘り出されたものがほとんどであり、原位置を保った状態で検出される例は少ない。近年になり、旧石器を包含する可能性がある地域においては遺跡基盤層にトレンチを設定するなどの調査を実施しているが、ほとんど成果を上げていないのが現状である。こうした点をふまえて、牛ノ松遺跡の旧石器包含層について、包含層形成のしくみ、時期などの検討を行う。

(1) 旧石器包含層の形成機構

石器群を包含する地層は、92A区の谷東部に限定して見られた細礫混じりの暗黄褐色砂質シルト層であるが、この堆積物の分布状態を第51図A・Bに、概略図を第51図Cに示した。

図示したように旧石器包含層は、遺跡東部の丘陵地から遺跡内の谷に向かい、傾斜しながら層厚を増し堆積している。また、堆積物を構成している細礫は円礫ではなく、破碎され脱色したものがほとんどであり、再堆積を示している。さらに石器群も、この斜面に沿うように谷方向に向かうほどより低い地点で出土している。

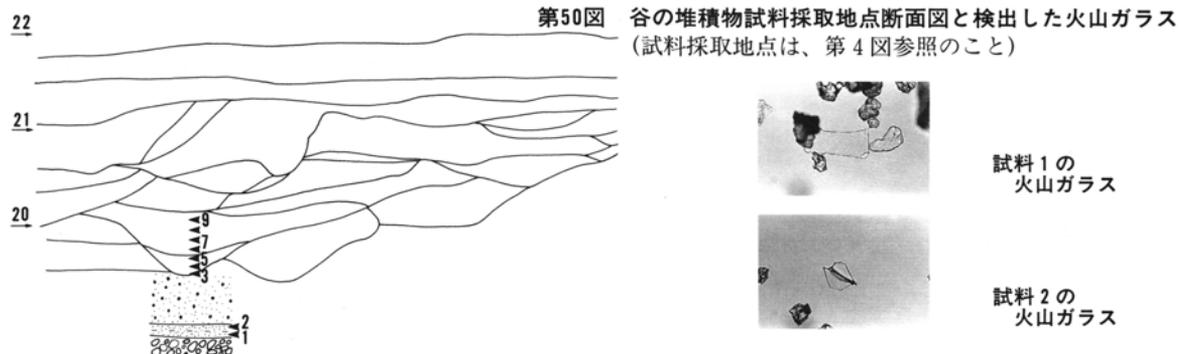
従って、この旧石器包含層は、段丘を構成する

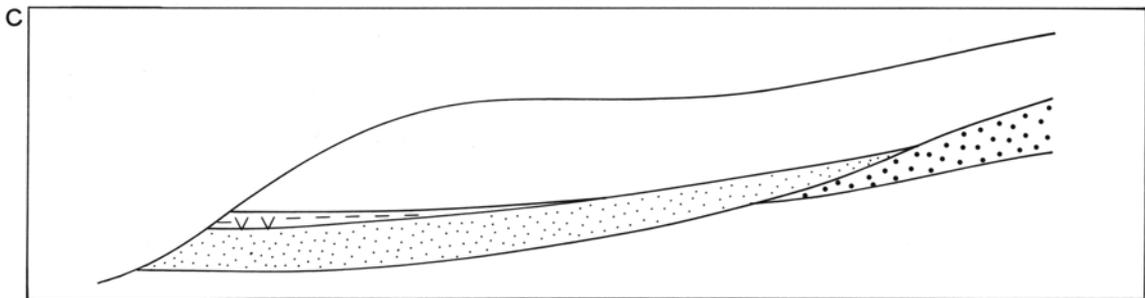
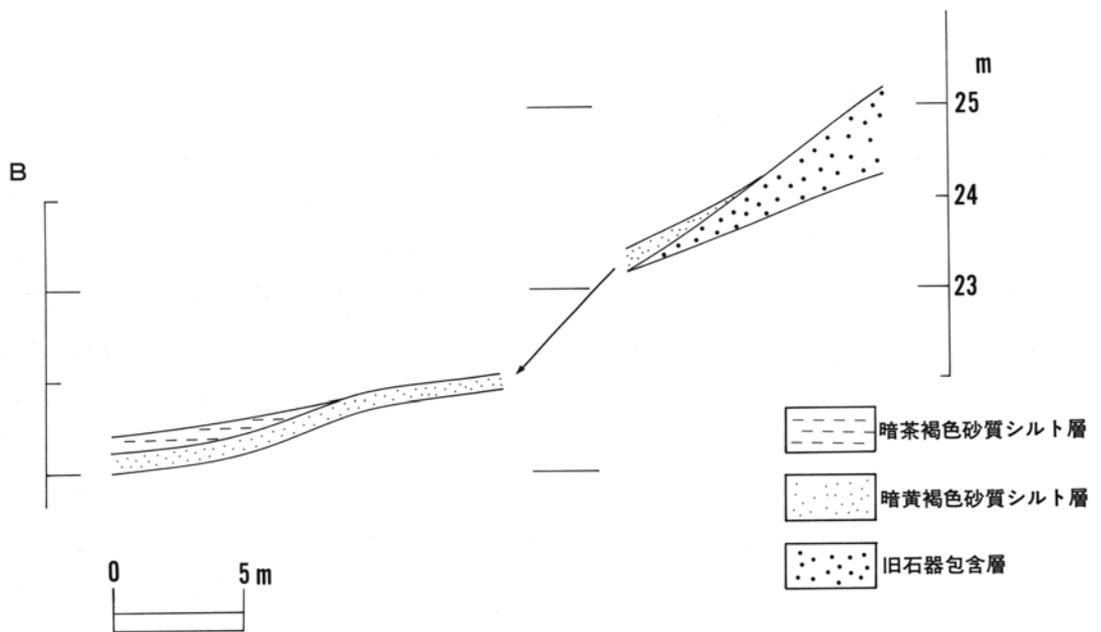
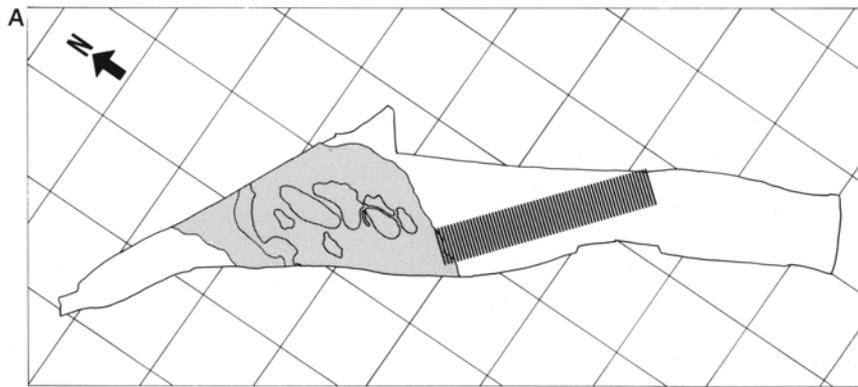
地層そのものではなく、丘陵の高まり部分から遺跡内の谷へと斜面を移動してきた堆積物、すなわち緩斜面堆積物であると考えられる。石器群は、緩斜面堆積物の移動時にこれに取り込まれて堆積したと考えられる。

(2) 緩斜面堆積物の年代

旧石器を包含する緩斜面堆積物の年代を直接測定するための試料は、得られなかった。しかし、堆積物が谷に向い傾斜していることから少なくとも谷の形成後に堆積が行われたと考えるべきである。その手がかりとして、谷を埋積する堆積物中から火山ガラスの抽出を行い、谷形成後に降灰した広域テフラによる年代推定を行った。

その結果、谷の基底部分(巨礫層)直上のシルト質砂層(第50図、1~5)より屈折率1.498-1.501を示す始良Tn火山灰起源と考えられる火山ガラスが検出できた。また谷が一時的に増水し、谷周辺に湿地的環境が展開したと推定される砂質シルト層が、緩斜面堆積物を覆っているが(第51図)、このシルト中に後述するアカホヤ火山灰が確認された。従って、旧石器包含層である緩斜面堆積物の形成年代は、始良Tn火山灰降灰(21,000-25,000yBPの間、町田・新井、1992)以降、アカホヤ火山灰降灰期(およそ6,300yBP、町田・新井、1992)以前の時期と言えよう。





第51図 旧石器包含層分布断面図

A. 分布図作成地点, B. 分布高度, C. 分布模式図

3. 牛ノ松遺跡の火山灰

牛ノ松遺跡で旧石器が検出された92A区の谷南方地域において、旧石器包含層準を確認するため、南北に数本のトレンチを設定した(第51図A)。このトレンチにより谷に向かい緩やかに傾斜する旧石器包含層(暗黄褐色砂質シルト層)上に、レンズ状になるものの谷方向から連続する淡橙色の火山灰状の堆積物が確認された。この堆積物は、旧石器包含層上に分布することから、年代的に非常に重要なものである。ここでは、以下に示す分析手順によってこの堆積物を『アカホヤ火山灰』と認定し報告する。

(1) 分析方法

分析方法は、近年の火山灰分析法の標準的手法とされている吉川(1976)の方法を参考にした。

A. 試料の処理

採取した試料は一部で粘土化が進行した風化の度合の高いものであった。その中から比較的新鮮な部分を取り出しこれを分析試料とした。

処理は、次の①～④の手順で行った。

- ①ピーカーに入れた大豆大の試料を指で潰しながら数回水洗する。
- ②さらに分散剤として5%ヘキサメタリン酸ナトリウム水溶液を用い、超音波洗浄を上澄み液が透明になるまで繰り返す。
- ③ふるい分けを行い1/4～1/16mmの粒子を選び出す。
- ④屈折率測定用試料は、40°C以下で乾燥させ、鉱物組成および形状観察用試料はプレパラートに封入した。

B. 分析方法

処理を行った試料は、次の①～③の項目で分析を行った。

①鉱物組成

プレパラートに封入した試料を200個以上観察し、ガラス・長石・石英・重鉱物の個数%を計算する。

②火山ガラスの形状

プレパラートに封入した試料のうち火山ガラスについて次に述べる3つに分類(吉川, 1976)し、200個以上観察して個数%を計算する。

扁平型火山ガラス：透明、平板状で突起が少ない平滑なガラス。平板状で突起のないもの(Ha)と平板状の面に1～3本の直線状・曲線状の突起があるもの(Hb)の2種類に区分できる。

中間型火山ガラス：扁平型と多孔質型火山ガラスとの中間的な性質のガラス。平板状の面に曲線状の突起が比較的多くあり、Hb型と次に述べるTa型の中間的なもの(Ca)と、平板状の面に直線状平行な突起を3本以上(次に述べるTbよりも少ない)もつもの(Cb)の2種類存在する。

多孔質型火山ガラス：透明で気泡を多く含み、非常に密に曲線状・直線状突起が存在するガラス。不規則な多角形で、曲線状の突起が密にあるもの(Ta)と繊維状に直線状平行な突起が密にあるもの(Tb)の2種類存在する。

③火山ガラスの屈折率測定

屈折測定装置MIOTを用いて、30個以上の火山ガラスの屈折率を測定した。

C. 分析結果

Bに示した分析方法により次の分析結果を得た。

①鉱物組成(第3表)

試料の風化が著しかったものの、火山ガラスの含有率が圧倒的に多かった。その他、鉱物として極少量の長石が認められた。

②火山ガラスの形状（第3表、第54図）

扁平型のものが70%近くを占め、特に平板状の面に1～3本の直線状・曲線状の突起があるもの（Hb）が多く、50%以上を占めていた。中間型の火山ガラスもCa・Cbを合わせ30%程度を占めていたが、多孔質型の火山ガラスはごく少量しか含まれていなかった。

扁平型の火山ガラスの中には、褐色を示すものも全体の2.3%含まれていた。

③火山ガラスの屈折率

火山ガラスの屈折率は、 $n=1.508-1.512$ を示した。

D. 火山灰の同定

牛ノ松遺跡において確認された本火山灰は、旧石器（正確には細石刃文化～縄文時代草創期、III章-1）の遺物包含層を覆うように分布する。しかし、両者の地層には時間的な隔たりが若干存在すると思われる。また、火山灰上部の暗茶褐色砂質シルト層からは、縄文時代の石鏃が出土している。このような、年代に降灰した広域テフラとして、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、以下アカホヤ火山灰とする）があげられる。

アカホヤ火山灰は、町田・新井（1978）により南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラで、その年代値はおよそ6,300yBP（町田・新井、1992）とみなされている。その特徴は、バブル型の多い火山ガラスで、薄手で淡褐色を帯びるものもあり、屈折率もかなり高い（ $n=1.508-1.516$ ）ことである。町田・新井（1978）による火山ガラスのバブル型は、吉川（1976）のHb型にほぼ相当し、牛ノ松遺跡における火山灰のHb型多産と矛盾しない。また、薄手の淡褐色を帯びる火山ガラスが含まれ

ること、屈折率がかなり高いこと（ $n=1.508-1.512$ ）も良く一致する。

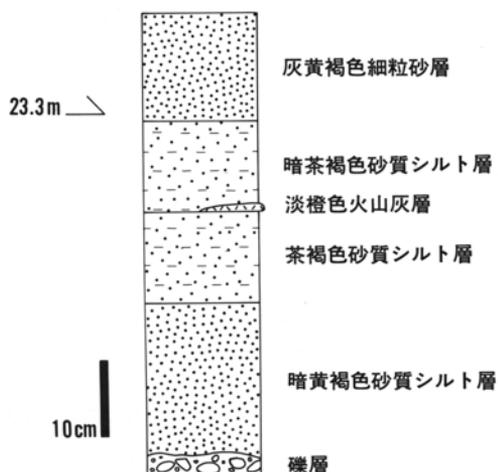
吉川（1976）の手法によって記載されたアカホヤ火山灰として、吉川ほか（1986）の京都府伏見区横大路ほかで確認された横大路火山灰層がある（第3表）。この横大路火山灰層も火山ガラスとしてH型が多く、褐色透明も含まれ、屈折率も $n=1.509-1.515$ と高い。

牛ノ松遺跡の火山灰は、採取できた試料が量的に少なく重鉱物が良好な状態でなかったために、火山ガラスを中心とした検討しかできなかったが、層位的年代・火山ガラスの特徴から、広域テフラのアカホヤ火山灰であると結論づけてよいと思われる。

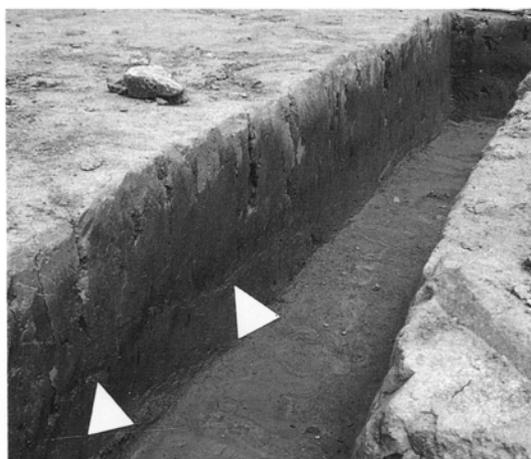
なお、縄文時代後期・晩期境界頃に降灰したとされる松河戸火山灰（森ほか、1990、3,120±120 y.B.P.）は確認できなかったが、周辺の遺跡において今後発見される可能性は十分にあると考えられるので、その特徴を第3表、第54図に掲載しておく。

文献

- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰、第四紀研究，17,143-163.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス，276 p, 東京大学出版会.
- 森 勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣（1990）愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰について，第四紀研究，29,17-23.
- 吉川周作（1976）大阪層群の火山灰層について，地質学雑誌，82,497-515.
- 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和（1986）近畿地方中部に分布する後期更新世～新世の火山灰層について，地球科学，40,18-38.



第52図 火山灰層序

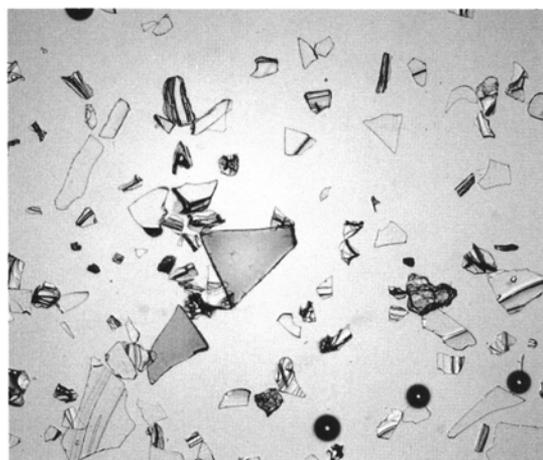


第53図 火山灰 (矢印) の産状

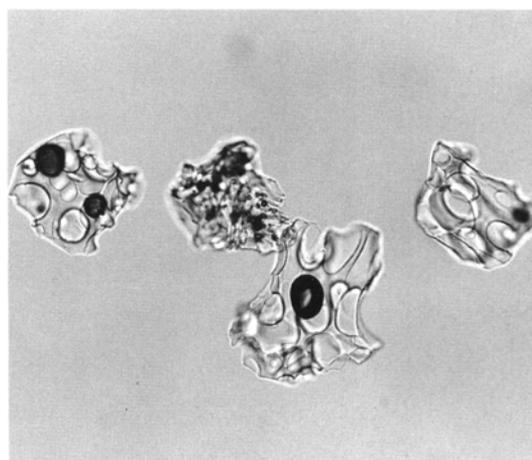
第3表 火山灰層の岩石記載的性質

火山灰	鉱物組成 (%)				火山ガラスの形状				火山ガラスの屈折率	重鉱物組成 (%)						
	Gl.	Fl.	Qz.	Hm.	H.	C.	T.	O.		Bi.	Am.	Op.	Cp.	Zr.	Ap.	Oq.
牛ノ松	98	2	0	0	68 (a.15 b.53)	31 18 13	1 1 0	0	1.508-1.512	-	-	-	-	-	-	-
横大路	95	4	0	1	75	23	2	0	1.509-1.515 (1.511-1.512)	17	37	21	1	1	5	17
松河戸	90	4	2	4	11	56	33	0	1.499-1.504 (1.501-1.502)	10	38	26	9	0	1	16

鉱物組成：Gl. 火山ガラス、Fl. 長石、Qz. 石英、Hm. 重鉱物
 火山ガラスの形状：H. 扁平型、C. 中間型、T. 多孔質型、O. その他、()内はa, b型の内訳
 重鉱物組成：Bi. 黒雲母、Am. 角閃石、Op. 斜方輝石、Cp. 単斜輝石、Zr. ジルコン、Ap. 燐灰石、Oq. 不透明鉱物
 横大路は吉川ほか (1986)、松河戸は森ほか (1990) による。



(牛ノ松遺跡, K-Ah)



(松河戸遺跡, MT)

第54図 火山灰の顕微鏡写真

2. 牛ノ松遺跡出土土師器皿の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

(1) はじめに

蛍光X線分析による土器の胎土研究は最近では窯跡の残っていない土師器や弥生土器にまで拡張されている。その理由は地域差を表示する因子は人為的なものではなく、地質的な原因で地域差を表わすからである。

生産地がわかっていないから、直接、産地問題の解決という訳にはいかないが、同一遺跡から出土した多数の土師器を分析して、何種類の胎土があるか、つまり、何ヶ所の製作場所から供給されたものであるかが推察できる。また、同時器の近辺の数ヶ所の遺跡から出土した土師器を分析して、同じ胎土の土師器があるかどうか分かる。このようなデータを集積していくことによって、土師器の生産体系とその伝播・流通の様相を推察することもできる。本報告では牛ノ松遺跡、麻生田大橋遺跡、八面山北部遺跡から出土した土師器皿の蛍光X線分析の結果について報告する。

(2) 分析方法

須恵器と同じようにして、土器表面を研磨した後、100メッシュ以下に粉砕した。粉末試料は高圧をかけて固め、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成して蛍光X線分析を行った。波長分散型の自動分析装置（理学電機製3270型機）を使用した。

分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示された。もし、%やppmによる濃度表示が必要であれば、標準化値にJG-1の各元素の分析報告値を乗ずればよい。この報告値は地質調査所か

ら報告されている。しかし、地域差を比較する上には、JG-1による標準化値の方が便利であるので、この研究では終始一貫、JG-1による標準化値を使用している。

本報告のデータ解析には、クラスター分析法と、Rb-Sr分布図などを併用した。

(3) 分析結果

分析データは第4表にまとめられている。

はじめに、牛ノ松遺跡出土土師器皿の分析結果について説明する。まず、クラスター分析によって、54点の試料を分類することからはじめた、K、Ca、Rb、Srの4因子を使い、群平均法でクラスター分析した結果を第55図に示す、樹状図には多くの枝が分かれている。どこで区切るかについては特に規則性はない。筆者は通常、Rb-Sr分布図やK-Ca分布図での分布状況を参考にして樹状図を区切ることにしている。その結果、No.1~No.47をA群、No.3~No.13をB群、No.11~No.40をC群、No.33、37をD群に区切ることにした。この分類結果を分布図上で確かめてみよう。

A群、B群の試料のK-Ca分布図を第56図に示す。A群、B群の試料を包含するようにしてそれぞれ、A群領域とB群領域を示してある。これらは定性的に領界を示すにすぎないが、領域を比較する上には十分役に立つ。第56図から、A群領域は明らかにB群領域からずれており、A群とB群の土師器皿の胎土は別物であることを示している。第57図には、A群、B群の土師器のRb-Sr分布図を示す。この分布図でも両者はそれぞれ、まとまって分布しており、かつ、明らかにずれて分布し

ている。ここでも、A群、B群は別の胎土であることがわかる。

第58図には、C群、D群と未分類試料のK—Ca分布図を示す。C群、D群はそれぞれまとめて分布しており、かつ、A群領域にもB群領域からもずれて分布しており、A群、B群、C群、D群の胎土はそれぞれ、別物であることを明示している。未分類の4点の試料もどの領域にも分布しない。第59図には、Rb—Sr分布図を示してあるが、この分布図でも、C群、D群の胎土はA群とも、B群とも異なる胎土であることを明示している。

この結果、K、Ca、Rb、Srの4因子を使ったクラスター分析により、A、B、C、D群の4群に分類したことの妥当性が分布図上で明確に確かめられた訳である。

さらに、この分類が確かであれば、Fe因子、Na因子でも、A、B、C、Dの4群を形成するはずである。そこで、第62図にはFe因子を比較してある。A、B、C、D群にはそれぞれ、よくまとまっていることがわかる。未分類試料のうち、No.30のみが大きくずれて分布しており、異質の胎土であることを示している。A、B群の土師器皿にはFe量が少なく、C、D群の土師器皿にはFe量が多いことを示している。第63図には、Na因子を比較してある。Na因子でも、4群はそれぞれよくまとまっているが、いずれも、Na量は比較的少ない。とりわけ、A群の土師器皿にNa量が少ないことがわかる。

以上の結果、牛ノ松遺跡から出土した土師器皿の胎土は少なくとも、A、B、C、Dの4種類あることが明らかになった。つまり、別々の4箇所で作られた皿が牛ノ松遺跡へ供給されていたことになる。この分類結果は第1表の最右欄にまとめられている。このうち、多数派のB群はRb—Sr分布図での分析位置からみて、地元、愛知県産の土師器皿とみられる。同様に、A群も地元産の可能

性をもつ。これに対して、C群、D群はともにK、Rb量が少なく、逆に、Fe量が多いという特徴は愛知県内の土器の化学特性ではない。外部地域からの搬入品である可能性をもつ。

第60図には麻生田大橋遺跡出土土師器皿のRb—Sr分布図を示す。よくまとめて分布していることがわかる。さらに、第4表をみても、K、Ca、Fe、Na因子でも類似しており、同じ胎土の土師器皿と考えられる。K、Ca因子を比較すると、牛ノ松遺跡のB群よりもむしろ、A群の胎土に類似していることがわかる。

第61図には八面山北部遺跡出土土師器皿のRb—Sr分布図を示す。No.78, 79, 82, 83の4点は少しずれるが、他の6点はまとめて分布しており、同質の胎土とみられる。この胎土は牛ノ松遺跡のA群よりもむしろ、B群の胎土に近い。

このように、麻生田大橋遺跡の土師器皿胎土も、八面山北部遺跡の土師器皿の胎土とともに、牛ノ松遺跡の土師器皿の胎土とは異なることがわかった。このように、遺跡によって土師器の胎土が異なるということは、これらの土師器皿は生産センターでまとめて製作されたものではなく、各遺跡ごとに別々に作られていた可能性があることを示唆している。もし、そうだとすれば、同じ胎土をもつ土師器を検出することによって遺跡間交渉を探ることができるが、今回分析対象となった牛ノ松遺跡、麻生田大橋遺跡、八面山北部遺跡間には土師器皿による交渉は認められなかったことになる。

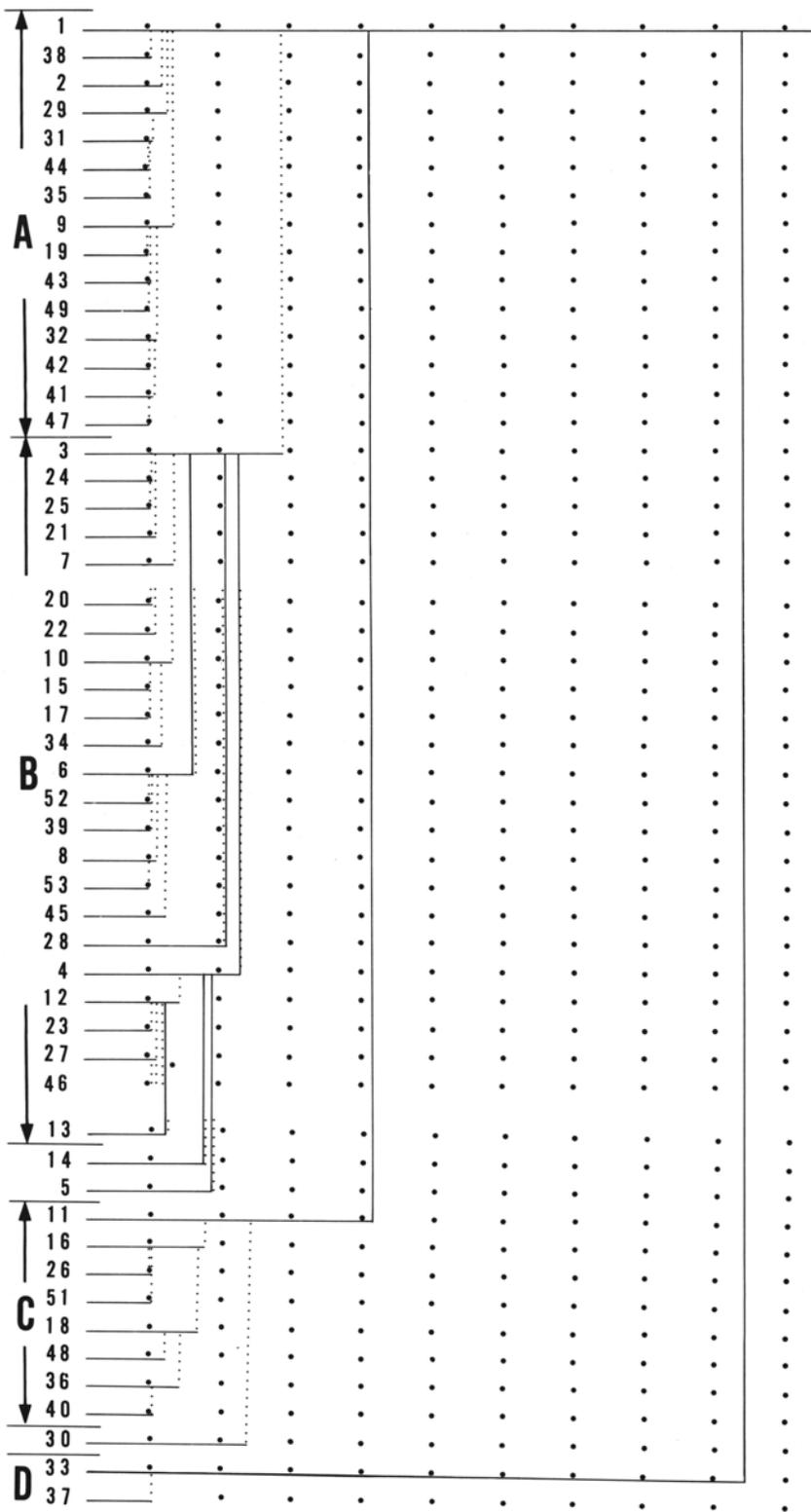
土師器の胎土研究は須恵器に比べてはるかに遅れている。今後とも、分析データをこつこつと集積していく以外に研究を進展させる方法はない。

牛ノ松遺跡

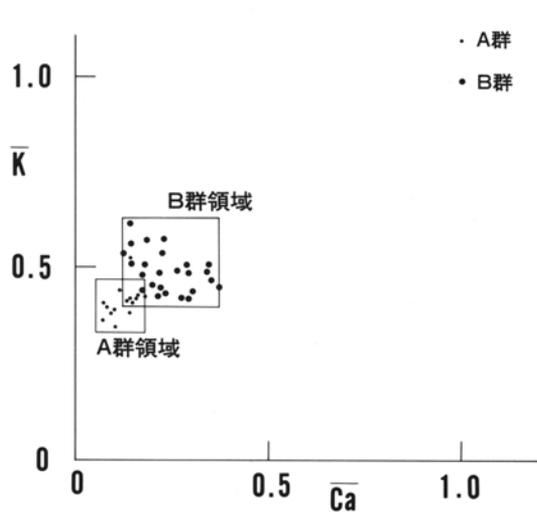
遺物番号	試料番号	遺跡名	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	タイプ
520	T-1	牛ノ松遺跡	0.434	0.158	2.37	0.469	0.222	0.035	A
522	T-2	"	0.533	0.138	2.15	0.464	0.232	0.146	A
548	T-3	"	0.448	0.374	1.92	0.462	0.45	0.115	A
542	T-4	"	0.488	0.207	2.12	0.622	0.466	0.244	Ba
538	T-5	"	0.55	0.053	1.5	0.531	0.237	0.038	Ba
523	T-6	"	0.428	0.21	2.29	0.462	0.312	0.064	Ba
565	T-7	"	0.492	0.285	2.42	0.503	0.411	0.109	A
529	T-8	"	0.449	0.188	2.24	0.509	0.344	0.055	A
560	T-9	"	0.386	0.103	1.29	0.407	0.184	0.033	A
528	T-10	"	0.424	0.276	1.07	0.423	0.432	0.131	A
544	T-11	"	0.323	0.256	3.62	0.343	0.269	0.056	Ba
553	T-12	"	0.565	0.14	2.41	0.549	0.383	0.097	A
555	T-13	"	0.623	0.14	1.94	0.59	0.434	0.105	A
531	T-14	"	0.677	0.121	2.11	0.705	0.313	0.15	A
557	T-15	"	0.417	0.294	1.04	0.43	0.434	0.124	A
545	T-16	"	0.339	0.431	3.19	0.334	0.357	0.087	Bb
552	T-17	"	0.428	0.296	1.02	0.43	0.449	0.138	A
536	T-18	"	0.342	0.4	4.47	0.315	0.223	0.061	Ba
524	T-19	"	0.378	0.093	2.33	0.414	0.166	0.026	A
518	T-20	"	0.5	0.286	2.57	0.527	0.444	0.126	A
532	T-21	"	0.512	0.344	2.11	0.48	0.521	0.155	A
566	T-22	"	0.492	0.255	2.3	0.512	0.365	0.136	A
558	T-23	"	0.573	0.175	1.92	0.581	0.378	0.117	A
567	T-24	"	0.468	0.354	1.87	0.45	0.486	0.149	A
525	T-25	"	0.486	0.342	2.32	0.468	0.472	0.144	A
563	T-26	"	0.335	0.442	4.03	0.321	0.345	0.089	B
530	T-27	"	0.561	0.092	1.96	0.581	0.361	0.112	A
533	T-28	"	0.543	0.219	1.73	0.526	0.587	0.137	A
519	T-29	"	0.422	0.151	0.708	0.361	0.306	0.083	A
564	T-30	"	0.252	0.207	5.2	0.152	0.227	0.035	Ba
550	T-31	"	0.379	0.136	1.91	0.401	0.266	0.05	A
521	T-32	"	0.346	0.1	2.34	0.366	0.151	0.034	A
535	T-33	"	0.318	0.779	3.11	0.262	0.49	0.146	Ba
526	T-34	"	0.428	0.217	1.12	0.392	0.382	0.103	A
527	T-35	"	0.426	0.182	2.43	0.402	0.271	0.064	A
540	T-36	"	0.253	0.368	3.79	0.188	0.284	0.068	Ba
537	T-37	"	0.309	0.75	3.09	0.24	0.466	0.147	Ba
511	T-38	"	0.436	0.11	2.16	0.444	0.196	0.035	A
546	T-39	"	0.433	0.168	2.57	0.447	0.333	0.123	A
539	T-40	"	0.239	0.324	3.78	0.193	0.272	0.056	B
549	T-41	"	0.408	0.067	1.63	0.345	0.167	0.033	A
556	T-42	"	0.372	0.074	1.03	0.372	0.171	0.034	A
561	T-43	"	0.415	0.13	1.78	0.403	0.167	0.021	A
547	T-44	"	0.405	0.152	2.09	0.414	0.252	0.045	A
559	T-45	"	0.508	0.175	1.34	0.461	0.406	0.101	A
541	T-46	"	0.542	0.124	0.969	0.629	0.39	0.183	B
562	T-47	"	0.402	0.079	0.827	0.338	0.186	0.061	A
543	T-48	"	0.295	0.432	4.6	0.222	0.238	0.057	Ba
554	T-49	"	0.417	0.141	1.76	0.419	0.173	0.026	A
568	T-50	"	0.519	0.139	1.98	0.584	0.319	0.062	A
569	T-51	"	0.325	0.444	3.81	0.327	0.386	0.081	Ba
570	T-52	"	0.432	0.22	1.38	0.479	0.338	0.088	A
571	T-53	"	0.477	0.17	2.3	0.542	0.346	0.091	A
534	T-54	"	0.575	0.223	2.21	0.608	0.367	0.104	A
572	T-55	麻生田大橋遺跡	0.38	0.176	2.23	0.517	0.282	0.085	Ba
573	T-56	"	0.384	0.213	2.35	0.426	0.273	0.077	Ba
574	T-57	"	0.374	0.209	2.22	0.437	0.317	0.103	Ba
575	T-58	"	0.399	0.223	2.34	0.426	0.286	0.074	Ba
576	T-59	"	0.382	0.192	2.31	0.43	0.267	0.065	Ba
577	T-60	"	0.38	0.185	2.29	0.397	0.257	0.063	Ba
578	T-61	"	0.381	0.197	2.23	0.446	0.253	0.069	Ba
579	T-62	"	0.377	0.177	2.3	0.493	0.239	0.071	Ba
580	T-63	"	0.391	0.216	2.4	0.466	0.276	0.8	Ba
581	T-64	"	0.383	0.166	2.22	0.594	0.279	0.067	Ba
582	T-65	"	0.359	0.19	2.19	0.511	0.269	0.066	Ba
583	T-66	"	0.377	0.177	2.28	0.48	0.248	0.072	Ba
584	T-67	"	0.353	0.164	2.12	0.467	0.24	0.062	Ba
585	T-68	"	0.386	0.2	2.45	0.483	0.27	0.077	Ba
586	T-69	"	0.378	0.188	2.4	0.487	0.251	0.106	Ba
587	T-70	"	0.393	0.197	2.41	0.519	0.279	0.076	Ba
588	T-71	"	0.352	0.167	2.13	0.477	0.259	0.063	Ba
589	T-72	"	0.366	0.264	2.22	0.452	0.372	0.111	Ba
590	T-73	"	0.366	0.186	2.24	0.449	0.248	0.065	Ba
591	T-74	"	0.376	0.179	2.28	0.486	0.256	0.075	Ba
592	T-75	八面山北部遺跡	0.581	0.192	2.49	0.63	0.378	0.119	A
593	T-76	"	0.574	0.188	2.6	0.695	0.37	0.127	A
594	T-77	"	0.603	0.208	2.76	0.678	0.382	0.127	A
595	T-78	"	0.474	0.538	2.18	0.719	0.275	0.291	A
596	T-79	"	0.503	0.545	2.24	0.75	0.732	0.287	A
597	T-80	"	0.579	0.18	2.62	0.689	0.368	0.13	A
598	T-81	"	0.571	0.186	2.64	0.676	0.372	0.126	A
599	T-82	"	0.486	0.455	2.11	0.595	0.635	0.255	A
600	T-83	"	0.514	0.481	2.3	0.694	0.652	0.282	A
	T-84	"	0.533	0.299	2.45	0.652	0.476	0.176	A

第4表 分析データ一覧表

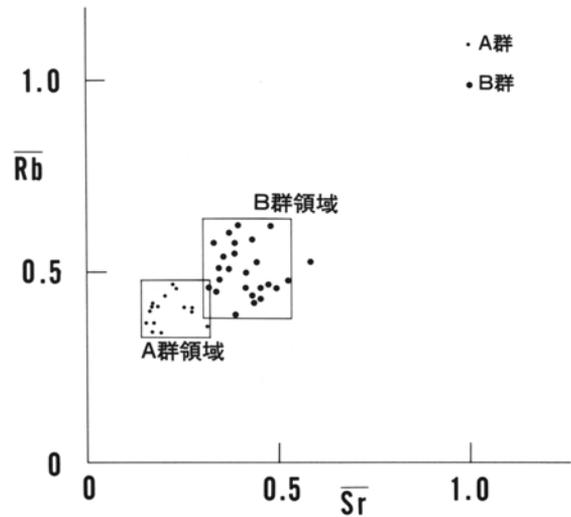
1メモリ = .05



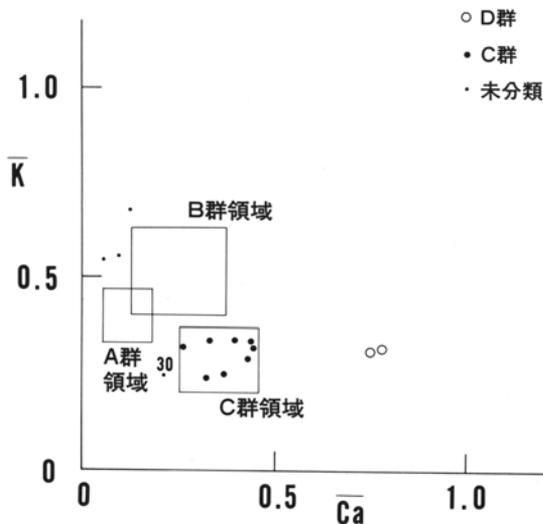
第55図 牛ノ松遺跡出土土師器皿のクラスター分析
(K, Ca, Rb, Sr因子使用)



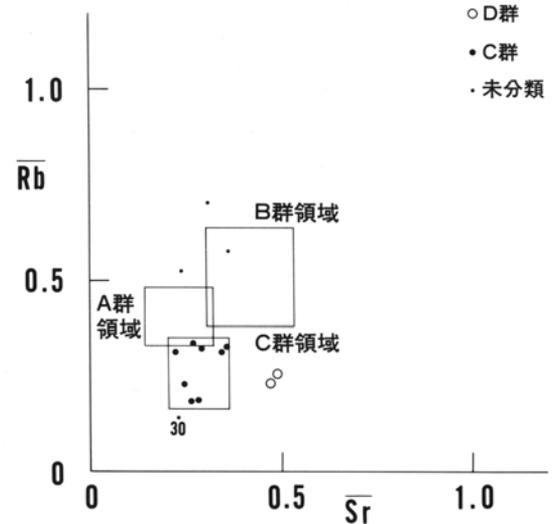
第56図 牛ノ松遺跡出土土師器皿A・B群のK-Ca分布図



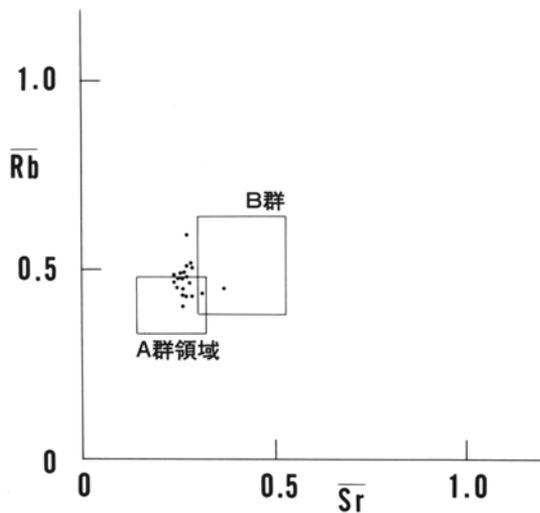
第57図 牛ノ松遺跡出土土師器皿A・B群のRb-Sr分布図



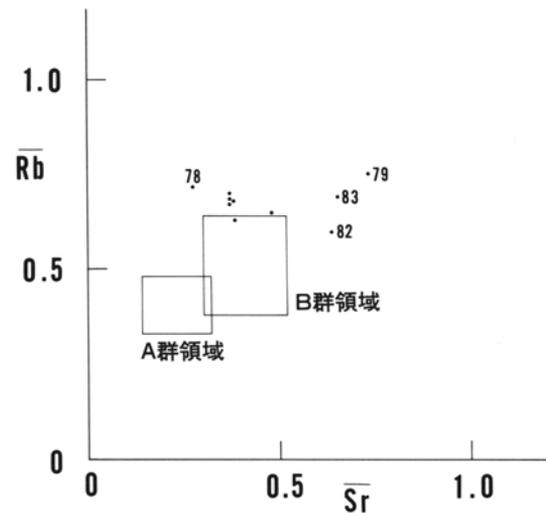
第58図 牛ノ松遺跡出土土師器皿C・D群のK-Ca分布図



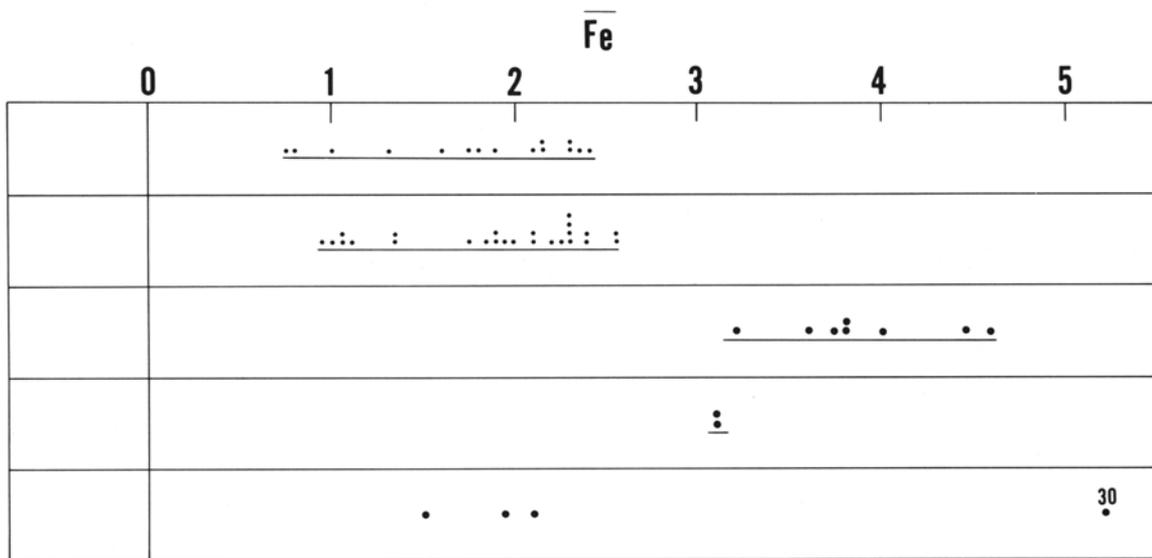
第59図 牛ノ松遺跡出土土師器皿C・D群のRb-Sr分布図



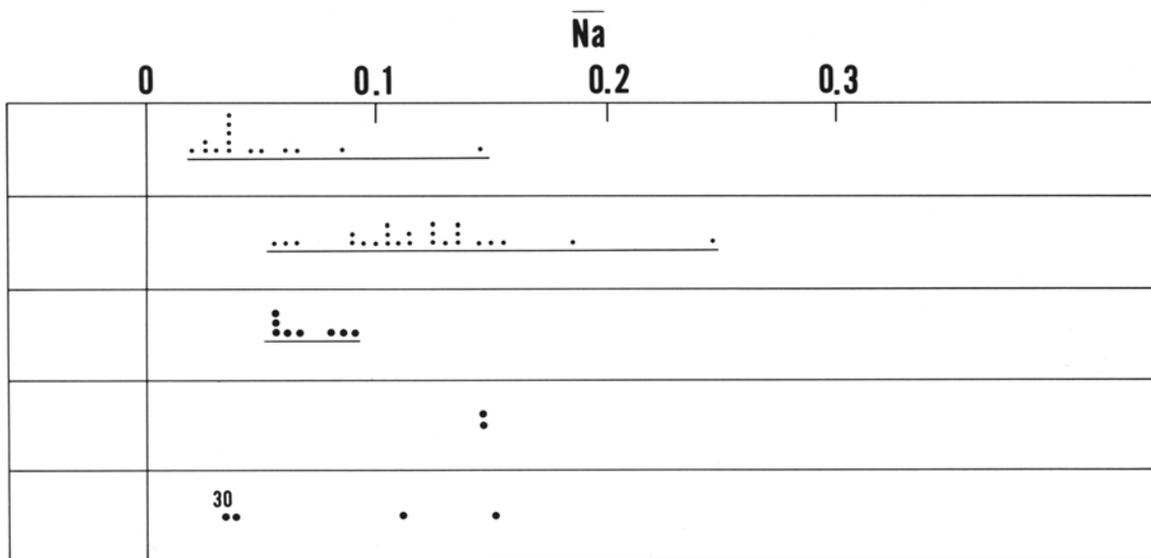
第60図 麻生田大橋遺跡出土土師器皿のRb-Sr分布図



第61図 八面山北部遺跡出土土師器皿のRb-Sr分布図



第62図 牛ノ松遺跡出土土師器皿のFe因子の比較



第63図 牛ノ松遺跡出土土師器皿のNa因子の比較

3. 牛ノ松遺跡出土の土師器皿について

今回分析を実施した試料は3遺跡84点を数える。牛ノ松遺跡出土の資料を中心とし、その比較検討の試料として、牛ノ松遺跡と同じ西三河地域に立地する西尾市八ツ面山北部遺跡、豊川市に位置する麻生田大橋遺跡から出土した土師器皿（前者9点、後者20点）を加えた。いずれの遺跡も13世紀から14世紀に比定されるものであり、ほぼ牛ノ松遺跡が成立していた時期と一致するものである。

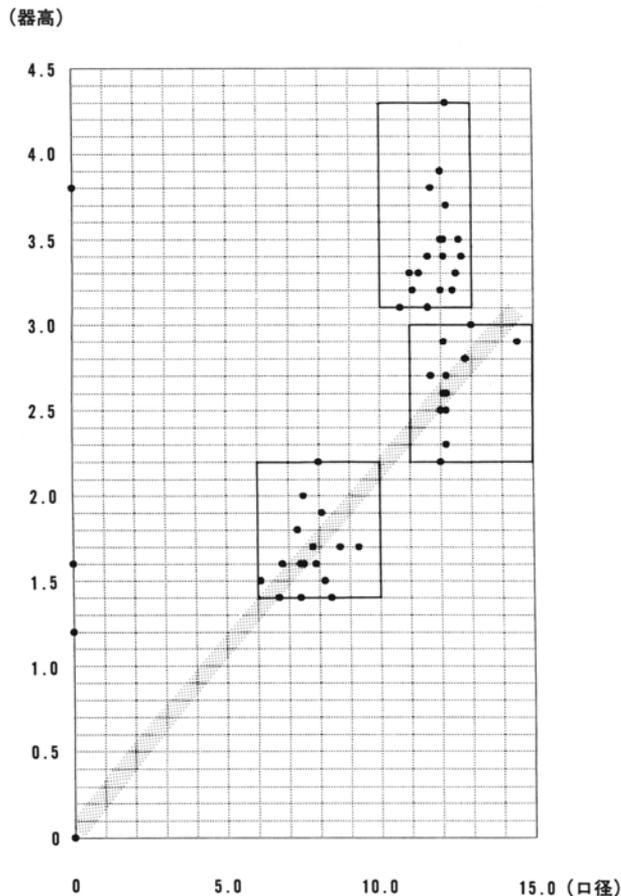
以下、牛ノ松遺跡出土の土師器皿の分類と蛍光X線分析結果との比較を簡単に述べておく。

(1) 牛ノ松遺跡出土土師器皿の分類について

今回分析を実施した土師器皿は54点である。これらの遺物を次のような観点から3類に大別した。

まず第一は口径・器高を基本とした分析試料54点の分布による分類を試みた。その結果を示したものが第63図である。この分布から大きく2つのまとまりを読み取ることができる。明確に一群をなすと思われるものは、口径10.0cm以下、器高2.3cm以下の土師器皿である。この一群はいわゆる小皿に属するものであり、口径10.0cmを超えるものとは区別して考えることが可能であると思われる。従ってこの一群をI類とした。これに対し、口径10.0cmを超える土師器皿はその分布が縦に長く広がっている。口径はいずれも11.0から13.0cmに集中しているが、器高は2.3から4.3cmまでと幅広い分布を示している。この点からこの一群はさらに細分が可能であると思われ、次の方法を用いる事とした。

上記の口径10.0cmを超える土師器皿を区分する方法として、径高指数を利用した。それを基に表示したものが第5表である。まずこの中で先に区分することができたI類の範囲を示したものがI



第64図 牛ノ松遺跡出土土師器皿径高指数

である。これをみてみると、その分布範囲は径高指数で0.183から0.247までに集中していることが読み取れる。これに対し、ほぼ同じ範囲に集中していると考えられるものは、第5表のIIに示した口径10.0cm以上、器高2.4～3.0cm以下の一群である。この範囲に分布する土師器皿は先にI類とした小皿群の大型タイプに相当すると思われる。すなわち、この2種類の土師器皿は大・小のセット関係にあると思われる。従ってこの一群もI類として考えることができる。

それに対し、第5表のIIIに示した径高指数が0.

25を超える一群がある。これは先にⅠ類としたタイプの土師器皿とは明らかに分布を異にしており、Ⅱ類として考えることが可能であると思われる。

以上、口径・器高の分布と径高指数をもとにして2類に大別したが、これに加えてその製作技法から更にそれぞれを2分した。第5表に記載してある項目のうち「タイプ」がそれにあたり、Aとしたものはロクロ成形によるものであり、Bとしたものは非ロクロ成形によるものである。この結果分類した土師器皿を示したものが第64図である。

Ⅰ－1類：径高指数が0.25以下でロクロ成形によるもの。この中には大・小の2種類が存在する。

Ⅰ－2類：径高指数が0.25以下で非ロクロ成形によるもの。この中には大・小の2種類が存在する。

Ⅱ－1類：径高指数が0.25以上でロクロ成形によるもの。

Ⅱ－2類：径高指数が0.25以上で非ロクロ成形によるもの。

Ⅲ類：その他欠損により径高指数が判明しない一群。(これらは本来的にはいづかに分類可能な一群である。)

上記の分類によれば、例えばⅠ－1類に分類した大・小の土師器皿はさらに細分しようと思われが、大・小のセット関係である可能性が高いこと、細分化により煩雑さを増すことが考えられることから、あえて細分せずに同一の分類に留めた。

(2) 分析結果との比較

以上の土師器皿の分類と、蛍光X線の分析の結果を比較してみる。蛍光X線分析結果は、愛知県内産のもの(分析：B群)、愛知県内産の可能性が高いもの(分析：A群)、愛知県外産であると考えられるもの(分析：C・D群)に分類されている。これを先に示した土師器皿の分類に当てはめてみ

ると、非ロクロ成形の土師器皿のうち、Ⅰ－2類とした(542)を除いては、いずれも愛知県産外であるとされた。これに対し、Ⅰ－1類、Ⅱ－1類としたロクロ成形の土師器皿は、すべて愛知県産またはその可能性が高いと指摘されている。また、その他としたⅢ類の土師器皿もロクロ成形のものは愛知県産、非ロクロ成形のものは愛知県外産の可能性が高いと分析された。

この結果をどのように考えるのであろうか。土師器皿の分類は、分析結果とは全く別に行っており、1点を除いてロクロ成形の土師器皿は県内産、非ロクロ成形の土師器皿は県外産とされた。従って牛ノ松遺跡の土師器皿を分類するにあたっては、製作技法が有効な手段であることが考えられる。またこの分析結果は、当時の西三河地域で主流を占めていた土師器皿がロクロ成形であることを考えれば、妥当な分析結果であるとする事ができる。比較試料とした八ツ面山北部遺跡出土の土師器皿はいずれもロクロ成形によるものであり、牛ノ松遺跡同様分析結果はすべて県内産とされている。反面、麻生田遺跡出土の土師器皿は非ロクロ成形であるが、これは県内産の可能性が高いとされた。一見牛ノ松遺跡の土師器皿とは異なる様相であるように思えるが、当時の東三河地域の中心的土師器皿が非ロクロ成形であることを考えれば、妥当な分析結果であるとする事ができる。

この事から導き出されることは、西・東三河共に主流となる成形技法による土師器皿はいずれも県内産であり、遺跡周辺地域で生産されたものを搬入していたと考える事ができる。しかし、近隣に位置している牛ノ松遺跡と八ツ面遺跡で出土する土師器皿は、胎土に関しては異なるものであることも指摘されており、土師器皿の流通範囲に関してはやはり狭小であることを裏付けている。

最後に問題となるのは、牛ノ松遺跡で出土した非ロクロ成形の土師器皿がどこで製作されたか

牛ノ松遺跡

I. 口径10cm以下、器高2.3cm以下

番号	遺跡名	タイプ	色調	径高指数
565	牛ノ松	A	赤	0
566	牛ノ松	A	黒	0
567	牛ノ松	A	赤	0
568	牛ノ松	A	茶	0
524	牛ノ松	A	赤	0.183
525	牛ノ松	A	赤	0.183
526	牛ノ松	A	赤	0.189
571	牛ノ松	A	茶	0.200
527	牛ノ松	A	赤	0.203
528	牛ノ松	A	黄	0.213
518	牛ノ松	A	赤	0.215
529	牛ノ松	A	赤	0.216
530	牛ノ松	A	茶	0.218
519	牛ノ松	A	白	0.221
520	牛ノ松	A	赤	0.231
521	牛ノ松	A	赤	0.231
531	牛ノ松	A	茶	0.235
532	牛ノ松	A	赤	0.235
522	牛ノ松	A	茶	0.240
533	牛ノ松	A	黄	0.247
546	牛ノ松	A	赤	0.258
547	牛ノ松	A	茶	0.264
548	牛ノ松	A	黄	0.267
549	牛ノ松	A	白	0.267
534	牛ノ松	A	赤	0.267
550	牛ノ松	A	赤	0.268
551	牛ノ松	A	茶	0.278
552	牛ノ松	A	黄	0.278
553	牛ノ松	A	黄	0.281
570	牛ノ松	A	黄	0.288
554	牛ノ松	A	赤	0.289
555	牛ノ松	A	黄	0.292
556	牛ノ松	A	茶	0.292
557	牛ノ松	A	黄	0.293
558	牛ノ松	A	黄	0.300
559	牛ノ松	A	黄	0.303
560	牛ノ松	A	赤	0.325
561	牛ノ松	A	黄	0.325
562	牛ノ松	A	黄	0.352
541	牛ノ松	B	茶	0.167
523	牛ノ松	Ba	赤	0.183
535	牛ノ松	Ba	黄	0.189
542	牛ノ松	Ba	茶	0.195
536	牛ノ松	Ba	黄	0.202
537	牛ノ松	Ba	黄	0.205
543	牛ノ松	Ba	赤	0.209
538	牛ノ松	Ba	黄	0.213
539	牛ノ松	B	茶	0.219
540	牛ノ松	Ba	赤	0.231
544	牛ノ松	Ba	茶	0.246
545	牛ノ松	Bb	茶	0.275
569	牛ノ松	Ba	茶	0.290
563	牛ノ松	B	茶	0.292
564	牛ノ松	Ba	赤	0.292

II. 口径10cm以上、器高2.3~3.0cm

番号	遺跡名	タイプ	色調	径高指数
565	牛ノ松	A	赤	0
566	牛ノ松	A	黒	0
567	牛ノ松	A	赤	0
568	牛ノ松	A	茶	0
524	牛ノ松	A	赤	0.183
525	牛ノ松	A	赤	0.183
526	牛ノ松	A	赤	0.189
571	牛ノ松	A	茶	0.200
527	牛ノ松	A	赤	0.203
528	牛ノ松	A	黄	0.213
518	牛ノ松	A	赤	0.215
529	牛ノ松	A	赤	0.216
530	牛ノ松	A	茶	0.218
519	牛ノ松	A	白	0.221
520	牛ノ松	A	赤	0.231
521	牛ノ松	A	赤	0.231
531	牛ノ松	A	茶	0.235
532	牛ノ松	A	赤	0.235
522	牛ノ松	A	茶	0.240
533	牛ノ松	A	黄	0.247
546	牛ノ松	A	赤	0.258
547	牛ノ松	A	茶	0.264
548	牛ノ松	A	黄	0.267
549	牛ノ松	A	白	0.267
534	牛ノ松	A	赤	0.267
550	牛ノ松	A	赤	0.268
551	牛ノ松	A	茶	0.278
552	牛ノ松	A	黄	0.278
553	牛ノ松	A	黄	0.281
570	牛ノ松	A	黄	0.288
554	牛ノ松	A	赤	0.289
555	牛ノ松	A	黄	0.292
556	牛ノ松	A	茶	0.292
557	牛ノ松	A	黄	0.293
558	牛ノ松	A	黄	0.300
559	牛ノ松	A	黄	0.303
560	牛ノ松	A	赤	0.325
561	牛ノ松	A	黄	0.325
562	牛ノ松	A	黄	0.352
541	牛ノ松	B	茶	0.167
523	牛ノ松	Ba	赤	0.183
535	牛ノ松	Ba	黄	0.189
542	牛ノ松	Ba	茶	0.195
536	牛ノ松	Ba	黄	0.202
537	牛ノ松	Ba	黄	0.205
543	牛ノ松	Ba	赤	0.209
538	牛ノ松	Ba	黄	0.213
539	牛ノ松	B	茶	0.219
540	牛ノ松	Ba	赤	0.231
544	牛ノ松	Ba	茶	0.246
545	牛ノ松	Bb	茶	0.275
569	牛ノ松	Ba	茶	0.290
563	牛ノ松	B	茶	0.292
564	牛ノ松	Ba	赤	0.292

III. 口径10cm以上、器高3.1cm以上

番号	遺跡名	タイプ	色調	径高指数
565	牛ノ松	A	赤	0
566	牛ノ松	A	黒	0
567	牛ノ松	A	赤	0
568	牛ノ松	A	茶	0
524	牛ノ松	A	赤	0.183
525	牛ノ松	A	赤	0.183
526	牛ノ松	A	赤	0.189
571	牛ノ松	A	茶	0.200
527	牛ノ松	A	赤	0.203
528	牛ノ松	A	黄	0.213
518	牛ノ松	A	赤	0.215
529	牛ノ松	A	赤	0.216
530	牛ノ松	A	茶	0.218
519	牛ノ松	A	白	0.221
520	牛ノ松	A	赤	0.231
521	牛ノ松	A	赤	0.231
531	牛ノ松	A	茶	0.235
532	牛ノ松	A	赤	0.235
522	牛ノ松	A	茶	0.240
533	牛ノ松	A	黄	0.247
546	牛ノ松	A	赤	0.258
547	牛ノ松	A	茶	0.264
548	牛ノ松	A	黄	0.267
549	牛ノ松	A	白	0.267
534	牛ノ松	A	赤	0.267
550	牛ノ松	A	赤	0.268
551	牛ノ松	A	茶	0.278
552	牛ノ松	A	黄	0.278
553	牛ノ松	A	黄	0.281
570	牛ノ松	A	黄	0.288
554	牛ノ松	A	赤	0.289
555	牛ノ松	A	黄	0.292
556	牛ノ松	A	茶	0.292
557	牛ノ松	A	黄	0.293
558	牛ノ松	A	黄	0.300
559	牛ノ松	A	黄	0.303
560	牛ノ松	A	赤	0.325
561	牛ノ松	A	黄	0.325
562	牛ノ松	A	黄	0.352
541	牛ノ松	B	茶	0.167
523	牛ノ松	Ba	赤	0.183
535	牛ノ松	Ba	黄	0.189
542	牛ノ松	Ba	茶	0.195
536	牛ノ松	Ba	黄	0.202
537	牛ノ松	Ba	黄	0.205
543	牛ノ松	Ba	赤	0.209
538	牛ノ松	Ba	黄	0.213
539	牛ノ松	B	茶	0.219
540	牛ノ松	Ba	赤	0.231
544	牛ノ松	Ba	茶	0.246
545	牛ノ松	Bb	茶	0.275
569	牛ノ松	Ba	茶	0.290
563	牛ノ松	B	茶	0.292
564	牛ノ松	Ba	赤	0.292

第5表 分析試料一覧表 1

ある。分析ではそれについて明示されていない。従来土師器の分析は重鉍物分析が中心であり、それによる資料の蓄積は、当センターにおいても多くの実績が残されている。しかし、蛍光X線による分析例はなく、比較検討する材料も与えられていない。その様な状況において類推する事は困難である。今後資料の増加を待って、牛ノ松遺跡の非クロロ成形の土師器皿がいずれかの地域から搬入していたかを検討する必要が課題として残されている。

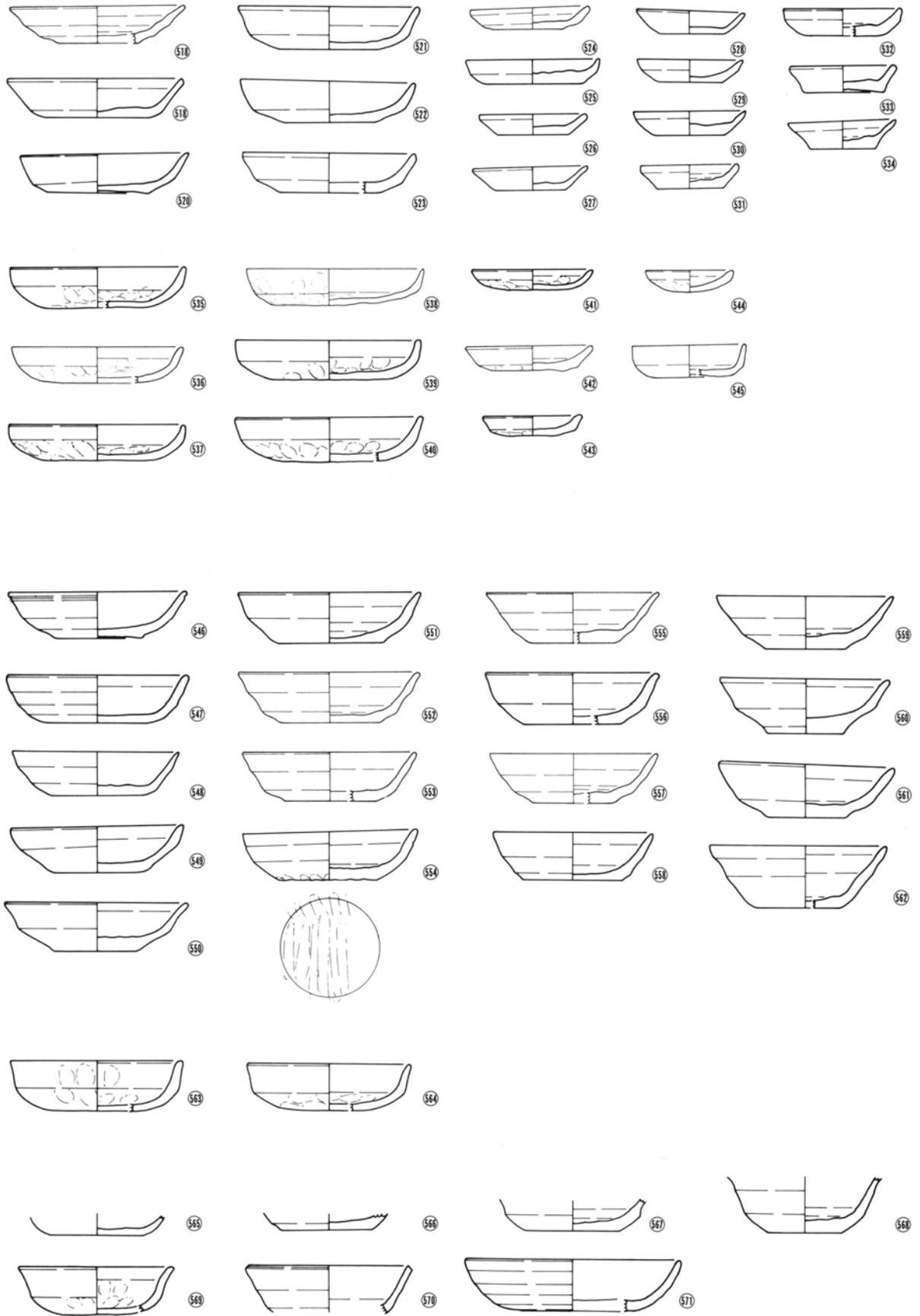
参考文献

(財) 愛知県埋蔵文化財センター1991『麻生田大橋遺跡』
 西尾市教育委員会1992『八ッ面山北部遺跡II』
 考古学フォーラム1993『愛知県内出土の中世土師器皿資料集』
 川井啓介1993『三河地域出土の土師器皿について』
 (財) 愛知県埋蔵文化財センター

番号	遺跡名	タイプ	色調	径高指数
579	麻生田	Ba	黄	0
589	麻生田	Ba	黄	0.162
588	麻生田	Ba	黄	0.167
591	麻生田	Ba	黄	0.171
590	麻生田	Ba	黄	0.177
541	麻生田	Ba	黄	0.182
582	麻生田	Ba	黄	0.200
583	麻生田	Ba	黄	0.200
584	麻生田	Ba	黄	0.203
585	麻生田	Ba	黄	0.215
587	麻生田	Ba	黄	0.224
580	麻生田	Ba	黄	0.246
581	麻生田	Ba	黄	0.250
584	麻生田	Ba	黄	0.261
576	麻生田	Ba	黄	0.263
578	麻生田	Ba	黄	0.263
575	麻生田	Ba	黄	0.268
573	麻生田	Ba	黄	0.273
577	麻生田	Ba	黄	0.274
572	麻生田	Ba	黄	0.280
592	八ッ面	A	赤	—
593	八ッ面	A	赤	—
594	八ッ面	A	赤	—
595	八ッ面	A	赤	—
596	八ッ面	A	赤	—
597	八ッ面	A	赤	—
598	八ッ面	A	赤	—
599	八ッ面	A	赤	—
600	八ッ面	A	赤	—

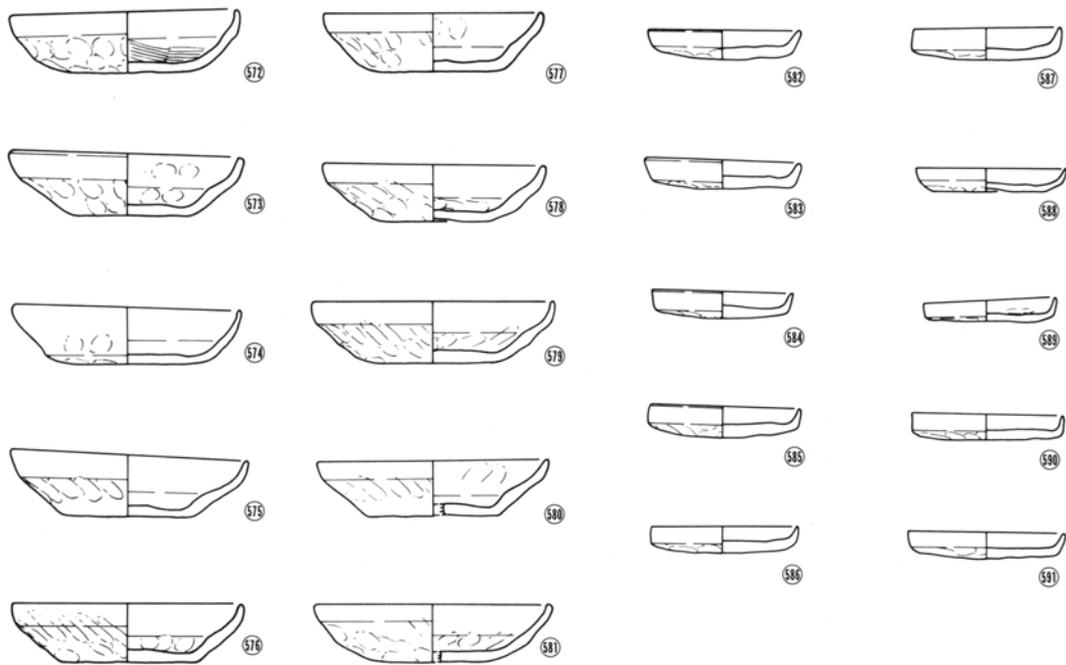
第6表 分析試料一覧表 2

牛ノ松遺跡



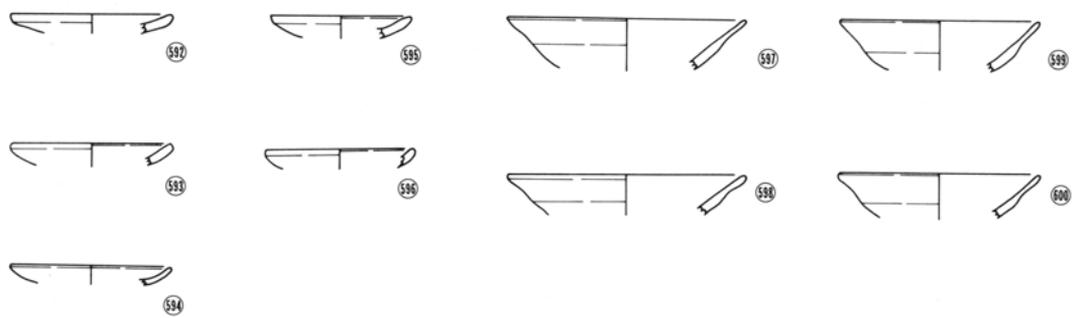
第65図 土師器皿分析試料・牛ノ松遺跡

(1/4)



第66図 土師器皿分析試料・麻生田大橋遺跡

(1/4)



第67図 土師器皿分析試料・八ツ面山北部遺跡

(1/4)

V まとめ

1. 旧石器時代～縄文時代

今回出土した石器は、II遺構でも述べたとおりある程度のまとまりをもったものである。特に石器群として扱ったもののうち1～10までの石核類は、位置的にもレベル的にも暗黄褐色砂質シルト層より出土したものと認定されるもので、同一層内の石器群としてよい一群であると考えられる。ただ集石や焼石などの遺構や、微細な剥片はわずかしか検出されなかった(土嚢袋で124袋の土を持ち帰り、最高1mm目の篩にかけた)ことにより、石器群が出土した地点が実際の生活面か石器製作場である可能性はきわめて低いということになる。また、IV章自然科学的分析の観察によっても、石器がまとまって出土した暗黄褐色砂質シルトは緩斜面堆積物であることが指摘されている。このことは、生活域が出土地点より上位の場所にあったことを示しているのだが、比較的石器がまとまっていることから、そう遠くない場所に原位置を求めることができるのではないかと考えられる。さらに、この層の上層である茶褐色砂質シルトや黄褐色砂質シルトから石鏃や磨石が出土しているが、茶褐色砂質シルト内よりアカホヤ火山灰(6300yBP)が検出されており、これらの遺物が縄文時代に属する可能性を示唆している。

次にこれらの石器群の時期について考えてみると、石器群から出土した石核や石刃については、旧石器時代末の細石器文化に属するもので、すべて西日本の影響を受けた非削片系細石刃技術もつ石核で、大きくは野岳・休場型の範疇に入るものであろう。また、包含層出土の石器をみると、16・17の石核や22～24の細石刃については上述の時期と同じであろうと思われる。

29・30の尖頭器については、特に木葉形を呈する29はしっかりと丁寧な剥離がなされているもので、その作り方からみて有舌尖頭器と同時期のものともみればそれ以前と考えたほうが自然で、細石器文化以前かまたは同時期のものになると思われる。31の縦長剥片と605の台形様石器も同じく、細石器文化期のものかそれより古いものと考えられる。

その他の石鏃・叩き石・石斧・石錘に関しては、土器が出土していないため、時期はまったく不明であるが、土器の細片を含むことや石鏃の形態、アカホヤ火山灰と同一層より出土しているものがあることからみて、縄文時代の遺物である可能性が高いと考えられる。

2. 鎌倉時代～室町時代

(1) 遺構

鎌倉～室町時代の遺構の特徴としては溝により方形に区画されるということがあげられるが、遺物や掘立柱建物の重なり具合や方向からみて、区画される以前にも遺構群があったことが想定される。第65図上に示したものがそれで、3棟の掘立柱建物と柵、土坑、墓と考えられるSK21が散在している。全体像ははっきりとはしないが、おそらく区画溝はまだ存在していなかったと思われる。またSK70が掘削されていることからみて、谷に流れる水流が少なく、谷幅が狭かったと考えられる。これらの遺構群が掘削されたのが12世紀前葉～中葉で、12世紀後葉には埋没している。

次に12世紀後葉～13世紀前葉には区画溝が地形に沿った形で谷の東西に掘削され明確な屋敷地が形成される。東側のものには谷肩に沿って溝が掘削されるが、西側にはみられない。東側の屋敷地は調査区の中だけでも、区画溝によって3から4の小区画に区切られており、溝の途切れによる出入口が2ヶ所存在する。また、東の溝は何回か掘り直されているのか、重複している。谷肩の溝から東の溝まで東西約30mを測る。

西側の屋敷地も西の溝から谷肩までは約30mで同様の大きさであるが、それより西には続かないようで、山側に小さな一区画が存在する。西側の区画溝には途切れ部があり、出入口の可能性がある。また、山側の崖裾には柵列が存在している。

さらに西側の屋敷地の40mほど西に、SD28に東と南を区画された部分があり、SB06が存在する。この区画は面積が狭いため屋敷地とは考えにくく、SD28から灰釉系陶器皿の出土する割合が他の遺構に比べて高く、完形のものも多いことから

生活域とは別の空間である可能性を考えたい。これらの区画溝は13世紀の末頃には土器廃棄が行われ、埋没していったものと考えられる。

(2) 遺物

灰釉系陶器碗では、I類とした東濃系のものはごくわずかしかはいってこない。III類としたものは東海南部の常滑（猿投）・幸田・渥美（湖西）窯のもので、その中でもIII-1類は幸田・渥美窯、III-2類は今回分類できなかったものになる。主流を占めるII類は、II-3類とした径高指数が高く側面観が二等辺三角形に近い形態を示すものが明瞭に区別され、瀬戸窯のものになると思われる。おそらくII-2類も同窯のものであろう。その他II類の多くを占めるII-1類は常滑窯のものと考えられるが、本書では胎土分析を行っておらず、確実なことは判らなかった。

宋三彩洗は、本県では稲沢市下津城の1例と清洲町朝日西遺跡の2例に続いて4例目となる。牛ノ松遺跡出土のものは他の遺跡のものに比べると小型で器壁も薄いものである。

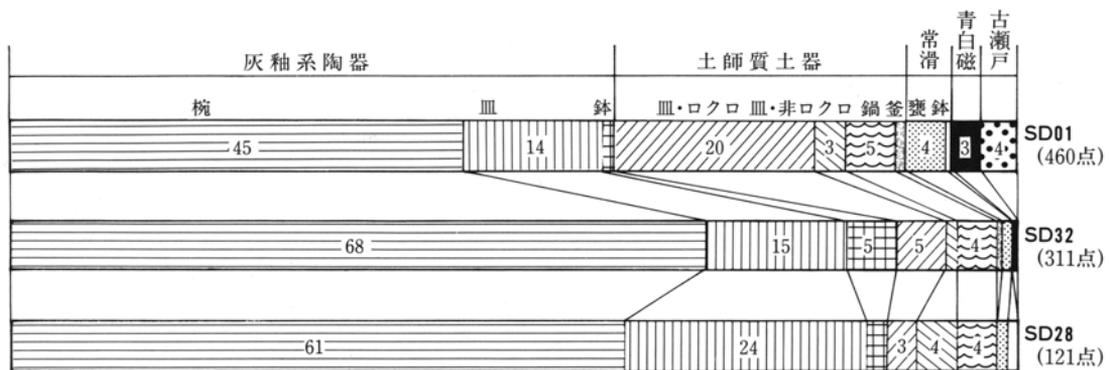
牛ノ松遺跡の中世屋敷地の性格を考える上で重要になると思われることとして、まず土師器皿の割合が多いことがあげられる。近隣にある同時期中の中世村落である西尾市室遺跡では、土師器皿の占める割合が全体の10%以下であるのに対して、牛ノ松遺跡で大量に廃棄されていたSD01では23%を数え、大きな格差があることがわかる。また非ロクロ成形の土師器皿の割合も高く、IV章-2蛍光X線分析では、ロクロ成形のものは地元で作られたもので、非ロクロ成形のものはほぼすべて他地域の胎土であることが指摘された。

牛ノ松遺跡のある須美地域は、I章-2遺跡の立地と環境でも述べられているとおり、伊勢神宮領である「蘇美御厨」が存在していたと推定されている場所であり、遺跡の成立時期と伊勢神宮に寄進され御厨として成立する時期が符合する。また上述した土師器皿の比率の高さや、その中に他地域からもたらされた非ロクロ成形のものが存在すること、本県では事例の少ない宋三彩洗が出土していることを考えてみると、牛ノ松遺跡が当地方の中でも特異な集落であることが浮かびあがってくるのである。さらに今後伊勢地域との結び付きだけではなく、その間を仲介するものとして渥美地域を問題にしていかなければならないであろう。

参考文献

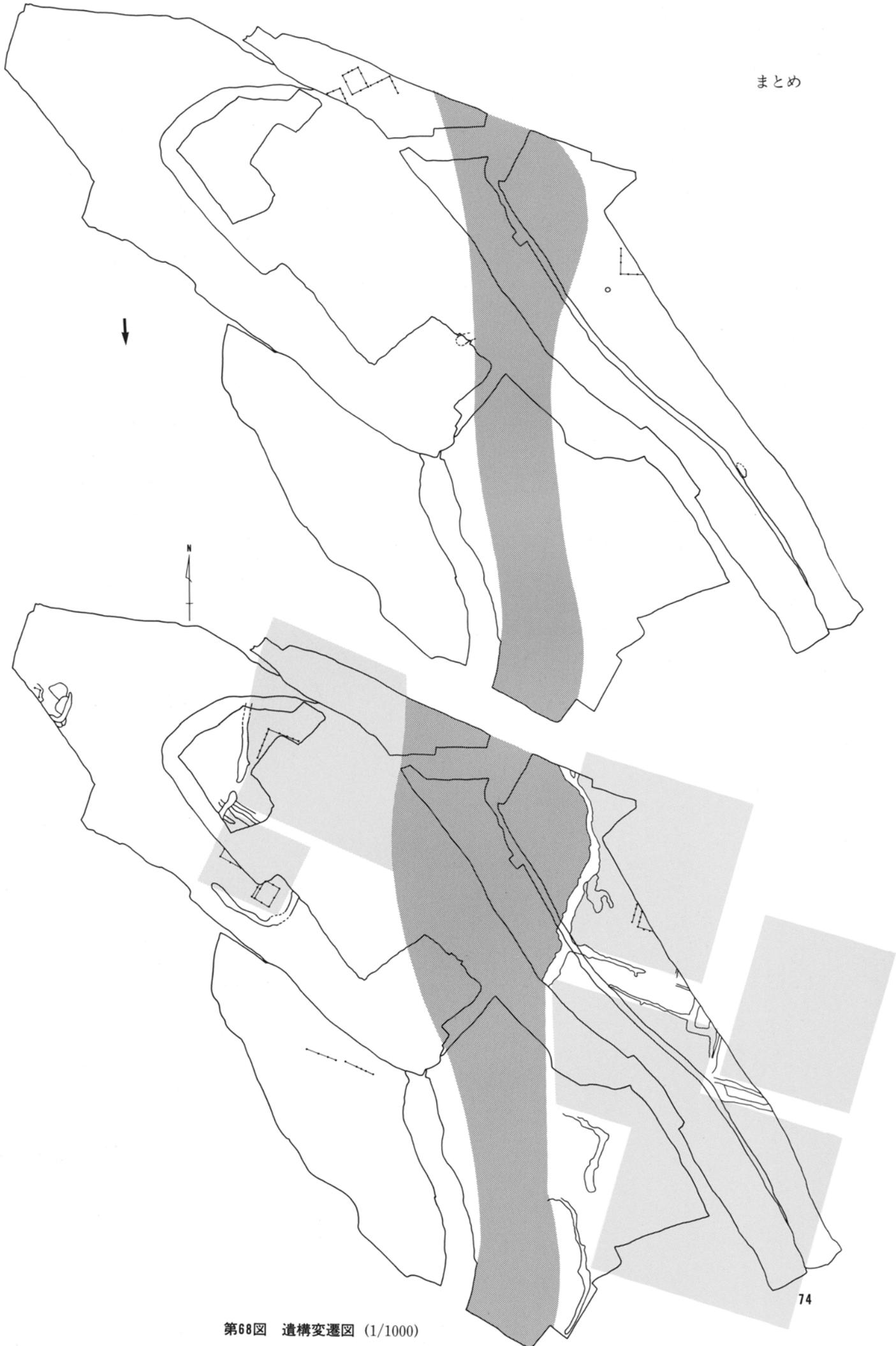
(財) 愛知県埋蔵文化財センター1994『松河戸遺跡』
 (財) 愛知県埋蔵文化財センター1994『室遺跡』
 安達厚三1983「萩平遺跡」『日本の旧石器文化第2巻』
 稲沢市教育委員会1980『下津城跡発掘調査概要報告書(Ⅰ)』

岡村道雄1990『日本旧石器時代史』
 岡本直久1993「消費地からみた山茶碗一遺構内共伴遺物による各生産地編年対比」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要第1号』
 小畑弘己1983「九州の細石刃文化」『物質文化No.41』
 川合剛・安達厚三1985「愛知の旧石器資料(4) — 宝飯郡一宮町鍮水遺跡採集の石器—」『名古屋市博物館研究紀要 第9巻』名古屋市博物館
 白石浩之1989『旧石器時代の石槍』
 新行紀一1990「三河国」『講座日本荘園史5』
 鈴木忠司1979「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』
 滝沢浩1964「本州における細石刃文化の再検討」『物質文化No.3』
 中野晴久1994「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって 資料集』
 中野晴久1983「知多古窯址群における山茶碗の研究」『常滑市民俗資料館 研究紀要Ⅰ』
 藤澤良祐1990「山茶碗と中世集落」『尾呂』瀬戸市教育委員会
 八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会1993『細石器文化研究の新たな展開』



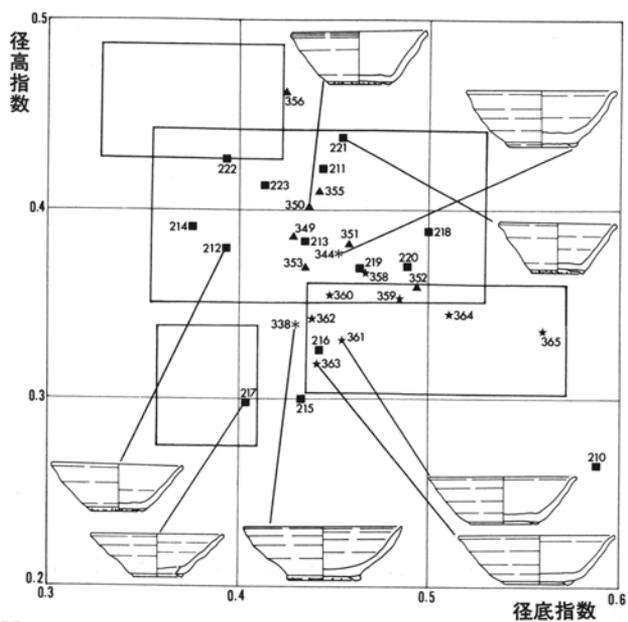
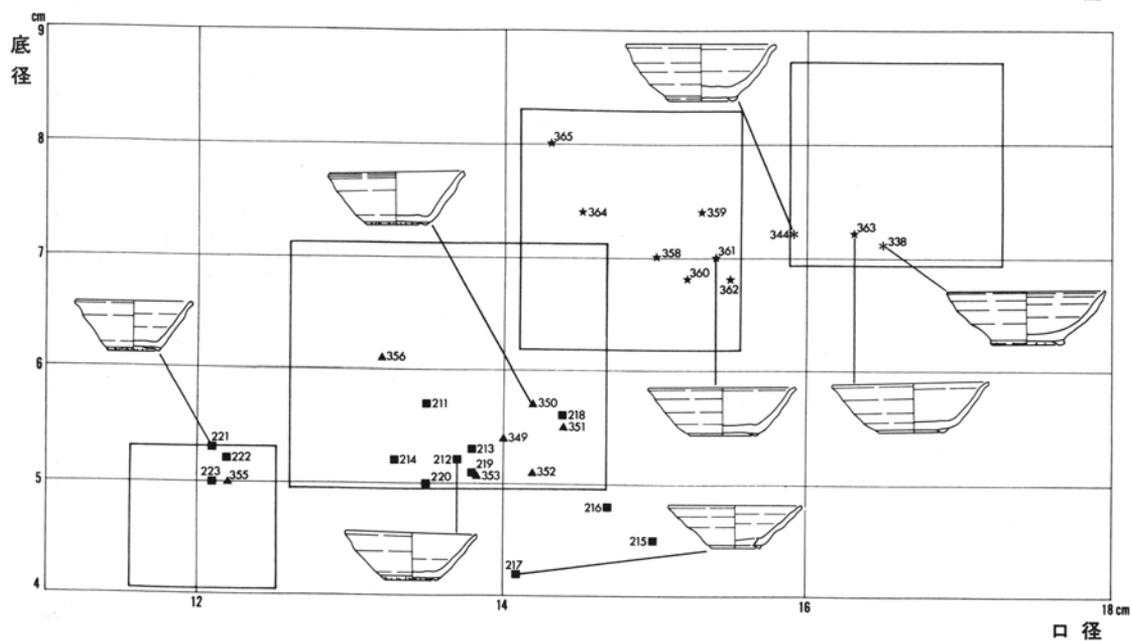
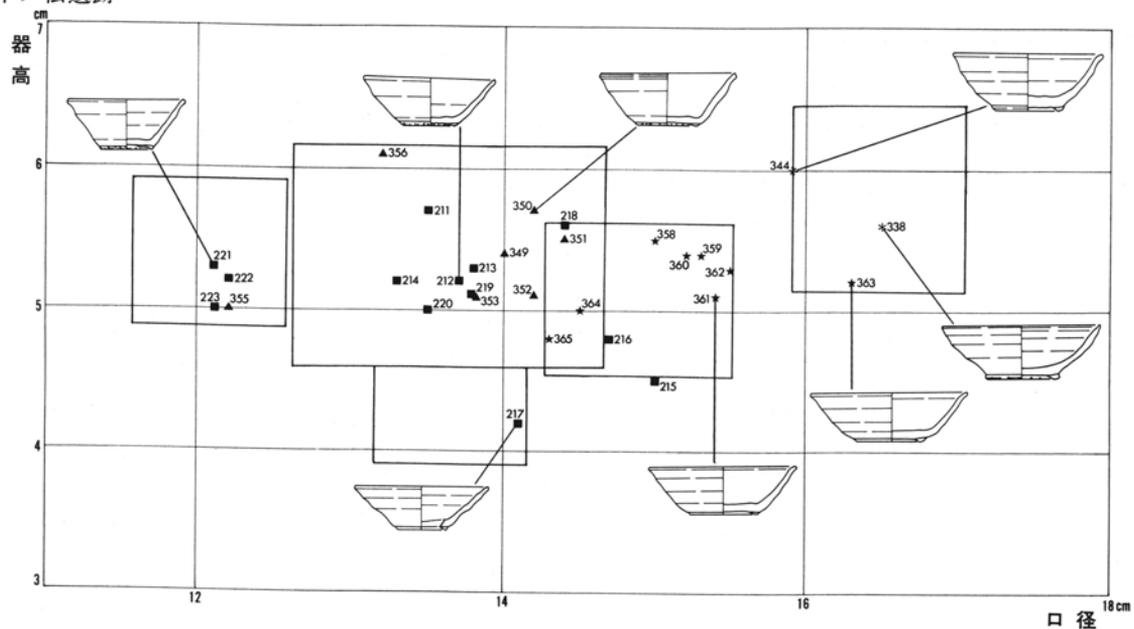
第7表 出土遺物組成

※グラフ内の数値は%
 ※カウントは青白磁を除き口縁部数で行った。
 青白磁は個体数。



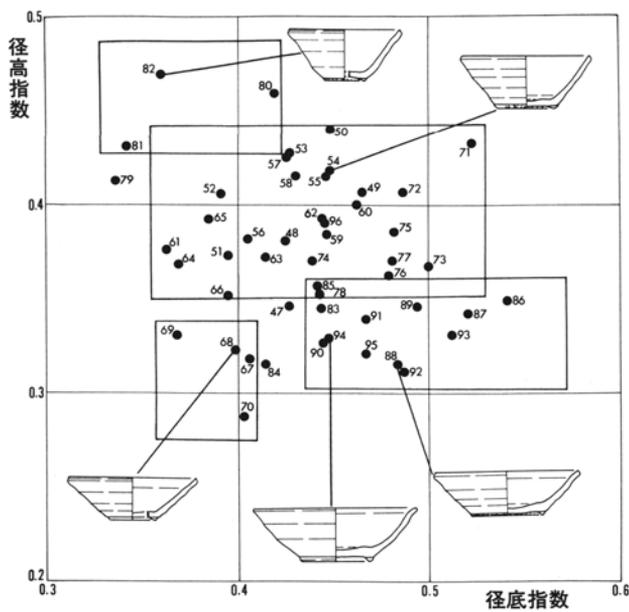
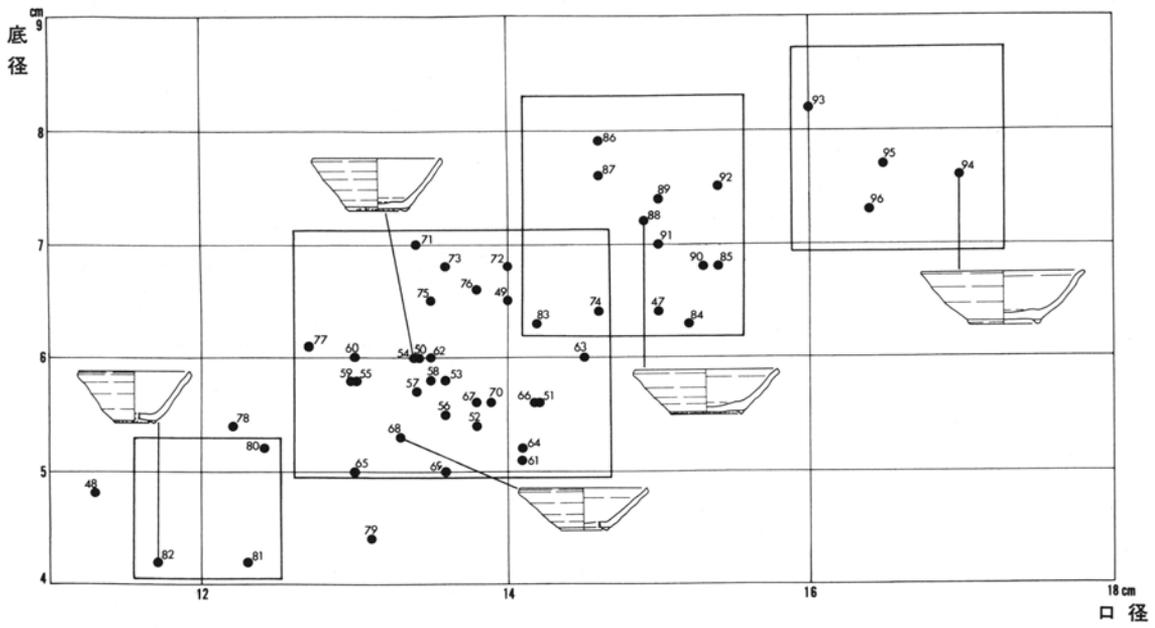
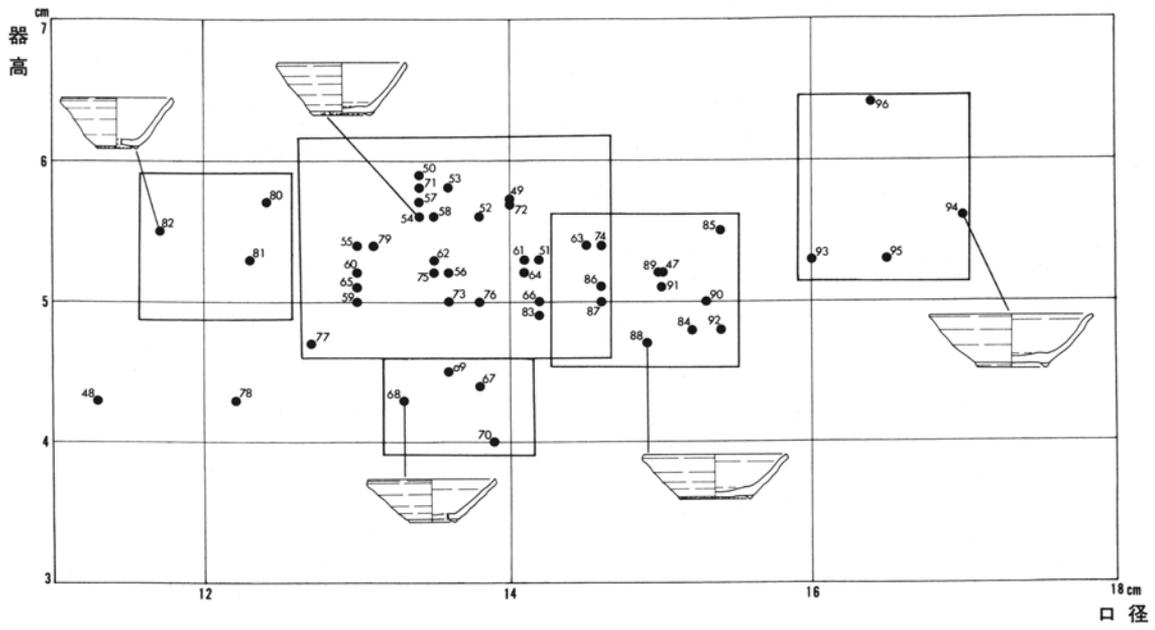
第68図 遺構変遷図 (1/1000)

牛ノ松遺跡



- * SK70
- ▲ SK60
- SD32
- * SK03・SK14

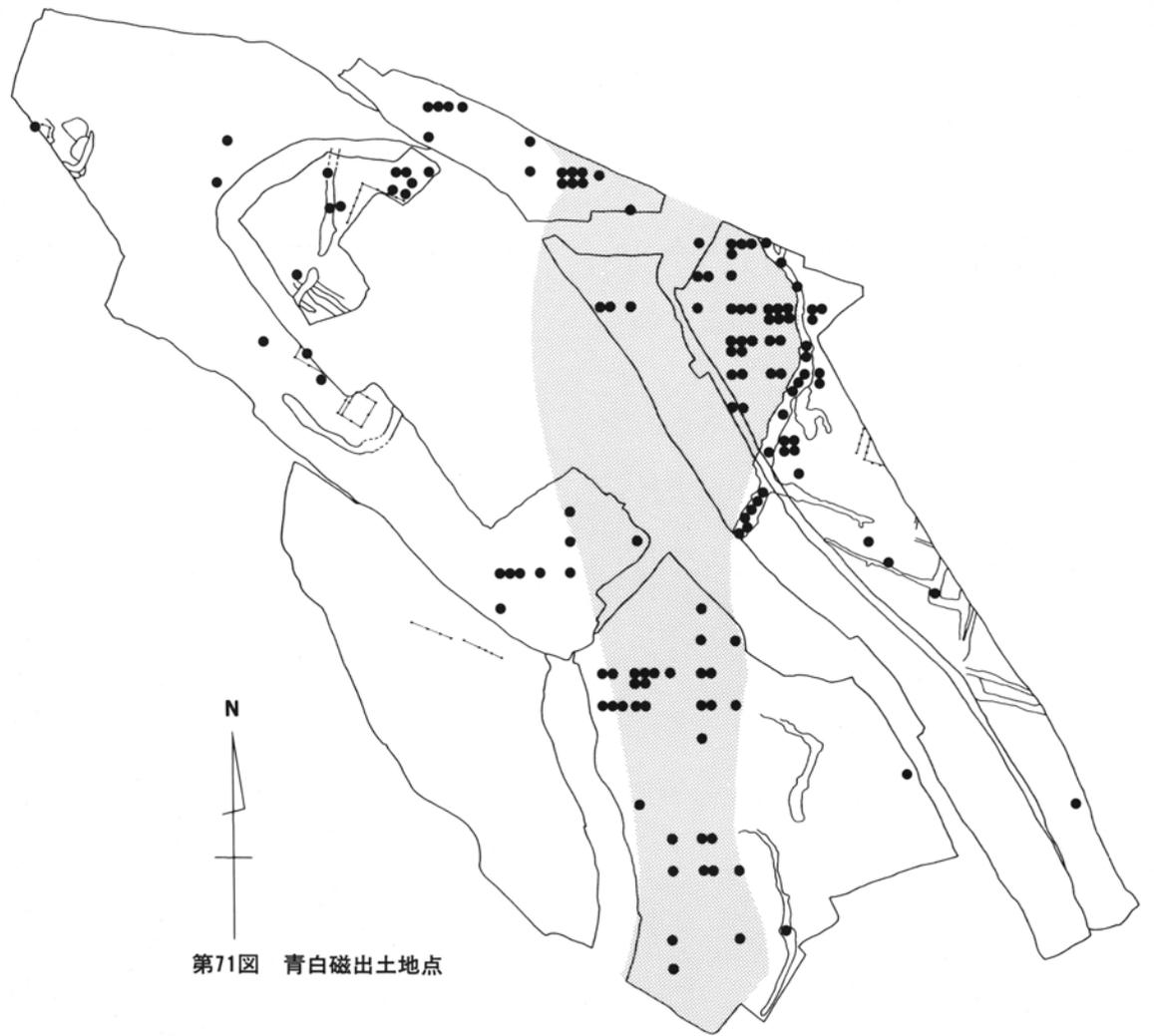
第69図 灰釉系陶器碗の口径・底径・器高分布 1



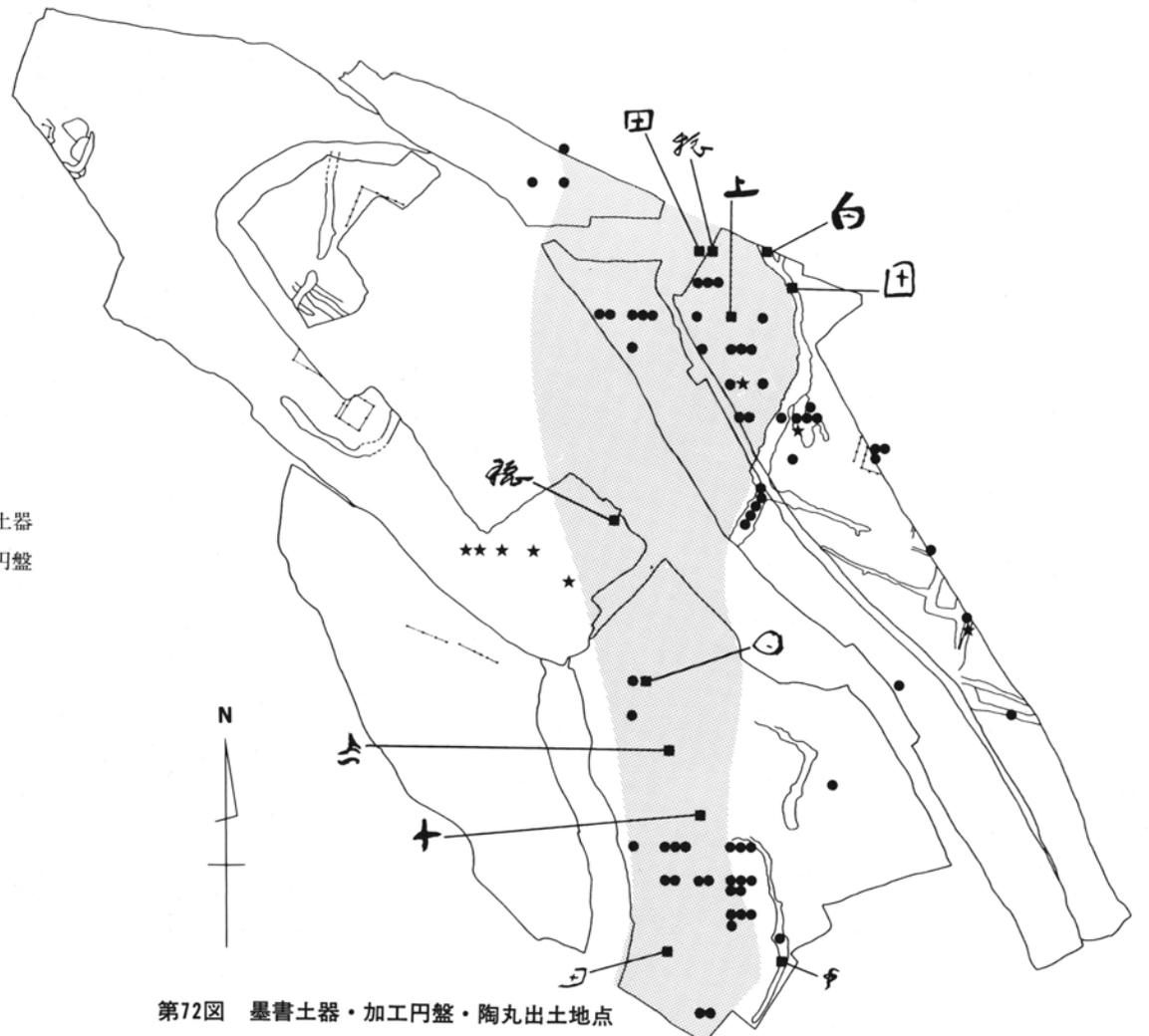
● SD01

第70図 灰釉系陶器碗の口径・底径・器高分布 2

牛ノ松遺跡



第71図 青白磁出土地点



第72図 墨書土器・加工円盤・陶丸出土地点

遺構一覧表

溝 (SD)

新	調査区	旧番号
1	A	SD20
	B	SD06
2	A	SD29
3	A	SD28
4	A	SD27
5	A	SD26
6	A	SD24
7	A	SD23
8	A	SD22
9	A	SD19
10	A	SD37
11	A	SD30
12	A	SD09
13	A	SD15
14	A	SD12
15	B	SD
16	91	SD23
17	91	SD19
18	91	SD20
19	91	SD21
20	91	SD18
21	91	SD12
22	91	SD16
23	91	SD15
24	91	SD14
25	D	SD20
26	D	SD33
27	D	SD34
28	D	SD35
29	D	SD03
30	D	SD45
31	C	SD15
32	C	SD20
33	C	SD19

住居・ピット (SB・P)

新番号	新ピット番号	調査区	旧番号	長径	短径	深さ		
01	1	A	SK146	34	24	13		
		2	A	SK140	16	16	21	
		3	A	SK139	22	20	24	
		4	A	SK132	40	38	23	
		5	A	SK131	36	22	32	
		6	A	SK130	34	32	29	
		7	A	SK128	24	24	34	
02	15	A	SK104	48		10		
		16	A	SK152	36			
		17	A	SK96	54	38	23	
		18	A	SK95	45	38	15	
		19	A	SK150			38	
		20	A	SK85	52	42	19	
		21	B	SK76	25	23	37	
03		22	B	SK80	30	28		
		23	B	SK94	24	18	8	
		24	B	SK104	26	22		
		25	B	SK105	24	22	14	
	04		26	B	SK92	30	30	16
			27	B	SK269	44	26	31
			28	B	SK268	64	23	20
		29	B	SK250	80	60	42	
		30	B	SK254	40	38		
		31	B	SK257		22	25	
		32	B	SK248	17	16	14	
	33	B	SK247	24	24	20		
	34	B	SK235	28	26	37		
	35	B	SK130	24	24	13		
	36	B	SK113	22	22	2		
	37	B	SK114	30	28			
	38	B	SK108	16	16			

新番号	新ピット番号	調査区	旧番号	長径	短径	深さ	
05	47	91	SK117	28	26	18	
		48	91	SK29	27	25	35
		49	91	SK38	29	24	11
		50	91	SK41	24	22	47
		51	91	SK46	37	30	9
		52	91	SK48	38	27	34
		53	91	SK58	60	42	11
		54	91	SK70	44	37	43
		55	91	SK72	32	32	24
		56	91	SK60	55	35	15
06	57	D	SK96	35	35	26	
		58	D	SK96	63	35	22
		59	D	SK96	30	26	13
		60	D	SK96	29	25	15
		61	D	SK96	30	26	7
07	62	D	SK173	53		15	
		63	D	SK167	50	27	
		64	D	SK160	34	34	18
08	65	D	SK156	48		34	
		66	D	SK223			6
		67	D	SK231		22	11
		68	D	SK232	35	30	12
		69	D	SK233		18	6
		70	D	SK234	25	17	5
		71	D	SK235	36	30	8
		72	D	SK236		36	
		73	D	SK237		46	
		74	D	SK238	33		10
	75	D	SK294	38	30	13	
	76	D	SK247	34	34		
	77	D	SK248	30	25	17	
	78	D	SK259	30	26	11	
	79	D	SK260	31	28	16	
	80	D	SK214	30	28	15	
	81	D	SK213	30		12	
	82	D	SK212	28	26	6	
	83	D	SK211	24	20	3	
	84	D	SK210	32	26	7	
	85	D	SK209		38	12	
	86	D	SK208		35	10	
	87	D	SK207	35	30	19	
	88	D	SK220	38	33	10	
	89	D	SK221	32	30	13	
	90	D	SK222		28	6	
	91	D	SK223			6	

柵列・ピット (SA・P)

新番号	新ピット番号	調査区	旧番号	長径	短径	深さ		
1	8	B	SK125			9		
		9	B	SK119	22	16	11	
		10	B	SK118	40	32		
		11	B	SK114	30	28		
		12	B	SK113	22	22	2	
		13	B	SK106	34	30	19	
		14	B	SK105	24	22	14	
	2	39	B	SK236	30	26	22	
			40	B	SK243	26	24	5
			41	B	SK241	27	25	12
			42	B	SK216	27	26	15
		43	B	SK220	24	16	11	
		44	B	SK222	24	22	19	
		45	B	SK204	32	25	15	
3	46	B	SK203	25	24	23		
		92	C	SK77	44	36	26	
		93	C	SK78	43	38	27	
		94	C	SK82	45	42	22	
		95	C	SK88	34	24	30	
		96	C	SK89	67	52	38	
	97	C	SK94	34	27	15		
	98	C	SK95	37	30	13		
	99	C	SK		19	6		

牛ノ松遺跡

新番号	新ビット番号	調査区	旧番号	長径	短径	深さ
4	100	C	SK99	30	28	11
	101	C	SK100	26	24	7
	102	C	SK115	34	27	9
	103	C	SK102	34	32	15
	104	C	SK103	38	37	17
	105	C	SK104	71	42	5
	106	C	SK105	56	43	17
	107	C	SK125	32	30	8
5	113	D	SK275	37	37	21
	114	D	SK276	25		1
	115	D	SK282	38	28	6
	116	D	SK283	33	32	11
	117	D	SK284		18	6
6	108	D	SK	16	10	4
	109	D	SK	34	20	14
	110	D	SK	24	24	16
	111	D	SK	21	18	5
	112	D	SK	18	18	10

新番号	調査区	旧番号	長径	短径	深さ
51	91	SK35	80		16
52	91	SK36	88		51
53	91	SK37	62	43	59
54	91	SK49	57	50	9
55	91	SK50	61	61	14
56	91	SK24	147	120	8
57	91	SK27		78	35
58	D	SK01	118	93	29
59	D	SK98	188	148	
60	D	SK99		308	10
61	D	SK108	384		6
62	D	SK114			22
63	D	SK115		102	22
64	D	SK39	28	28	18
65	D	SK161		65	18
66	D	SK173	93		40
67	D	SK196	180	104	
68	D	SK275	37	37	21
69	D	SK277	50	38	10
70	D	SK01		225	42
71	D	SK02	100	65	27
72	C	SK81	98	76	48
73	C	SK28	26	24	18
74	D	SK229	48	32	37

土坑 (SK)

新番号	調査区	旧番号	長径	短径	深さ
1	A	SK149	26	22	2
2	A	SK142	56	46	27
3	A	SK147	79	67	37
4	A	SK94	46	38	32
5	A	SK92		24	21
6	A	SK91	28	26	22
7	A	SK90	44	34	35
8	A	SK83		45	10
9	A	SK82	64	44	12
10	A	SK84	32	25	22
11	A	SK87	48	43	14
12	A	SK79	50	42	48
13	A	SK76	32	26	
14	A	SK201		30	
15	A	SK77	198	108	
16	A	SK46	34	32	20
17	A	SK40	60	48	15
18	A	SK200	220	94	
19	A	SK26		53	
20	A	SK25	80	48	
21	A	SK16		116	24
22	A	SK16		72	6
23	A	SK15	68	68	27
24	A	SK14	77		11
25	B	SK109	22	20	16
26	B	SK159	144	114	28
27	B	SK210	48	28	14
28	B	SK211	26	26	33
29	B	SK172	30	30	23
30	B	SK173	150	92	27
31	B	SK184	110	48	5
32	91	SK89		40	29
33	91	SK65	63	43	38
34	91	SK62	47	45	34
35	91	SK71	80	72	153
36	91	SK79	100	69	58
37	91	SK69	33	28	17
38	91	SK104	32	23	15
39	91	SK110	88	55	22
40	91	SK111	73	57	21
41	91	SK115	82	80	26
42	91	SK116		66	18
43	91	SK112		218	13
44	91	SK114	88	73	9
45	91	SK51	73	60	18
46	91	SK44	75	41	8
47	91	SK40	49	45	38
48	91	SK39	96	82	13
49	91	SK34	40	29	22
50	91	SK33	63	55	33

遺物一覧表

麻生田大橋遺跡胎土分析試料

番号	試料番号	出土地点	口径	底径	器高	残存率
572	T-55	SK600	11.8	7	3.3	ほぼ完形
573	T-56	SK600	11.9	7	3.25	ほぼ完形
574	T-57	SK600	11.7	7.5	3.05	2/3
575	T-58	SK600	12.3	7	3.3	2/3
576	T-59	SK600	12	7	3.15	1/2
577	T-60	SK600	11.3	6.5	3.1	1/3
578	T-61	SK600	11.6	6.5	3.05	ほぼ完形
579	T-62	SK600	12.5	6.5	3.3	2/3
580	T-63	SK600	12	7	2.95	1/4
581	T-64	SK600	12.2	7.5	3.05	1/3
582	T-65	SK600	8	7	1.6	2/3
583	T-66	SK600	8	7.2	1.55	2/3
584	T-67	SK600	7.4	6.8	1.5	完形
585	T-68	SK600	7.9	7.2	1.7	ほぼ完形
586	T-69	SK600	7.7	6.8	1.4	ほぼ完形
587	T-70	SK600	7.6	7.2	1.7	ほぼ完形
588	T-71	SK600	7.8	6.4	1.25	ほぼ完形
589	T-72	SK600	6.8	6.4	1.1	ほぼ完形
590	T-73	SK600	7.9	7.3	1.4	2/3
591	T-74	SK600	8.2	7.3	1.4	2/3

八ツ面山北部遺跡胎土分析試料

番号	試料番号	出土地点	口径	底径	器高	残存率
592	T-75	SK12	8.3			
593	T-76	SK12	8.3			
594	T-77	SK12	8.4			
595	T-78	SK12	7.8			
596	T-79	SK12	7.8			
597	T-80	SK12	12.5			
598	T-81	SK12	12.5			
599	T-82	SK12	10.5			
600	T-83	SK12	10.5			

遺物一覧表

土器・陶器・磁器

番号	調査区	登録番号	出土地点	口径	底径	器高	残存率
46	A	184	SD01	13.1			1/6
47	A	156	SD01	15	6.4	5.2	1/4
48	A	150	SD01	11.3	4.8	4.3	1/4
49	A	158	SD01	14	6.5	5.7	1/3
50	A	159	SD01	13.4	6	5.9	1/3
51	A	105	SD01	14.2	5.6	5.3	1/2
52	A	140	SD01	13.8	5.4	5.6	2/3
53	A	89	SD01	13.6	5.8	5.8	1/2
54	A	151	SD01	13.4	6	5.6	1/3
55	A	155	SD01	13	5.8	5.4	1/4
56	A	180	SD01	13.6	5.5	5.2	1/6
57	A	88	SD01	13.4	5.7	5.7	完形
58	A	161	SD01	13.5	5.8	5.6	1/3
59	A	134	SD01	13	5.8	5	2/3
60	A	137	SD01	13	6	5.2	1/2
61	A	136	SD01	14.1	5.1	5.3	2/3
62	A	185	SD01	13.5	6	5.3	1/3
63	A	133	SD01	14.5	6	5.4	2/3
64	A	131	SD01	14.1	5.2	5.2	ほぼ完形
65	A	186	SD01	13	5	5.1	2/3
66	A	187	SD01	14.2	5.6	5	1/4
67	A	189	SD01	13.8	5.6	4.4	1/6
68	A	147	SD01	13.3	5.3	4.3	1/4
69	A	181	SD01	13.6	5	4.5	1/6
70	A	153	SD01	13.9	5.6	4	1/3
71	A	146	SD01	13.4	7	5.8	1/3
72	A	154	SD01	14	6.8	5.7	1/4
73	A	142	SD01	13.6	6.8	5	1/2
74	A	138	SD01	14.6	6.4	5.4	1/3
75	A	90	SD01	13.5	6.5	5.2	1/4
76	A	157	SD01	13.8	6.6	5	1/4
77	B	2	SD01	12.7	6.1	4.7	1/2
78	A	103	SD01	12.2	5.4	4.3	完形
79	A	135	SD01	13.1	4.4	5.4	2/3
80	A	145	SD01	12.4	5.2	5.7	1/4
81	A	144	SD01	12.3	4.2	5.3	1/2
82	A	148	SD01	11.7	4.2	5.5	1/4
83	A	132	SD01	14.2	6.3	4.9	完形
84	A	143	SD01	15.2	6.3	4.8	1/3
85	A	139	SD01	15.4	6.8	5.5	1/2
86	B	4	SD01	14.6	7.9	5.1	2/3
87	B	14	SD01	14.6	7.6	5	1/4
88	B	3	SD01	14.9	7.2	4.7	1/3
89	A	149	SD01	15	7.4	5.2	1/4
90	B	1	SD01	15.3	6.8	5	1/3
91	A	152	SD01	15	7	5.1	1/4
92	A	183	SD01	15.4	7.5	4.8	1/6
93	A	190	SD01	16	8.2	5.3	1/2
94	B	7	SD01	17	7.6	5.6	2/3
95	B	8	SD01	16.5	7.7	5.3	1/2
96	B	13	SD01	16.4	7.3	6.4	1/2
97	A	85	SD01	8.4	5	1.8	完形
98	A	195	SD01	7.2	5.2	1.8	1/3
99	A	200	SD01	7	5	1.6	1/2
100	A	192	SD01	7.8	4.8	1.9	2/3
101	B	17	SD01	7.3	4.6	1.6	1/3
102	A	87	SD01	8.1	4.5	1.7	4/5
103	A	163	SD01	7.7	4.8	1.8	完形
104	A	165	SD01	8.2	5.6	1.6	1/2
105	A	193	SD01	8.6	6	1.9	2/3
106	A	167	SD01	7.8	4.8	1.5	1/3
107	A	101	SD01	7.8	4.4	1.6	完形
108	A	164	SD01	7.6	4.8	1.4	完形
109	A	84	SD01	8	4.9	1.4	3/4
110	A	198	SD01	7.6	5	1.5	2/3
111	A	194	SD01	9	7	1.4	1/5
112	A	196	SD01	7.4	3.4	2.4	2/3
113	A	166	SD01	8.3	4.2	2.3	1/3
114	A	201	SD01	8.2	4.4	2.1	2/3
115	B	9	SD01	8.5	4	2.1	2/3
116	B	15	SD01	7	3.6	2	1/3

番号	調査区	登録番号	出土地点	口径	底径	器高	残存率
117	A	202	SD01	8.4	5	2	1/3
118	A	162	SD01	8.1	4.4	2.1	完形
119	A	199	SD01	8.2	4.3	1.75	2/3
120	B	10	SD01	9	4.2	1.5	2/3
121	A	203	SD01		6.6	3.6	1/2
122	A	121	SD01	12.2	6.6	4	3/4
123	A	120	SD01	11.2	5.7	3.5	1/2
124	A	242	SD01	12	6	3.5	1/3
125	A	94	SD01	12.4	6	3.6	完形
126	A	118	SD01	12.6	6.3	3.7	2/3
127	A	119	SD01	12.8	6.2	3.7	2/3
128	A	246	SD01	12.6	6.8	3.5	2/3
129	A	100	SD01	12.5	6.6	3.4	完形
130	A	244	SD01	11.6	5.8	3.4	1/3
131	A	93	SD01	12.4	6.2	3.6	完形
132	A	124	SD01	12.4	6.6	3.4	1/2
133	A	128	SD01	11.7	5.8	3.3	2/3
134	A	241	SD01	12.1	7	3.4	1/8
135	A	115	SD01	11.8	6	3.2	1/2
136	A	205	SD01	12.5	7.1	3.2	1/3
137	A	129	SD01	12.5	6.7	3	2/3
138	A	126	SD01	12.3	6.8	2.9	完形
139	A	102	SD01	12.2	7	2.8	完形
140	A	127	SD01	11.7	7.2	2.9	ほぼ完形
141	A	249	SD01	12.1	5.6	2.6	1/4
142	A	206	SD01	10.6	4.7	2.8	1/6
143	A	122	SD01	11.2	5.2	3.3	1/5
144	A	92	SD01	11.8	6	3.7	完形
145	A	117	SD01	12.2	5	4.5	ほぼ完形
146	A	116	SD01	12.7	6.3	3.6	ほぼ完形
147	A	204	SD01	7.6	4.6	1.9	1/2
148	A	86	SD01	7.9	4.8	1.8	完形
149	A	243	SD01	6.8	4.6	1.6	1/4
150	A	98	SD01	8	5.9	1.6	完形
151	A	125	SD01	9	6.8	1.8	ほぼ完形
152	B	11	SD01	7.9	5	1.3	3/4
153	A	248	SD01	8.2	4.7	1.5	2/3
154	A	130	SD01	7.3	4.2	1.5	2/3
155	A	95	SD01	13	8.2	3	2/3
156	B	19	SD01	12.4	5.8	3.1	1/4
157	A	99	SD01	12.8	6	3	1/4
158	A	247	SD01	12	6.3	2.5	1/6
159	A	245	SD01	8	6	2.2	1/4
160	A	240	SD01	6.1	3.5	1.5	1/4
161	A	82	SD01	24.2	15.4	7.6	1/8
162	A	81	SD01	25	14.2	6.4	1/4
163	A	210	SD01	25	14.4	6.3	1/8
164	A	176	SD01	26.4			1/8以下
165	A	172	SD01	19.8	14.8	6.8	1/8
166	A	175	SD01	17.6			1/4
167	A	233	SD01	11		7	1/6
168	A	174	SD01				1/4
169	A	83	SD01	31.8	14.5	10.8	1/6
170	A	96	SD01	27			1/6
171	A	321	SD01	11.7			1/8以下
172	A	323	SD01	9.8			1/8
173	A	322	SD01	15.8			1/8以下
174	A	173	SD01	16.6			1/6
175	A	333	SD01	21.6	14.9		1/8以下
176	A	320	SD01		8		1/1
177	B	6	SD01	13	6.1	5.1	3/4
178	A	318	SD01	8.4	4.8	1.6	ほぼ完形
179	A	168	SD01	24			1/8以下
180	A	213	SD01	25.4			1/8以下
181	A	169	SD01	30.2			1/8以下
182	A	211	SD01	26.9			1/6
183	A	91	SD01	41.6			1/8以下
184	B	12	SD01	40.2			1/8以下
185	A	170	SD01	43.8			1/8以下
186	A	214	SD01	24.5			1/8以下
187	A	212	SD01	20			1/4
188	A	80	SD01	20.6			1/6
189	A	177	SD01	29			1/8以下

牛ノ松遺跡

番号	調査区	登録番号	出土地点	口径	底径	器高	残存率
190	A	208	SD01	28.8			1/8以下
191	A	97	SD01	24.6			1/6
192	A	209	SD01	17.6			1/8
193	A	178	SD01	25.5			1/8以下
194	A	207	SD01	26		3.8	1/6
210	C	13	SD32	10.2	6	2.7	1/6
211	C	66	SD32	13.5	6	5.7	1/3
212	C	64	SD32	13.7	5.4	5.2	3/4
213	C	65	SD32	13.8	6	5.3	1/2
214	C	73	SD32	13.3	5	5.2	1/4
215	C	69	SD32	15	6.5	4.5	1/4
216	C	76	SD32	14.7	6.5	4.8	1/4
217	C	70	SD32	14.1	5.7	4.2	1/4
218	C	72	SD32	14.4	7.2	5.6	1/6
219	C	71	SD32	13.8	6.4	5.1	1/3
220	C	74	SD32	13.5	6.6	5	1/8
221	C	67	SD32	12.1	5.5	5.3	1/2
222	C	68	SD32	12.2	4.8	5.2	1/4
223	C	75	SD32	12.1	5	5	1/8
224	C	8	SD32	13.3			1/6
225	C	80	SD32	14.4		4.4	1/8以下
226	C	81	SD32	14.4		4.8	1/8以下
227	C	78	SD32	13.8		5.3	1/8以下
228	C	77	SD32	13.4		5	1/8
229	C	7	SD32		5.2		1/1
230	C	3	SD32		5.45		1/1
231	C	10	SD32		5.5		1/1
232	C	92	SD32	8.1	5.2	1.9	1/3
233	C	88	SD32	8.2	5.2	1.8	完形
234	C	89	SD32	7.6	5.2	1.9	2/3
235	C	83	SD32	8.2	5.3	1.9	3/4
236	C	82	SD32	8.4	5.2	2	完形
237	C	86	SD32	7.8	5.1	1.7	完形
238	C	96	SD32	8	5.4	1.7	1/3
239	C	94	SD32	8.6	5	1.8	1/3
240	C	99	SD32	8.2	5	2	1/4
241	C	87	SD32	7.8	5.4	1.7	完形
242	C	102	SD32	6.2	4.2	1.3	1/8
243	C	91	SD32	8	5.2	1.6	1/4
244	C	101	SD32	7.7	4.8	1.9	1/6
245	C	85	SD32	7.4	4.5	1.5	完形
246	C	103	SD32	7.6	5.6	1.4	1/3
247	C	93	SD32	7.8	5	1.4	1/2
248	C	100	SD32	9.6	6.4	1.3	1/6
249	C	95	SD32	8.1	5	1.5	1/3
250	C	90	SD32	8.3	5.6	1.2	1/2
251	C	84	SD32	7.5	5.4	1.5	完形
252	C	14	SD32		5.8		2/3
253	C	4	SD32		5.6		1/1
254	C	57	SD32	7.3	4.4	1.7	2/3
255	C	63	SD32	6.5	4	1.6	1/4
256	C	59	SD32	6.4	3.6	1.7	1/3
257	C	58	SD32	8	5.4	1.4	2/3
258	C	60	SD32	8	5.4	1	1/3
259	C	61	SD32	9.3	5	2.7	1/6
260	C	62	SD32	10.5	5	2.9	1/6
261	C	12	SD32	33.6			1/8
262	C	15	SD32	27.7			1/8以下
263	C	2	SD32		12.2		1/5
264	C	16	SD32		11.4		1/6
265	C	56	SD32	23.2	11.2	9.8	1/2
266	C	148	SD32	12.8			1/8以下
268	C	144	SD32		5.2		1/1
269	A	9	SD02	13.2			1/8以下
270	A	216	SD02	13.4	6.4	4.6	2/3
271	A	217	SD02	14.6	7.1	5.7	1/3
272	A	219	SD02	14.8	7.4	5	1/2
273	A	8	SD02	12.6			1/4
274	A	24	SD02	15.3			1/8
275	A	40	SD02	15.6			1/8
276	A	47	SD02		7		1/2
277	A	49	SD02		7.8		1/4
278	A	22	SD02		4		1/1
279	A	227	SD02	7.8	4.2	2.1	1/3
280	A	221	SD02	8.8	5	2.8	2/3
281	A	223	SD02	7.6	4.2	2.4	1/2
282	A	228	SD02	7.8	3.8	2.4	1/3
283	A	231	SD02	21			1/8以下
284	A	218	SD05	12.4	5.8	4.5	1/3
285	A	220	SD05	14	6.8	4.6	1/4

番号	調査区	登録番号	出土地点	口径	底径	器高	残存率
287	A	232	SD05	24.5			1/8
288	A	226	SD06	10.6			1/6
289	A	222	SD06	10.4	6	4.5	1/3
290	A	3	SD06		6		1/1
291	A	14	SD06		5.4		1/1
292	A	1	SD06		8.1		1/1
293	A	13	SD06		6.6		1/2
294	A	2	SD06		7.6		1/1
295	A	4	SD06		6.8		1/1
296	A	12	SD06		7.6		2/3
297	A	25	SD07	13.3			1/8以下
298	A	26	SD07	16.2			1/8以下
299	A	29	SD07		6.4		1/3
300	A	36	SD07		9.6		1/8以下
301	A	31	SD07		7.8		1/4
302	A	30	SD07		6.2		1/3
303	A	33	SD07	26.8			1/8以下
304	D	35	SD28	14.5	6.6	5.7	2/3
305	D	34	SD28	13.7	5.5	5.9	1/3
306	D	30	SD28	14.2	5.5	5.4	ほぼ完形
307	D	31	SD28	14.1	6.2	5.4	ほぼ完形
308	D	32	SD28	14.5	6.4	5.8	完形
309	D	36	SD28	13.2	5.2	5	1/6
310	D	33	SD28	15.2	6.8	4.6	2/3
311	D	16	SD28	15.2			1/6
312	D	8	SD28	14			1/8
313	D	19	SD28		5.1		1/1
314	D	20	SD28		6.4		1/1
315	D	18	SD28		5.8		2/3
316	D	40	SD28	7.8	4.6	1.8	1/2
317	D	49	SD28	8	5	1.7	完形
318	D	41	SD28	7.8	4.6	1.7	完形
319	D	46	SD28	8.2	5.6	1.6	1/4
320	D	48	SD28	8.4	5.4	1.9	完形
321	D	50	SD28	7.6	4.9	1.6	完形
322	D	39	SD28	8.8	4.8	1.6	2/3
323	D	44	SD28	7.7	4.3	1.6	完形
324	D	47	SD28	7.7	4.3	1.5	完形
325	D	43	SD28	7.8	5	1.6	完形
326	D	42	SD28	8.3	5.6	1.5	完形
327	D	45	SD28	8.2	5.2	1.5	完形
328	D	38	SD28	11.8	7.9	2.7	1/3
329	D	37	SD28	10.7	8	2.8	1/6
330	D	84	SD28	12.2	9.4	2.6	2/3
331	D	25	SD28	11.8	8.8	2.1	1/8以下
332	D	83	SD28	8.7	5.5	1.7	完形
333	D	22	SD28	30			1/8以下
334	D	17	SD28	34.2			1/8以下
335	D	23	SD28		13.8		1/6
336	D	9	SD28		13		1/3
337	A	67	SK03	14			1/8
338	A	63	SK03	16.5	7.1	5.6	2/3
339	A	64	SK03		7.2		1/1
340	A	66	SK03		7.6		1/1
341	A	65	SK03		6.7		1/1
343	A	235	SK14	8.5	4.4	2.3	ほぼ完形
344	A	234	SK14	15.9	7.2	6	ほぼ完形
345	D	80	SK62	16.2	9.6	4.2	1/6
346	D	77	SK62	8.1	5.2	1.8	2/3
347	D	64	SK62	7.7	4.8	1.6	1/2
348	D	65	SK62	8.8	5.6	1.5	2/3
349	D	76	SK60	14	6	5.4	1/3
350	D	66	SK60	14.2	6.2	5.7	2/3
351	D	73	SK60	14.4	6.6	5.5	1/8
352	D	72	SK60	14.2	7	5.1	1/6
353	D	70	SK60	13.8	6	5.1	1/3
354	D	74	SK60	13.8	6	5.4	1/3
355	D	75	SK60	12.2	5.4	5	1/8以下
356	D	71	SK60	13.2	5.6	6.1	1/3
357	D	67	SK60	15		4.8	1/6
358	D	60	SK70	15	7	5.5	1/2
359	D	6	SK70	15.3	7.4	5.4	1/2
360	D	57	SK70	15.2	6.8	5.4	1/3
361	D	56	SK70	15.4	7	5.1	完形
362	D	62	SK70	15.5	6.8	5.3	1/3
363	D	59	SK70	16.3	7.2	5.2	2/3
364	D	61	SK70	14.5	7.4	5	1/3
365	D	58	SK70	14.3	8	4.8	2/3
366	D	13	SK70	15.4			1/3
367	D	10	SK70	15.7			1/4

加工円盤

番号	調査区	登録番号	出土地点	口径	底径	器高	残存率
368	D	4	SK70		6.1		1/1
369	D	63	SK70	8.1	4.2	2.9	1/2
372	A	237	SK06	7.4	5.2	1.8	1/2
373	B	43	SBO3P21	7.1	4.5	1.8	完形
374	91	6	SBO5P50	7.9	5	1.35	完形
375	91	8	SBO5P55	7.7	5.5	1.3	完形
376	D	79	SB08P78	9	5.4	1.4	1/4
377	C	123	SA03P94	7	4.4	1.5	完形
378	A	238	SK01	7.7	4.7	1.7	2/3
379	A	239	SK14	9.5	4.2	2.9	2/3
380	91	9	SK45	8.1	4.5	1.2	完形
381	91	5	SK51	7.5	4	1.7	完形
382	B	22	SK28	16.4	6.6	5.1	1/3
383	91	13	SBO5P53	13.4	5.6	6.15	ほぼ完形
384	C	124	SK72	10.8	6.8	3.5	2/3
385	91	14	SK35	2.6	8.4	4.2	2/3
386	91	15	SK35	12.9	8.4	3.4	1/6
387	D	78	SK63	8.5	5.8	1.8	1/4
388	C	122	SK73	7.6	4.4	2.9	2/3
391	91	12	SK42	15.1			1/6
392	D	98	SK71	81.6	23.2	82.4	1/3
393	A	106	II G11h谷検出V	16.8	7.3	5.4	2/3
394	D	81	表探		7		1/2
395	89	6	SK23		5.8		1/1
396	A	107	II G11h谷検出V	16.4	7.9	6.1	3/4
397	C	145	III G6g検出I	12.7	5.2	5	1/8以下
398	A	114	II G13i検出I	7.8	5	1.8	完形
399	C	143	III G12g検出		6.4		1/2
400	A	319	II G11j谷検出IV		7.6		1/1
401	C	142	III G4f検出IV		5.8		1/4
402	C	146	III G8h検出I		5.6		2/3
403	D	26	II F15r検出I		3.6		1/1
412	C	150	III G10h検出I	14.8			1/8以下
413	C	151	III G4e検出IV	15.3			1/8以下
414	A	328	II G11h谷検出V	21.5			1/8以下
415	A	326	II G13j検出III	21.8			1/8以下
416	91	19	SK35	14.8			1/8以下
417	A	331	II G16j検出IV		4.3		1/3
418	A	325	II G12i検出I				1/8
419	D	96	III G1d谷検出II	11.6			1/8以下
420	D	95	III G1b検出I	15.2			1/6
421	A	330	II G14k検出IV	16.2			1/8以下
422	A	324	II G14j谷検出IV	13.7			1/8以下
423	A	327	II G13k検出II	15.2			1/8以下
424	91	20	II SK61	10.4			1/8
425	C	46	III G12i検出II		3.1		1/8以下
426	B	42	II G9d検出I		3.4		1/1
427	D	97	III G1b検出I		3.4		1/2
428	A	329	II G11i検出I		4.6		1/3
429	A	332	II G13j谷検出III		5.8		1/2
430	C	19	III G10i検出II		6.4		1/2
431	C	117	III G6h検出III		5.5		1/1
432	C	149	III G5e検出III		5.8		1/5
433	C	147	III G4h検出III		5.9		1/2
492	C	32	III G11i検出II	34.5			1/8以下
493	C	120	III G4f検出V		4.2		1/1
494	B	25	II G9d検出II	20.4			1/6
495	A	215	SD01		9.8		1/2
496	A	79	II G11j検出IV	15.6			1/6
497	C	121	III G4e検出III		9.3		1/1
498	A	77	II G15j谷検出III		8.9		2/3
499	C	105	検出II	10.8			1/8以下
500	C	116	III G谷埋土	10.3			1/6
501	C	24	III G6f検出II	10.9			1/8以下
502	C	115	III G8f検出II	8.6	4.8	9.4	2/3
503	C	55	III G12i検出I	14	8.8	10.6	2/3
504	C	45	III G12i検出II	14.6			1/6
505	C	20	III G9i検出III	16			1/8
506	C	28	III G10i検出III		7.9		1/3
507	C	26	III G4e検出IV		7.7		2/3
508	C	50	III G11i検出II	13.7			1/4
509	C	53	III G11h検出III	10.1			1/1
511	C	21	III G6e検出III	23.2			1/8以下
512	C	35	III G8f検出II	19.2			1/4
513	C	36	III G8f検出II	19			1/4
514	C	107	III G11h検出III	20.8			1/6
515	C	31	III G5f検出I	22.8			1/8以下
517	A	279	II G11h谷検出V	30.6			1/6

番号	調査区	登録番号	出土地点	長径	短径	重量
195	A	310	SD01	7.86	5.92	72.9
196	A	312	SD01	5.49	4.62	37.4
197	A	313	SD01	5.15	4.5	40.4
198	A	311	SD01	5.78	4.77	55.8
199	B	41	SD01	8.25	7.26	73.5
200	A	317	SD01	5.22	4.91	33.8
201	A	314	SD01	4.84	4.77	33.5
202	A	316	SD01	5.63	4.37	31.8
203	A	315	SD01	4.82	4.6	27.8
204	B	40	SD01	2.47	2.46	6
205	B	37	SD01	2.45	1.97	5.4
206	B	39	SD01	2.87	2.66	8.5
207	A	297	SD01	3.57	3.3	14.7
208	B	38	SD01	4.72	3.47	19.2
267	C	132	SD32	3.09	2.55	13.7
286	A	35	SD05	2.74	2.66	8.4
370	A	305	SD13	2.28	2.21	6.7
371	91	18	SK34	2.49	2.26	4.3
390	D	93	SK68	4.3	2.61	15.5
434	A	304	II G17m検出I	1.94	1.68	4.4
435	A	302	II G16i検出I	2.19	1.91	5.2
436	A	306	II G17m検出I	2.27	1.79	6.7
437	A	296	II G14i検出I	2.44	2.11	8.1
438	B	29	II G13f検出I	2.18	1.79	6.8
439	C	39	III G10g検出I	1.95	1.93	5.5
440	C	137	III G10g検出I	2.5	2.18	8.3
441	C	109	III G9i検出I	2.24	2.02	6.6
442	C	114	III G10i検出I	2.6	1.83	7.2
443	C	112	III G10i検出I	2.29	2.27	6.9
444	C	110	III G9i検出I	2.23	1.93	6.3
445	C	108	III G9h検出I	1.75	1.66	6.2
446	C	111	III G10i検出I	2.24	1.82	5.2
447	C	133	III G11i検出	2.01	1.91	6.5
448	A	286	II G20o検出I	2.63	2.34	9
449	A	287	II G13j検出I	2.46	2.4	7.5
450	A	289	II G15i検出I	2.68	2.1	7.4
451	A	292	II G14h検出I	2.22	2.22	7.5
452	A	291	II G15j検出I	2.44	2.31	6.8
453	A	295	II G16i検出I	2.41	2.23	7.6
454	A	300	II G14i谷ベルト	3.12	2.68	10.2
455	A	299	II G13h検出I	2.45	2.05	6.6
456	A	307	II G16k検出I	2.66	2.4	6.3
457	A	303	II G12h検出III	3.08	2.19	8.9
458	B	36	II G9c検出I	2.4	2.08	6
459	B	35	II G13f検出I	2.66	2.08	5.5
460	C	38	III G11i検出I	2.47	2.18	8.7
461	C	113	III G10i検出I	2.22	2.15	8
462	C	139	III G10h検出I	2.89	2.71	6.1
463	C	131	III G9f検出I	2.5	2.34	7.5
464	C	130	III G14h検出I	2.68	2.4	10.9
465	C	135	III G10i検出I	2.73	2.3	10.1
466	C	134	III G7i検出I	2.27	2.21	9.8
467	C	140	III G14h検出I	2.58	2.29	8
468	C	141	III G9i検出I	2.29	1.96	9
469	A	308	II G16k検出	2.98	2.93	9.6
470	A	301	II G14i検出III	3.04	2.72	11.5
471	B	33	II G9d検出I	2.89	2.85	11.6
472	C	37	III G11i検出I	2.74	2.65	14.8
473	A	294	II G12h検出I	2.75	2.49	12.5
474	B	27	II G13f谷ベルト	2.73	2.51	12.4
475	C	40	III G11i検出I	2.91	2.59	11.3
476	B	30	II G13e検出I	2.66	2.35	8.9
477	B	34	II G14f谷検出I	3.2	3.09	15.3
478	C	44	III G9g検出II	3.17	2.77	15.5
479	C	42	III G9g検出II	3.81	3.54	11.7
480	C	43	III G9g検出II	3.72	2.61	14.3
481	C	41	III G5f検出III	3.43	2.68	15.2
482	D	88	III G1b検出I	2.99	2.7	9.6
483	A	293	III G2p検出I	3.65	3.12	14.4
484	B	28	II G8d検出北壁	4.01	3.79	19.2
485	A	288	II G16k検出II	1.68	1.45	1.9
486	B	31	II G13e検出IV	2.55	2.37	6
487	B	26	III G4n検出II	2.45	2.38	7.2
488	C	138	III G10h検出I	2.39	2.32	7.5
489	C	136	III G4f検出II	1.96	1.83	4.2
490	C	6	III G5j旧SD14	4.77	4.03	29.9

牛ノ松遺跡

土器・土製品

番号	調査区	登録番号	出土地点	長径	短径	重量
491	A	334	検出	7.5	5.4	
510	C	47	ⅢG9g検出Ⅱ		3.7	
389	D	92	SK68	4	2.45	20.4
404	D	90	ⅡG20a検出Ⅰ	2.48	2.29	13.7
405	D	91	ⅡG20a検出Ⅰ	2.03	1.91	8.3
406	A	284	ⅢG2p検出Ⅰ	2.06	1.91	8.5
407	D	27	ⅡG20c検出Ⅱ	2.27	2.12	9.9
408	D	94	ⅢG1d検出Ⅱ	2.13	1.96	9
409	D	89	ⅡG20b検出Ⅰ	2.19	1.96	8.7
410	A	309	ⅡG15i検出Ⅰ	2.16	2.15	10.9
411	A	283	ⅡG16k検出Ⅰ	1.8	1.75	5

石器・石製品

番号	調査区	登録番号	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	材質
1	A	1	石器群	2.48	2.04	1.95	13.1	チャート
2	A	2	石器群	2.81	2.15	1.8	8.9	チャート
3	A	3	石器群	2.05	1.93	2.17	7.9	チャート
4	A	5	石器群	3.4	2.4	2.27	21	チャート
5	A	4	石器群	2.88	2.57	1.82	11.5	凝灰岩
6	A	6	石器群	3.47	2.65	1.97	18.6	チャート
7	A	8	石器群	3.22	2.42	2.09	13.1	凝灰岩
8	A	7	石器群	2.9	2.88	2.5	25.6	チャート
9	A	9	石器群	2.7	2.2	1.27	4.8	凝灰岩
10	A	10	石器群	4.93	4.2	2.17	53.7	凝灰岩
11	A	11	石器群	0.96	0.99	0.1	0.1	チャート
12	A	12	石器群	2.41	1.8	0.39	1.1	安山岩
13	A	13	石器群	2.28	1.58	0.36	0.8	凝灰岩
14	A	14	石器群	4.9	4.33	3.23	93	花崗岩
15	A	15	石器群	9.42	8.24	3.2		アップライト
16	B	2	ⅡG13f谷下層	2.45	2.01	1.51	7.2	凝灰岩
17	B	3	ⅡG10d検出Ⅳ	3.18	2.29	1.61	10.3	凝灰岩
18	B	4	ⅡG11d検出Ⅱ	3.61	2.15	1.3	10.1	チャート
19	B	5	ⅡG10d検出Ⅲ	3.08	2.26	1.26	0.7	凝灰岩
20	B	6	ⅡG12f検出Ⅲ	3.49	2.66	2.47	19.1	チャート
21	C	1	ⅢG9k検出Ⅰ	8.38	6.58	3.44	210.9	安山岩
22	B	7	ⅡG12d谷	1.36	1.21	0.28	0.5	チャート
23	C	2	ⅡG4e検出Ⅱ	1.86	0.68	0.19	0.2	凝灰岩
24	B	8	ⅡG10d旧SK131	1.49	0.48	0.16	0.1	チャート
25	B	9	ⅡG14e検出Ⅳ	6.35	4.05	1.31	36.1	チャート
26	B	10	ⅡG15f検出Ⅲ	4.91	2.08	0.89	8.1	溶結凝灰岩
27	C	3	ⅢG9h検出Ⅰ	3.56	1.15	0.64	2.2	チャート
28	B	11	ⅡG10d谷	4.33	2.27	0.76	8.5	チャート
29	B	12	ⅡG13f谷下層	6.22	3.27	1.11	22.5	黒曜石
30	B	13	ⅡG10d検出Ⅰ	5.08	1.99	1.02	5.3	凝灰岩
31	A	16	ⅡG13h検出Ⅲ	6.39	1.6	0.53	4.4	凝灰岩
32	C	4	ⅢG6f検出Ⅲ	1.84	1.59	0.29	0.6	安山岩
33	C	5	ⅢG9jSD32	2.04	1.68	0.4	0.9	チャート
34	A	17	ⅡG13i検出Ⅴ	2.05	1.9	0.33	0.9	チャート
35	A	18	ⅡG16k旧SK01	2.2	1.86	0.41	1.1	下呂石
36	C	6	ⅢG8n検出Ⅰ	2.87	2	0.35	1.3	凝灰岩
37	C	7	ⅢG10jSD32	2.54	1.51	0.42	1	チャート
38	D	1	ⅡF17n検出	2.57	1.46	0.34	1.2	安山岩
39	B	14	ⅡG13f谷下層	2.3	1.17	0.22	0.5	チャート
40	A	19	ⅡG11i検出Ⅴ	2.19	1.62	0.34	1	チャート
41	C	8	ⅢG5f谷下層	2.6	1.96	0.44	1.4	安山岩
42	B	15	ⅡG13e検出Ⅲ	3.65	1.99	0.53	1.9	安山岩
43	C	9	ⅢG5g検出Ⅲ	2.9	1.58	0.49	1.8	溶結凝灰岩
44	A	20	ⅡG13j検出Ⅰ	1.59	1.58	0.37	1.1	下呂石
45	C	10	ⅢG7i検出Ⅱ	1.75	1.21	0.56	1.3	凝灰岩
209	C	11	SD20		5.4	0.9		泥岩
516	B	1	ⅡG7b検出Ⅱ	10.5	3.5	2.7		滑石
601	B	16	ⅢG70検出	10.7	10.1	4.7		花崗岩
602	A	21	ⅡG15k検出Ⅴ	8.6	7.7	5		花崗岩
603	C	12	SD20		4.9	3.4		玄武岩
604	C	13	ⅢG5h検出Ⅲ	7.2	4.9	1.9	92.7	砂岩
605	A	22	ⅡG14i検出Ⅱ	1.93	1.13	0.6	0.7	黒曜石

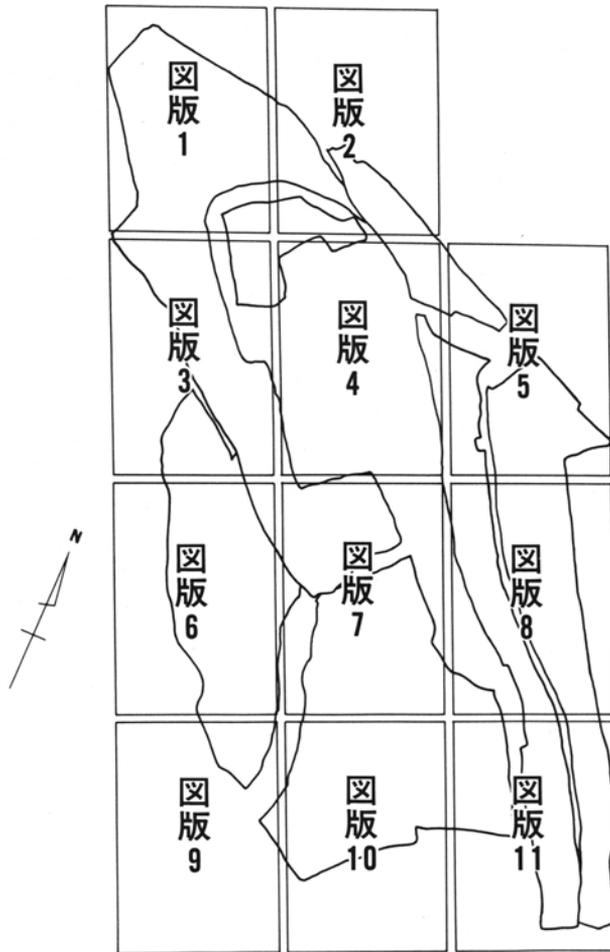
牛ノ松遺跡胎土分析試料

番号	調査区	登録番号	出土地点	試料番号	遺物番号	口径	底径	器高	残存率
518	A	249	SD01	T-20	141	12.1	5.6	2.6	1/4
519	A	253	ⅡG14i谷検出Ⅱ	T-29		12.2	7.6	2.7	2/3
520	89	1	SD03	T-1		11.7	6.8	2.7	2/3
521	A	256	ⅡG13i谷検出Ⅲ	T-32		13	6.7	3	1/2
522	89	2	SD03	T-2		12.1	6.7	2.9	2/3
523	89	3	SK41	T-6		12	6.8	2.2	1/4
524	A	248	SD01	T-19	153	8.2	4.7	1.5	2/3
525	B	23	ⅡG9f検出Ⅰ	T-25		9.3	6.5	1.7	1/1
526	A	258	ⅡG15i検出Ⅲ	T-34		7.4	5	1.4	1/2
527	A	259	ⅡG16i検出Ⅱ	T-35		7.9	4.5	1.6	2/3
528	91	4	SK60	T-10		7.5	4.5	1.6	2/3
529	89	4	SK89	T-8		7.4	5	1.6	1/4
530	D	85	ⅡF17g検出Ⅰ	T-27		7.8	4.8	1.7	1/3
531	A	243	SD01	T-14	149	6.8	4.6	1.6	1/4
532	A	250	ⅡG14i検出Ⅰ	T-21		8.1	6	1.9	1/8
533	D	86	検出	T-28		7.3	5.6	1.8	1/3
534	92	1	表採	T-54		7.5	4.6	2	2/3
535	A	257	ⅡG13i谷検出Ⅲ	T-33		12.2	7.2	2.3	1/3
536	A	247	SD01	T-18	158	12	6.3	2.5	1/6
537	A	261	ⅡG13i谷検出Ⅲ	T-37		12.2	7	2.5	1/2
538	D	84	SD28	T-5	330	12.2	9.4	2.6	2/3
539	A	264	ⅡG14i谷検出Ⅲ	T-40		12.8	8	2.8	1/3
540	A	260	ⅡG13i谷検出Ⅲ	T-36		13		3	1/3
541	C	127	ⅢG9h検出Ⅳ	T-46		8.4	5	1.4	2/3
542	D	83	SD28	T-4	332	8.7	5.5	1.7	完形
543	A	271	ⅡG13i検出Ⅳ	T-48		6.7	3.2	1.4	1/6
544	A	240	SD01	T-11	160	6.1	3.5	1.5	1/4
545	A	245	SD01	T-16	159	8	6	2.1	1/4
546	A	263	ⅡG13i谷検出Ⅲ	T-39		12.4	6.2	3.2	1/2
547	A	268	ⅡG14i谷検出Ⅲ	T-44		12.5	7.1	3.3	2/3
548	91	1	SK51	T-3		11.6	6.5	3.1	2/3
549	A	265	ⅡG12i谷検出Ⅲ	T-41		12	6	3.2	2/3
550	A	255	ⅡG14i谷検出Ⅲ	T-31		12.7	5.8	3.4	3/4
551	A	262	ⅡG13i検出Ⅱ	T-38		12.6	7.2	3.5	1/2
552	A	246	SD01	T-17	128	12.6	6.8	3.5	2/3
553	A	241	SD01	T-12	134	12.1	7	3.4	1/8
554	A	272	ⅡG14i検出Ⅲ	T-49		12.1	6.4	3.5	ほぼ完形
555	A	242	SD01	T-13	124	12	6	3.5	1/3
556	A	266	ⅡG12i谷検出Ⅳ	T-42		12	6.8	3.5	1/4
557	A	244	SD01	T-15	130	11.6	5.8	3.4	1/3
558	C	126	ⅢG4d検出Ⅱ	T-23		11	7	3.3	1/8
559	A	269	ⅡG11i谷検出Ⅲ	T-45		12.2	5.4	3.7	1/3
560	91	3	SK32	T-9		11.7	5.1	3.8	2/3
561	A	267	ⅡG13i谷検出Ⅲ	T-43		12	5.7	3.9	2/3
562	A	270	ⅡG15i検出Ⅳ	T-47		12.2	6	4.3	1/4
563	A	252	ⅡG13i検出Ⅰ	T-26		12	6	3.5	1/8
564	A	254	ⅡG15i検出Ⅱ	T-30		11.3	7	3.3	1/8
565	91	2	P52	T-7			6.4		2/3
566	C	125	ⅢG5f検出Ⅰ	T-22			6.3	1.2	1/1
567	A	251	ⅡG14i検出Ⅰ	T-24			6.4	1.6	1/6
568	C	128	ⅢG4h検出Ⅳ	T-50			5.4		1/2
569	A	273	ⅡG16k谷	T-51		10.7		3.1	1/4
570	A	274	ⅡG11i検出Ⅱ	T-52		11.1		3.2	1/6
571	A	275	表採	T-53		14.5		2.9	1/4

金属製品

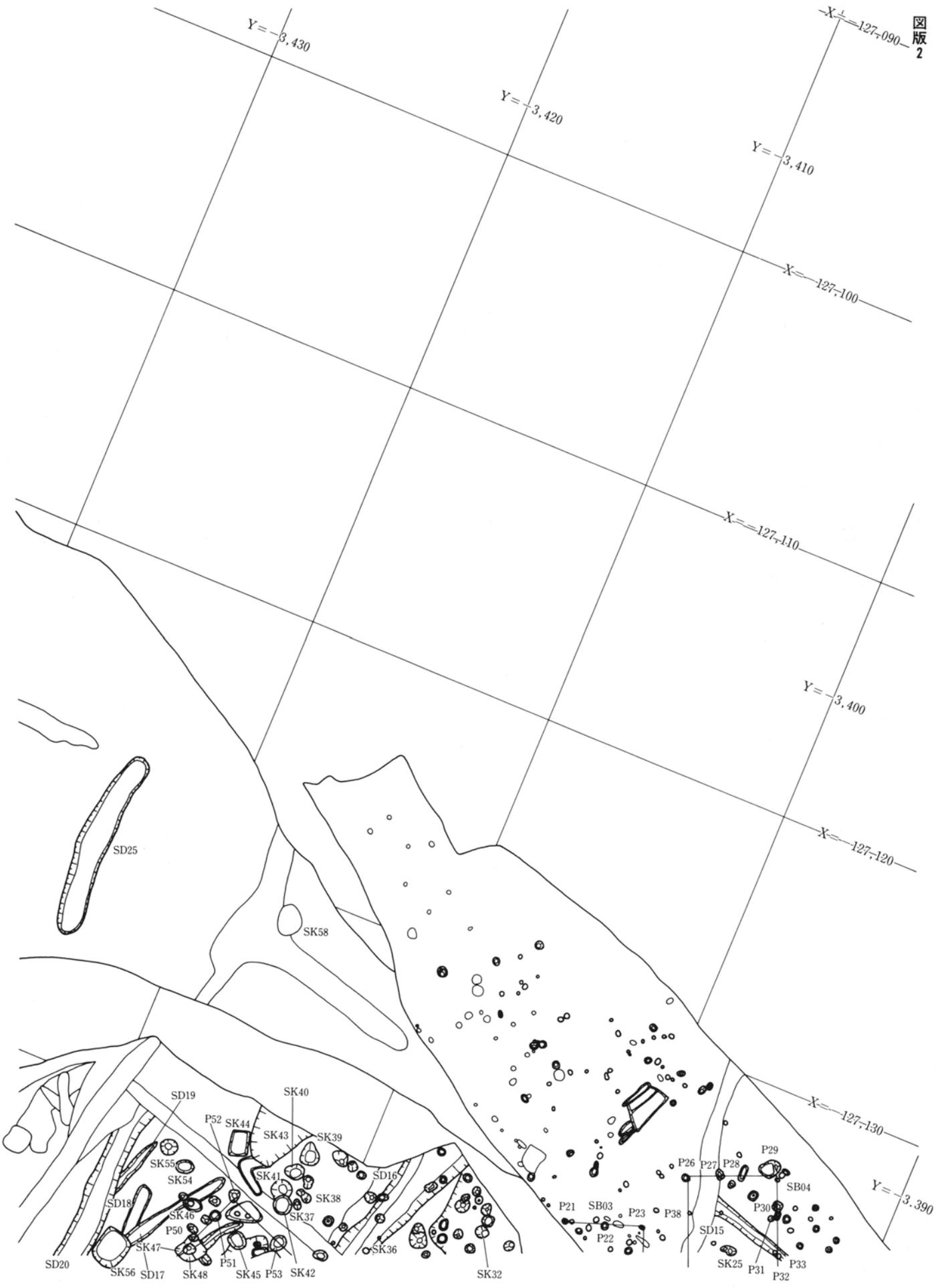
番号	調査区	登録番号	出土地点	長さ	幅	厚さ	材質
1	A	1	SK14	(21.6)	4.6	2.9	鉄

図版



- ・遺構図の縮尺は 1/200
- ・セクションの縮尺は 1/100







- 1 暗灰褐色砂 (ノサナノサナ)
- 2 赤褐色砂 (ノサナノサナ)
- 3 暗灰褐色砂
- 4 赤褐色砂
- 5 茶褐色砂質シルト
- 6 耕作土
- 7 茶褐色砂 (中世包含層?)
- 8 暗茶褐色砂
- 9 赤褐色砂質シルト

25m
20m

Y=3,430

X=127-200

X=127-190

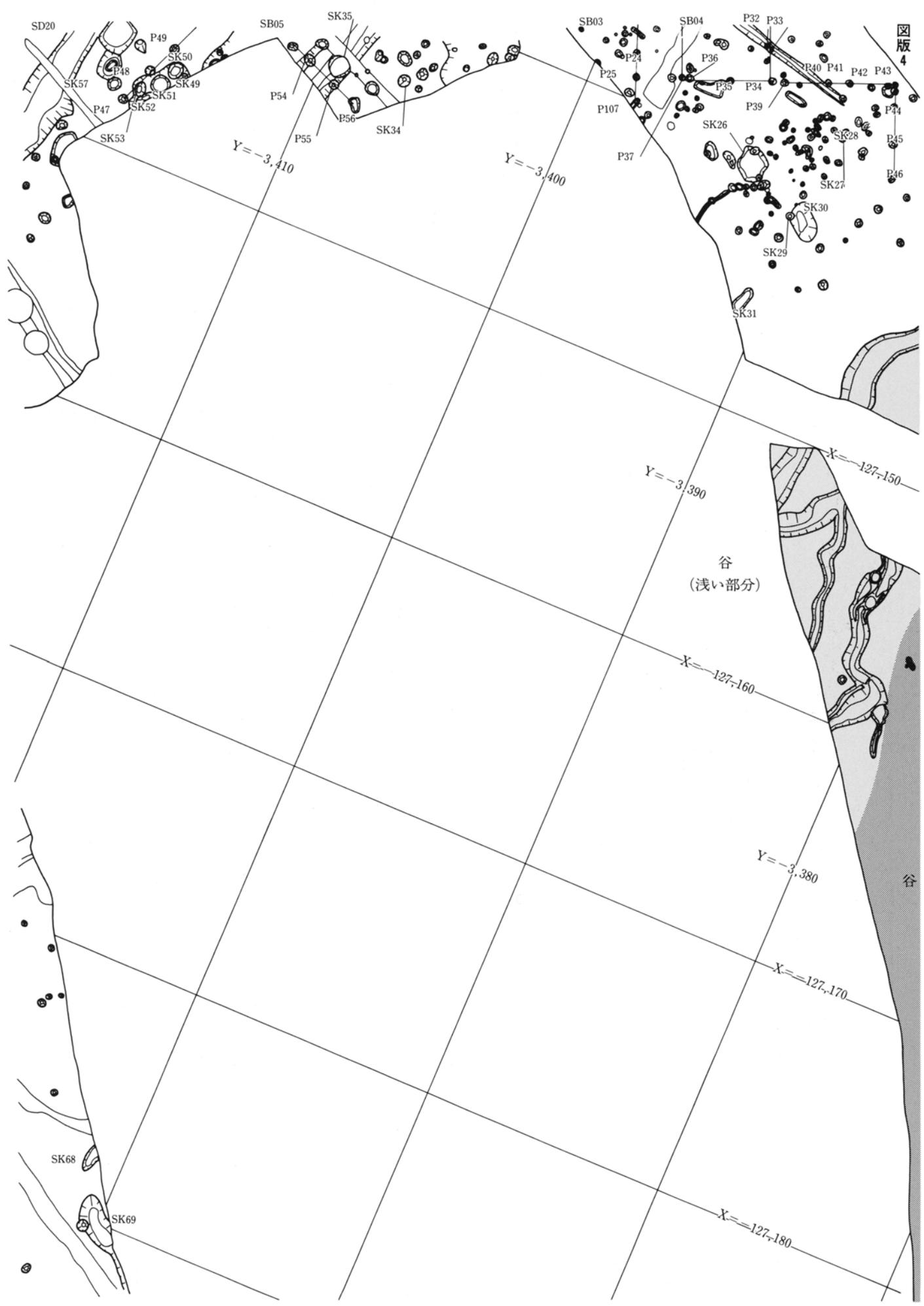
X=127-180

Y=3,420

X=127-170

X=127-160

Y=3,450



谷
(浅い部分)

$Y = -3,380$

$Y = -3,370$

$Y = -3,360$

$X = -127,130$

$X = -127,140$

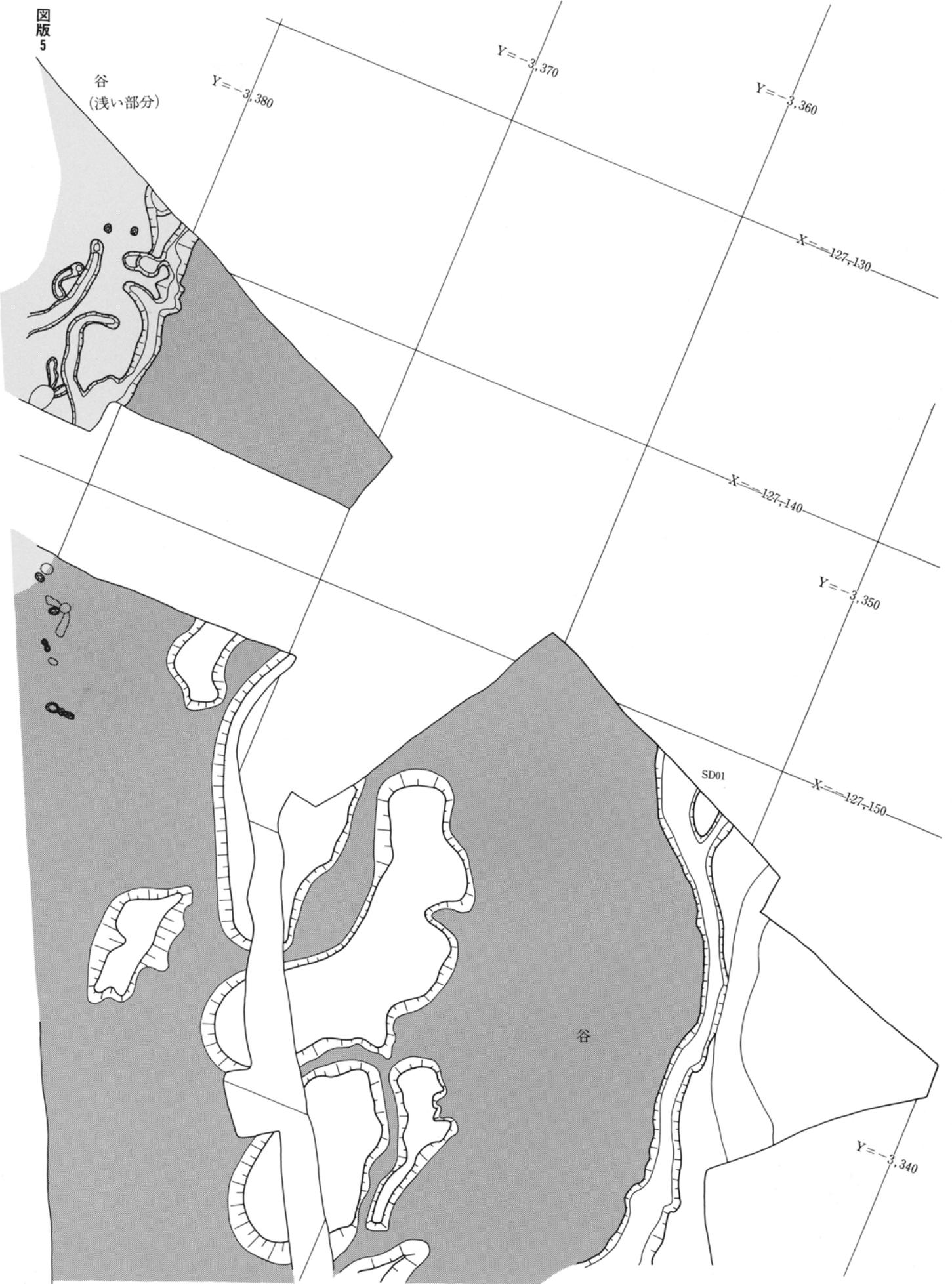
$Y = -3,350$

$X = -127,150$

SD01

谷

$Y = -3,340$

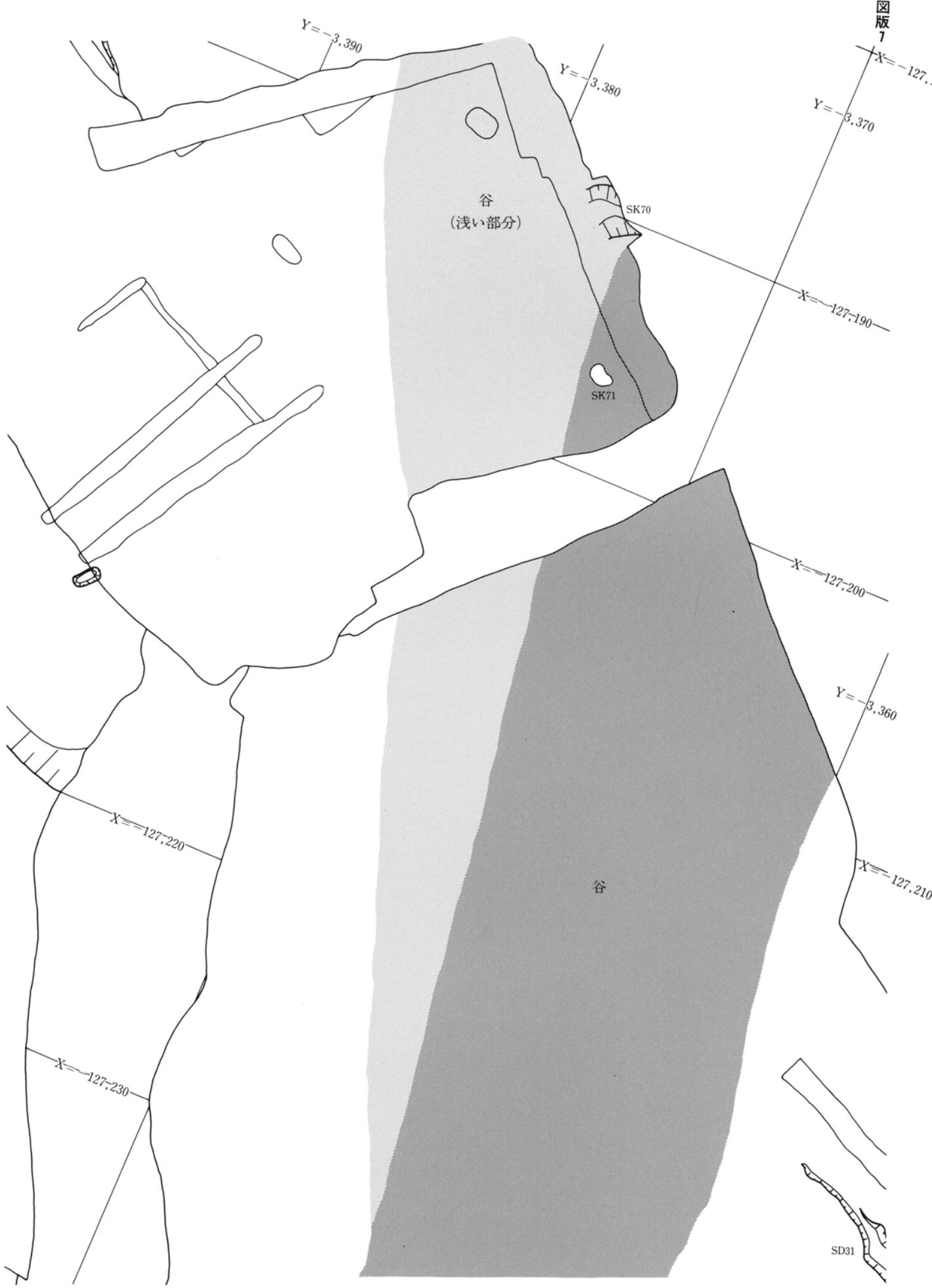




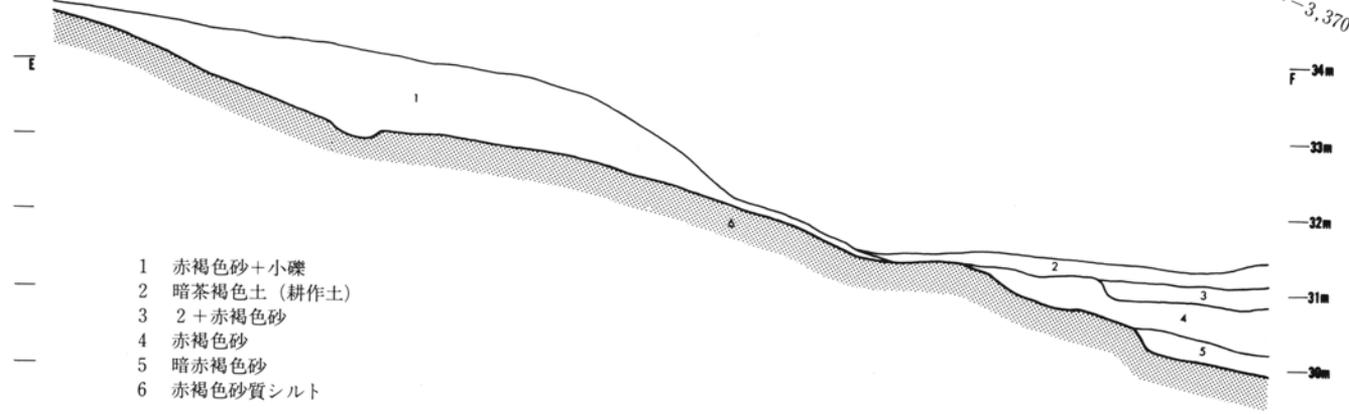
- 1 赤褐色砂
- 2 暗茶褐色土 (耕作土)
- 3 暗赤褐色砂
- 4 赤褐色砂
- 5 明赤褐色砂+小礫

- 6 茶褐色土 (耕作土)
- 7 赤褐色砂質シルト
- 8 赤褐色砂質シルト
- 9 赤褐色砂
- 10 暗茶褐色土 (耕作土)
- 11 暗茶褐色土 (耕作土) + 赤褐色砂+フロック
- 12 暗茶褐色土 (耕作土)
- 13 赤褐色土
- 14 暗赤褐色砂
- 15 茶褐色土 (耕作土)
- 16 暗茶褐色砂
- 17 赤褐色砂質シルト

0 -34m
-32m
-31m
-30m
-29m
-28m
-27m







- 1 赤褐色砂+小礫
- 2 暗茶褐色土 (耕作土)
- 3 2 + 赤褐色砂
- 4 赤褐色砂
- 5 暗赤褐色砂
- 6 赤褐色砂質シルト







▲ A区下面 石器群出土状況（南西から）



▲ A区下面 Bセクション南部



▲ B区 谷から出土した尖頭器29（ピンポールの位置）



29



30



16



2



宋三彩洗175 ▶

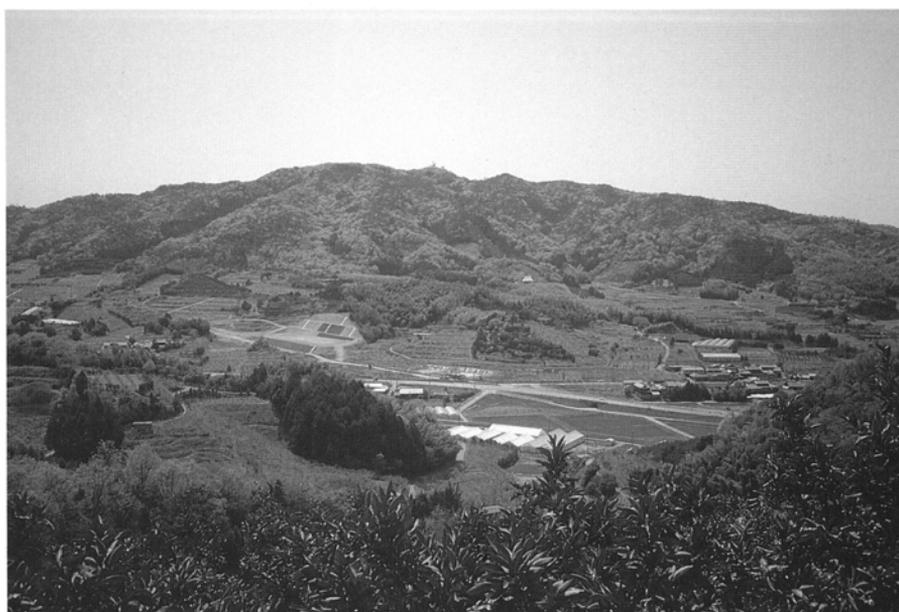
A区 全景 (北西から) ▼



▲ SD01 遺物出土状態



▲ SD01 宋三彩洗 出土状態



◀ 調査前風景（北から）



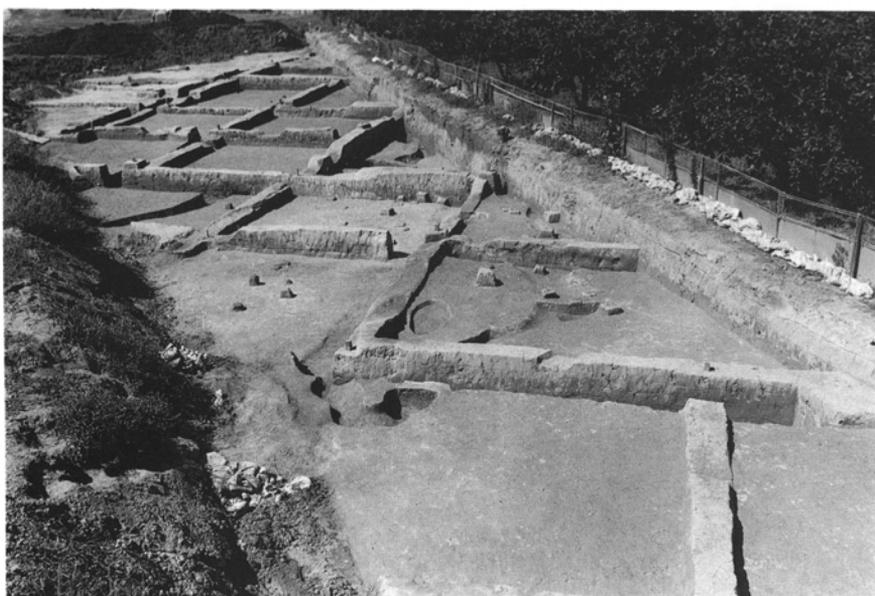
C区 全景（北から）▶



▲ A区 谷セクション（Bセクション）



A区下面 Fセクション西側 ▶



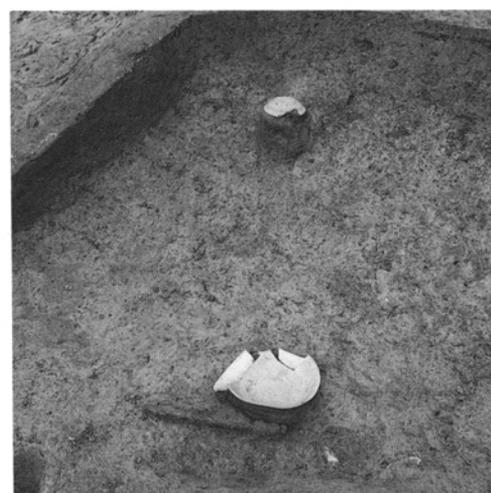
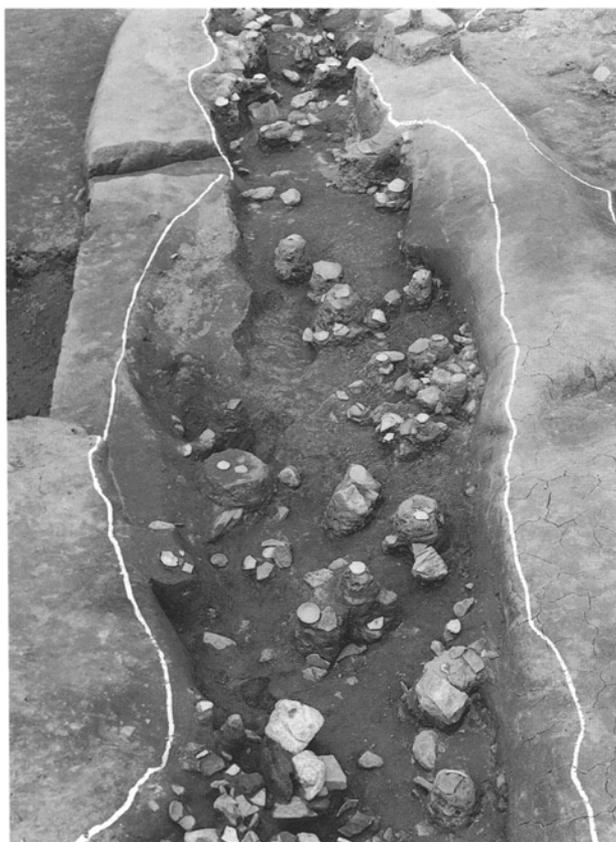
◀ A区下面 全景(南東から)



▲ B区谷 尖頭器29出土状態

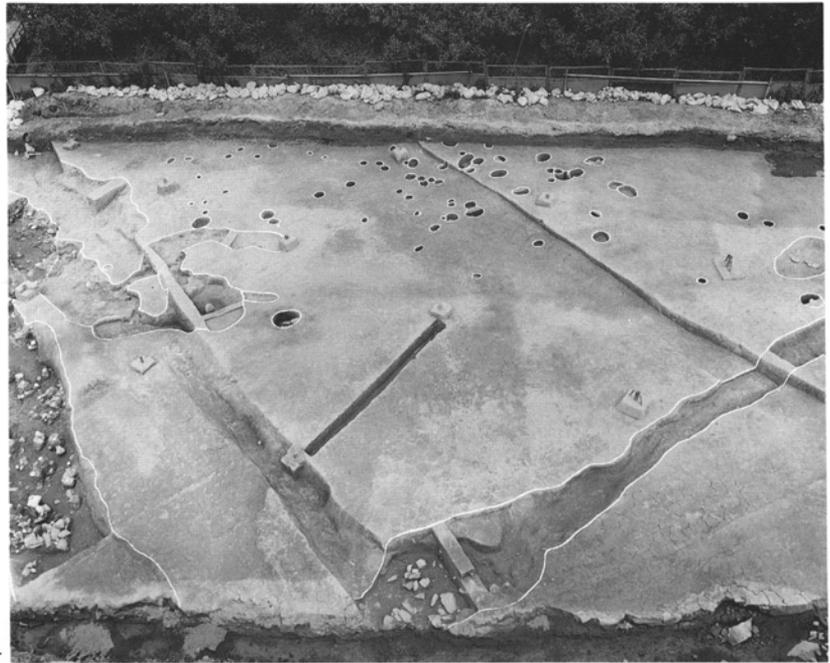


▲ A区谷 石鏃34出土状態



上：A区 全景（北西から）
下：A区 SD01遺物出土状態

上：A区 SD01（南西から） 下：同中（西から）
中：A区 SK21遺物出土状態（南東から）



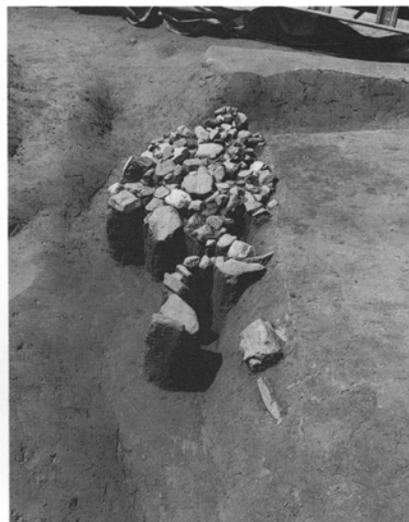
A区 SB01・02, SA01(南西から) ▶



▲ A区 SD03と05でつくる出入口(北西から)

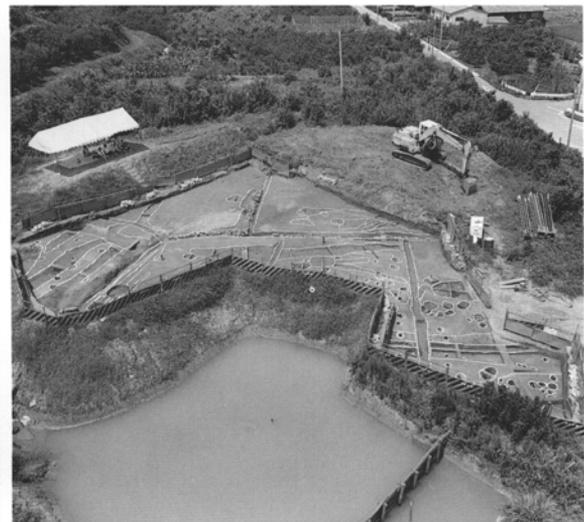


▲ B区 SB03・04, SA02(北西から)



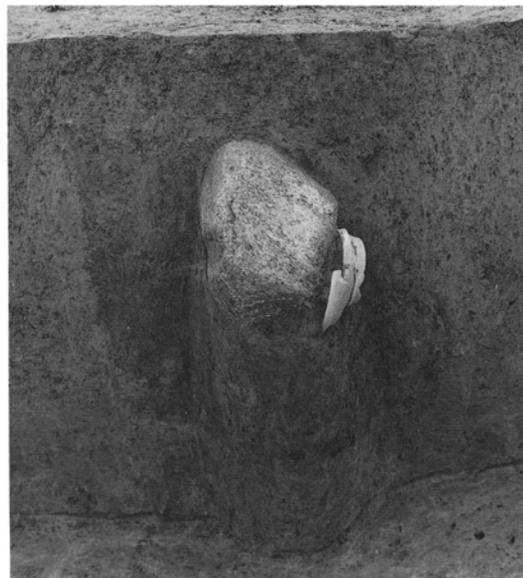
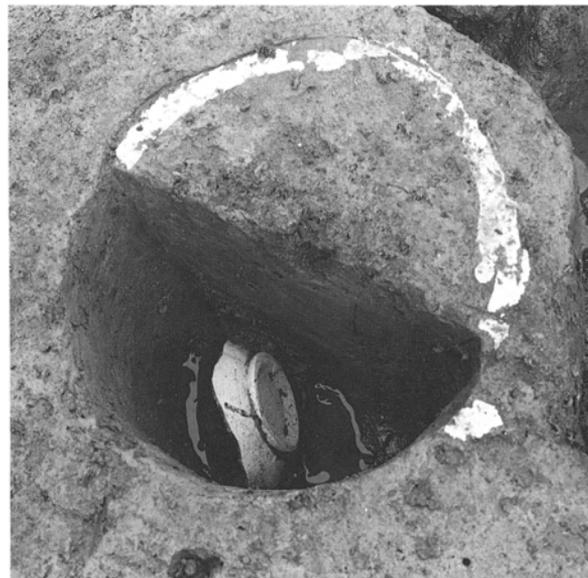
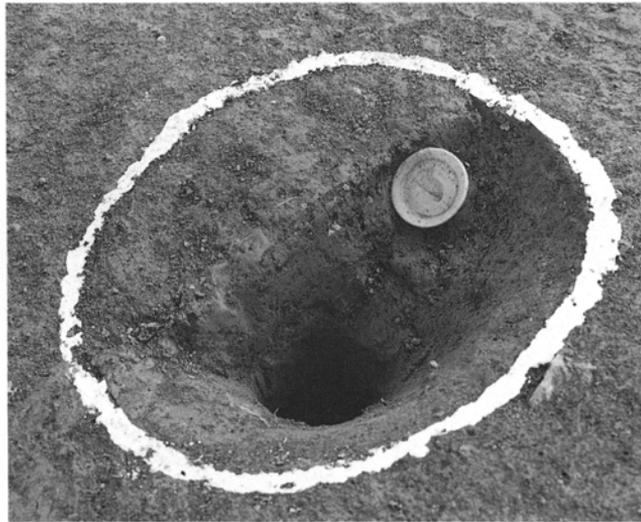
上：A区 SD06集石（西から） 下：D区 SK60（北東から）
中：D区 SD28, SK60, SB06（北東から）

上：A区 SD06集石（北から） 下：D区 SB08（南西から）
中：D区 SD28遺物出土状態（北西から）



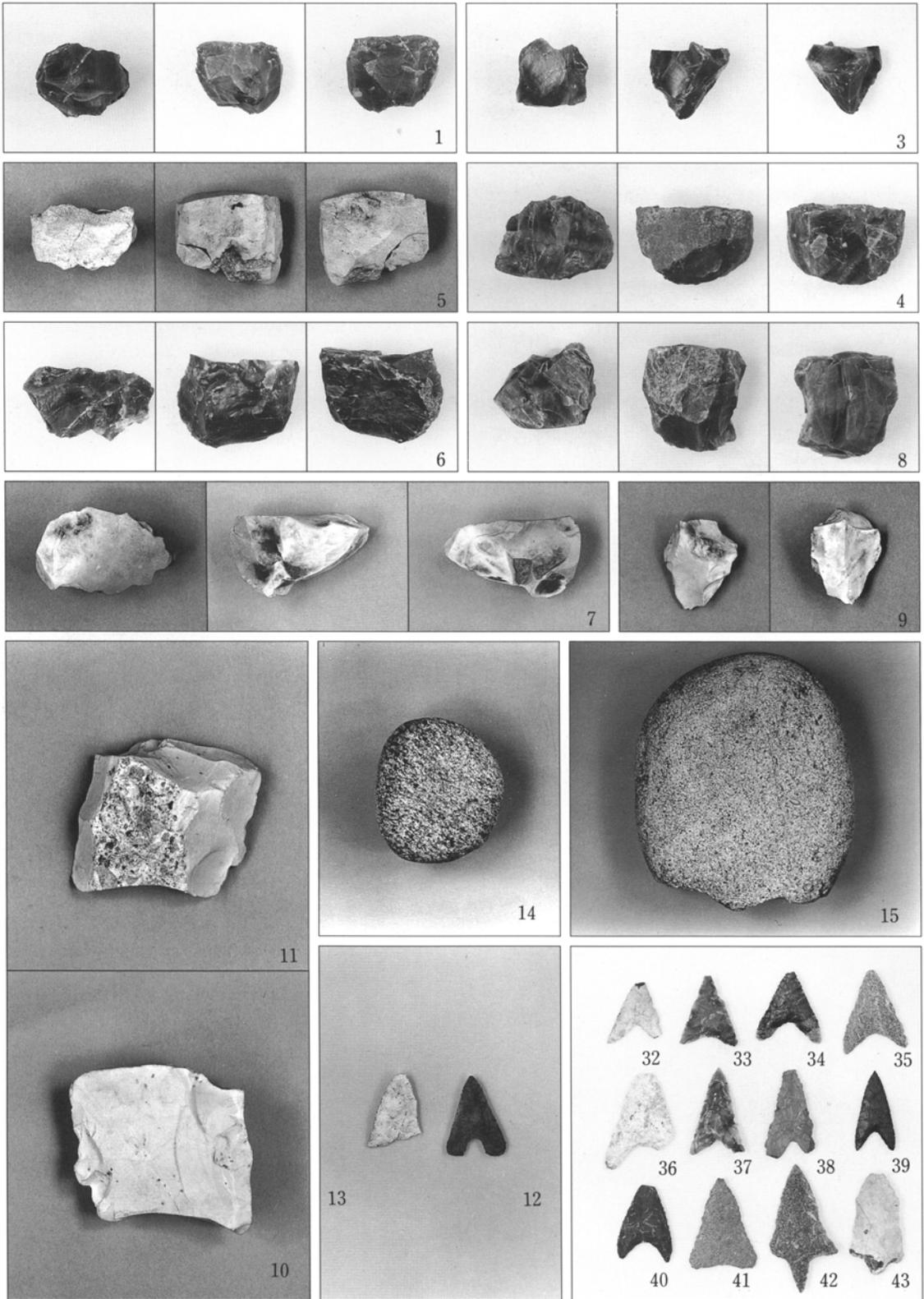
上：C区 段丘崖とSA03・04（北東から）
 中：D区 SK70と谷セクション 下：C区 東部全景(北から)

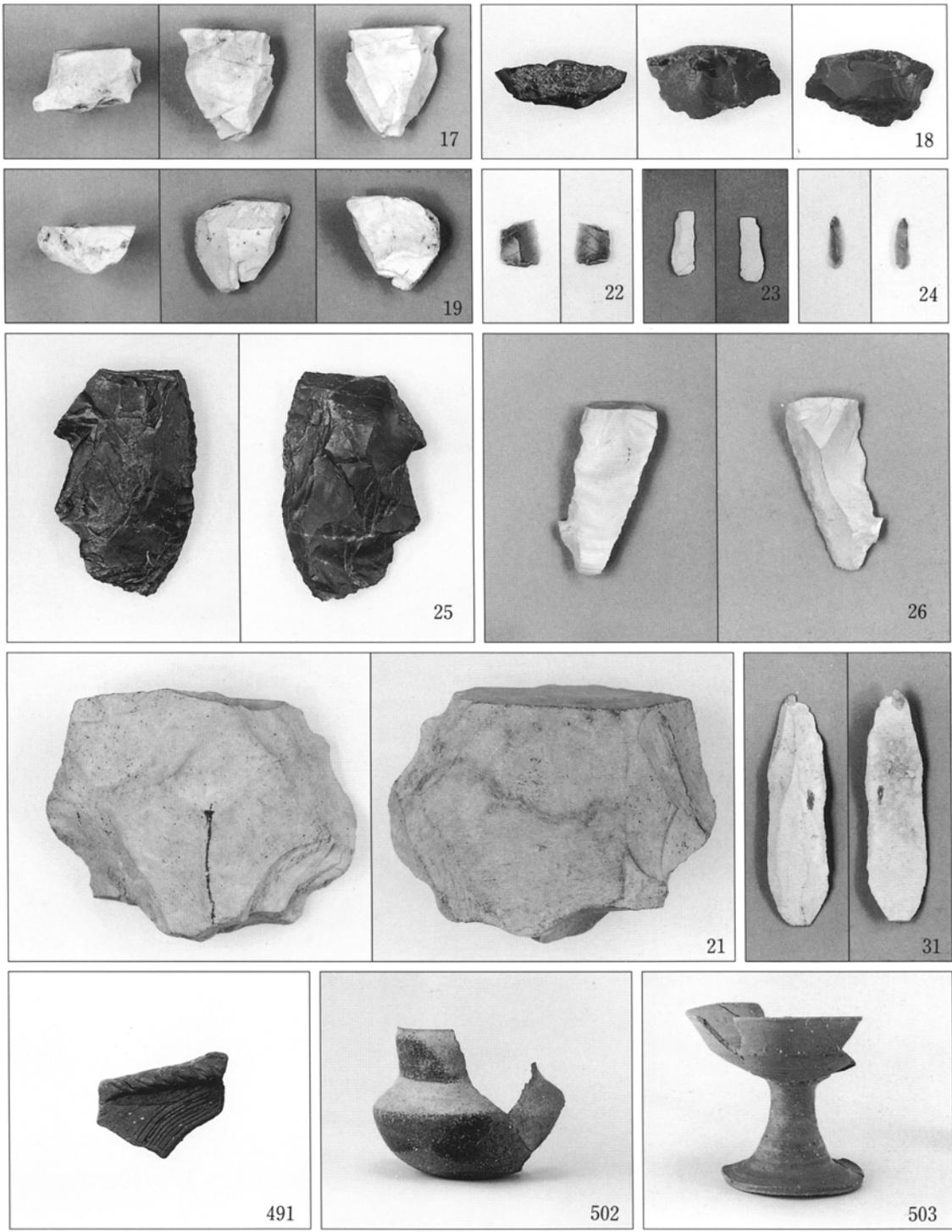
上：D区 西部近世以降の区画溝（東から）
 中：61区 全景(南東から) 下：C区 SD31・32・33(南から)

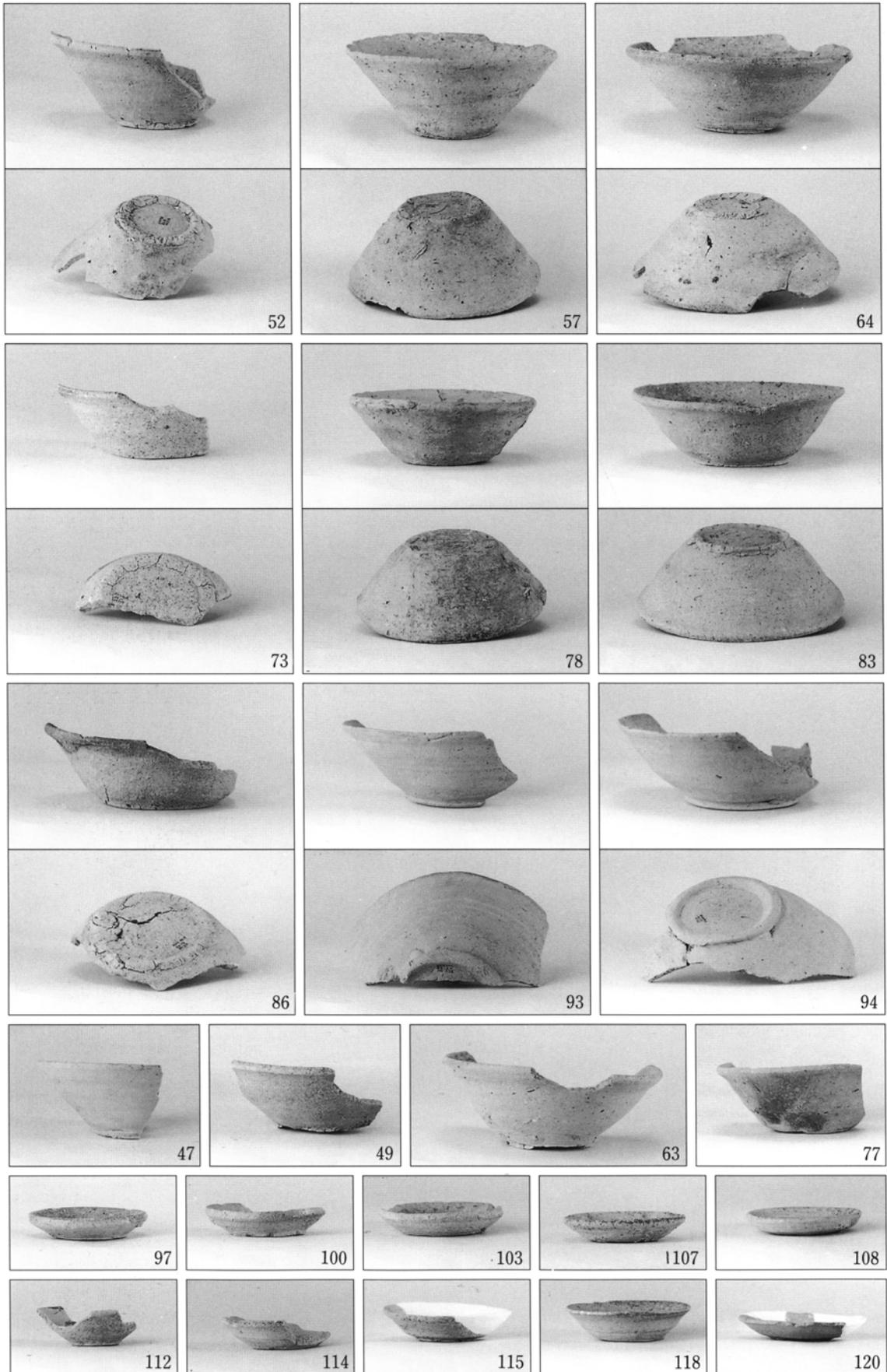


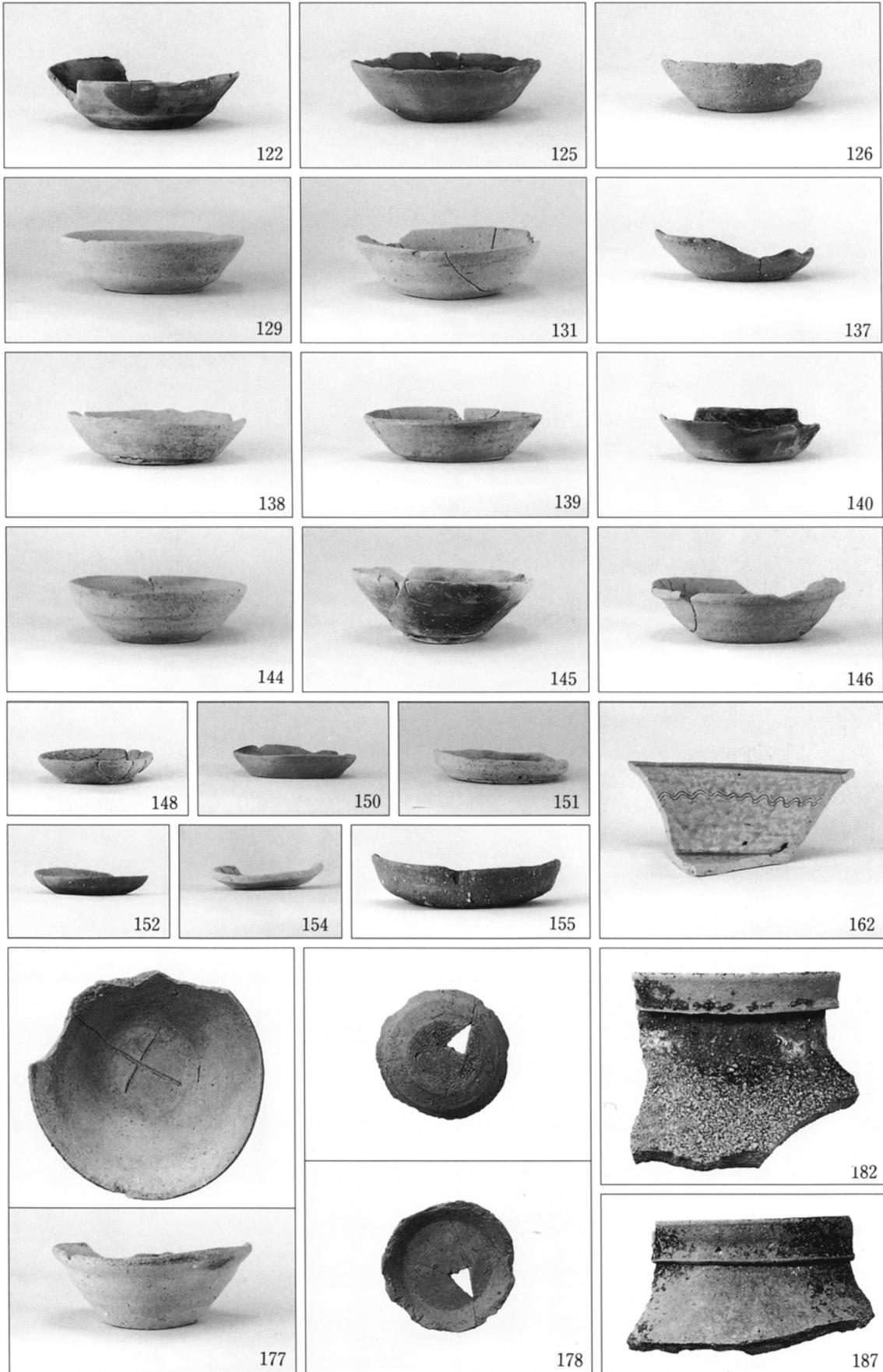
上：B区 SK31焼土土坑（南東から）
中：B区 SB03 P21セクション 下：B区 SK28（北西から）

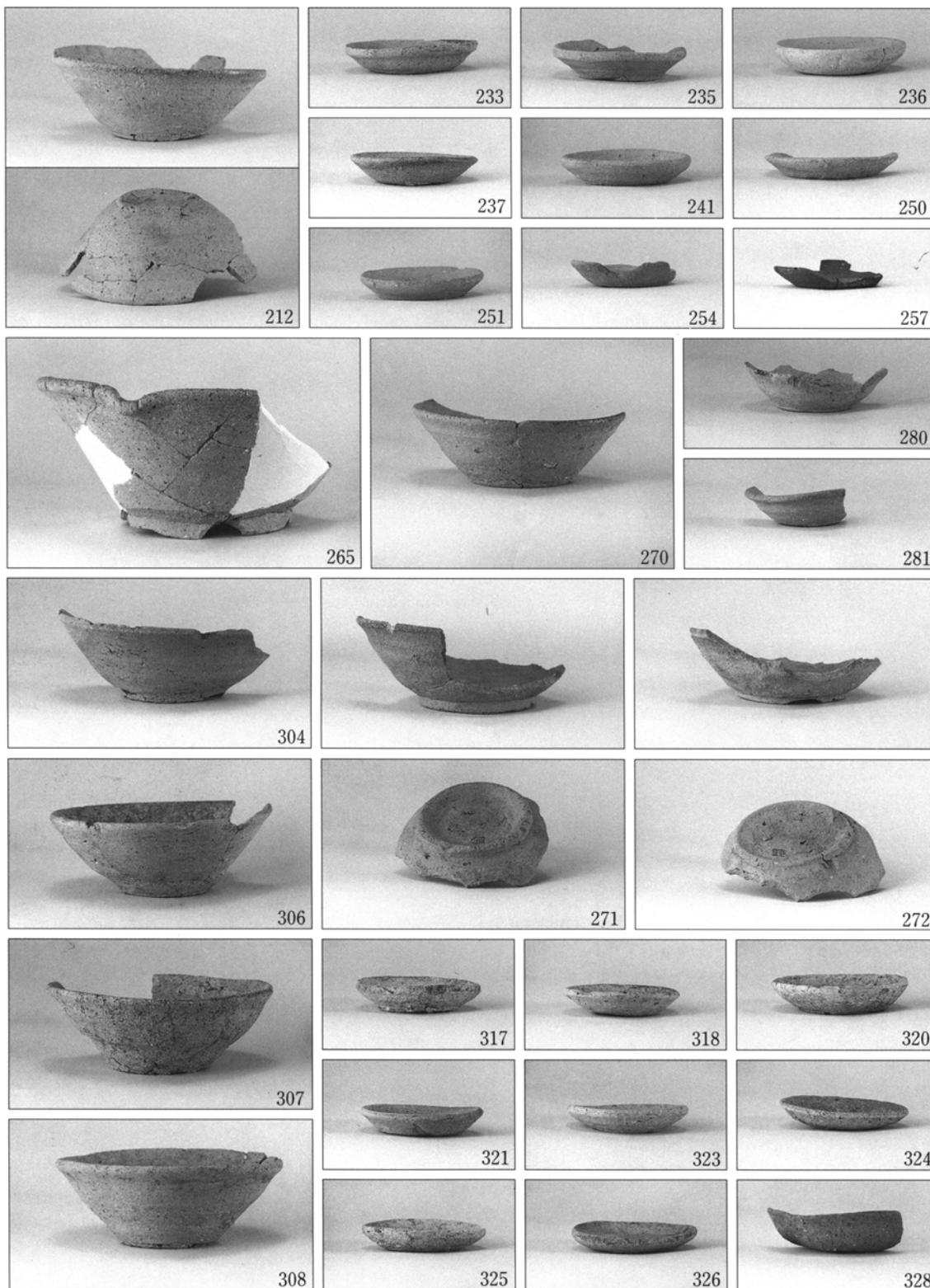
上：A区 SK03（西から） 下：A区 SK14セクション
中：C区 SA03 P94（北から）

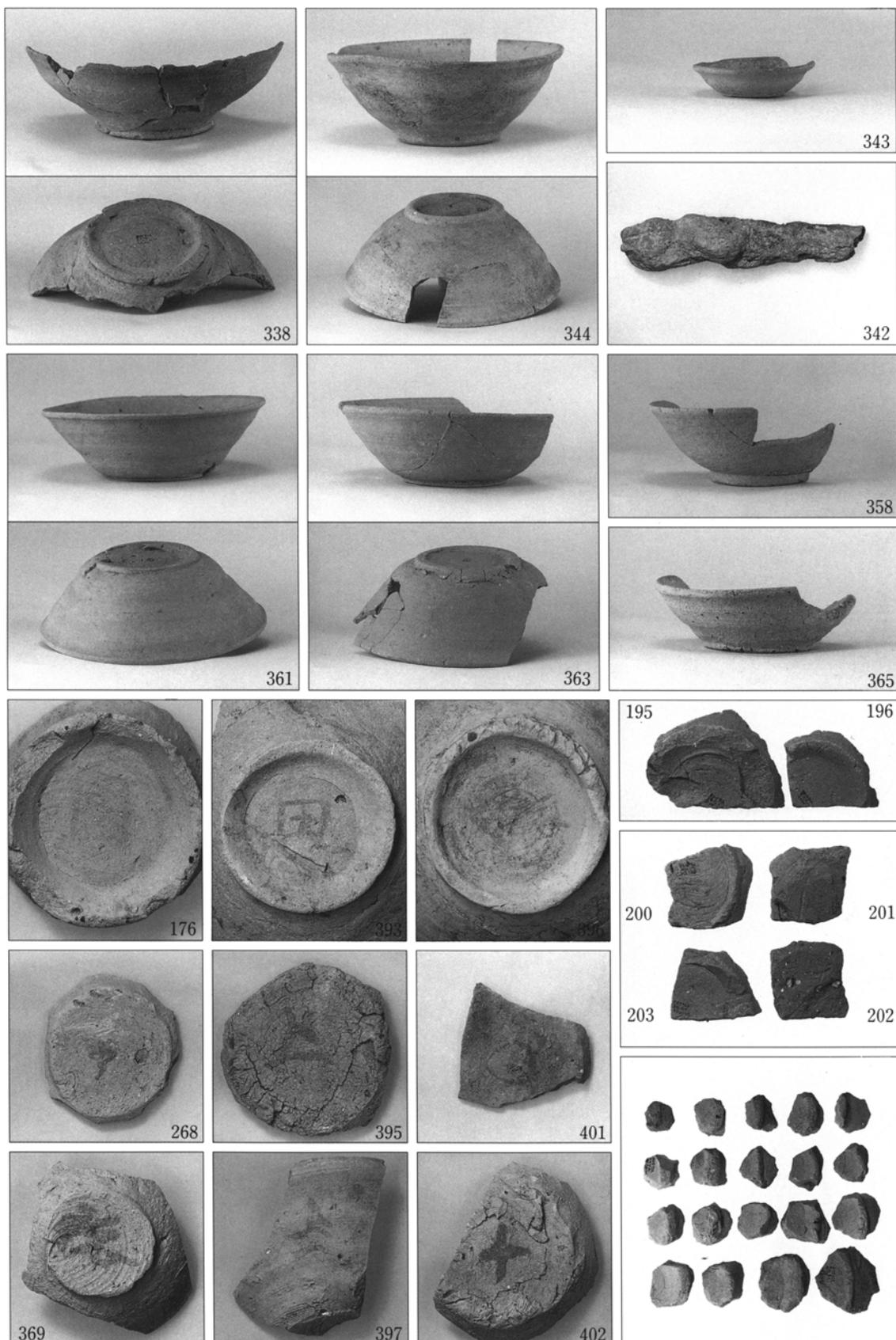












報告書抄録

ふりがな	うしのまついせき							
書名	牛ノ松遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第57集							
編著者名	宮腰健司・杉浦茂・服部俊之・川井啓介・三辻利一							
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL 0567-67-4163							
発行年	西暦1995年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
うしのまつ 牛ノ松	ぬかたぐんこうたちょう 額田郡幸田町 おおあぎすみあぎ 大字須美字 うしのまつ 牛ノ松	23501		34度 53分 47秒	137度 7分 48秒	19910701～ 19910930 19920401～ 19930228	500m ² 13,000m ²	国道23号バイパス建設のため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
牛ノ松	集落	旧石器～ 縄文時代		尖頭器・細石刃 細石核・削器 石鏃		旧石器時代末～縄文時代草創期のまとまった石器群を確認。		
		鎌倉～ 室町時代	区画溝 土坑墓 1基 堀立住建物 8棟 柵列 6条 その他土坑	灰釉系陶器 土師質土器皿 鍋 釜 常滑甕 宋三彩洗		谷地形を挟んで、東西に区画溝で囲まれた屋敷地を検出		

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第57集

牛ノ松遺跡

1995年3月31日

編集 財団法人
発行 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 共同印刷株式会社